ヘヴィーオブジェクト 電子数学の財宝

HEAVY OBJECT

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

イラスト・オブジェクトデザイン
凪良
NAGIRYO

か-12-29

ヘヴィーオブジェクト 電子数学の財宝

鎌池和馬

9784048705493

ISBN978-4-04-870549-3
C0193 ¥550E

1920193005509

ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 550 円
※消費税が別に加算されます

電撃文庫 ぶち抜け! メディアジャック文庫フェア

ミニスカサンタ!
お姫様と美人上官のミニスカサンタっ……!
俺達、この戦争が終わったらミニスカサンタとランデヴーするんだ!
近未来アクション!

電撃文庫

特製グッズ大プレゼント実施中! 詳しくはオビ折り返しをご覧ください

電撃文庫
¥
550

10月の新刊予定

アクセル・ワールド9 ―七千年の祈り―	川原 礫 イラスト／HIMA	キノの旅XV the Beautiful World	時雨沢恵一 イラスト／黒星紅白
灼眼のシャナXXII	高橋弥七郎 イラスト／いとうのいぢ	ロウきゅーぶ!⑨	蒼山サグ イラスト／てぃんくる
GENESISシリーズ 境界線上のホライゾンⅣ〈中〉	川上 稔 イラスト／さとやす(TENKY)	C³ -シーキューブ-XII	水瀬葉月 イラスト／さそりがため
はたらく魔王さま!3	和ヶ原聡司 イラスト／029	アイドライジング!③	広沢サカキ イラスト／CUTEG
俺ミーツリトルデビル!2 恋と人魚と露天風呂	峰守ひろかず イラスト／犬羽あん	ラッキーチャンス!10	有沢まみず イラスト／QP:flapper
小春原日和の育成日記④	五十嵐雄策 イラスト／西又 葵	竜と勇者と可愛げのない私5	志村一矢 イラスト／ぎん太
ブラック・ブレット2 VS神算鬼謀の狙撃兵	神崎紫電 イラスト／猫鍋沙樹	ハロー、ジーニアス③	優木カズヒロ イラスト／ナイロン
死想図書館のリヴル・ブランシェIV	折口良乃 イラスト／KeG	三井澄花と四角い悪魔	高遠豹介 イラスト／プリンプリン
楠木統十郎の災難な日々 ネギは世界を救う	南井大介 イラスト／イチゼン		

▶▶▶9月の新刊につきましては、オビ折り返しをご覧ください

発行●アスキー・メディアワークス

ヘヴィーオブジェクト 電子数学の財宝

ミニスカサンタ！　無表情だけどむしろその魅力がたまらないエリートお姫様と、何食べたらそんな爆乳になるのか不明な鬼上官フローレイティアさんのミニスカサンタが目の前にっ……！

いつも『はずれくじ』ばかりの不良兵士・クウェンサーとヘイヴィア。しかし彼らにも、ようやくご褒美が到来!?　戦場になった南半球オセアニア方面で、常夏のクリスマスパーティが開催された!!「俺達、この戦争が終わったらミニスカサンタとランデヴーするんだ……」

いったいどうなる近未来アクション！

か-12-29

ヘヴィーオブジェクト 電子数学の財宝

鎌池和馬

電撃文庫 ¥550

9784048705493

1920193005509

ISBN978-4-04-870549-3
C0193 ¥550E

ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 550 円
※消費税が別に加算されます

鎌池和馬（かまちかずま）

本日のレプリカント的観察日記。サイです。兵器の参考になりそうな動物、というと肉食動物を思い浮かべそうですが、デカい草食動物の足を研究して、あの体重をどうやって支えているのかを調べるのが巨大ロボット兵器実現の第一歩なのかも？

【電撃文庫作品】

とある魔術の禁書目録（インデックス）①～㉒
とある魔術の禁書目録（インデックス）SS①②
新約とある魔術の禁書目録（インデックス）①②
ヘヴィーオブジェクト
ヘヴィーオブジェクト 採用戦争
ヘヴィーオブジェクト 巨人達の影
ヘヴィーオブジェクト 電子数学の財宝

イラスト：凪良（なぎりょう）

バンダイナムコのゲーム『アルトネリコ』シリーズのキャラクターデザインをつとめる。電撃文庫では『シャーブ・エッジ』『F』（著／坂入慎一）、『アブラクサスの夢』（著／高橋弥七郎）などを担当する。個人サークル『S.E.C』でも活動中。http://www.sec.or.tv/

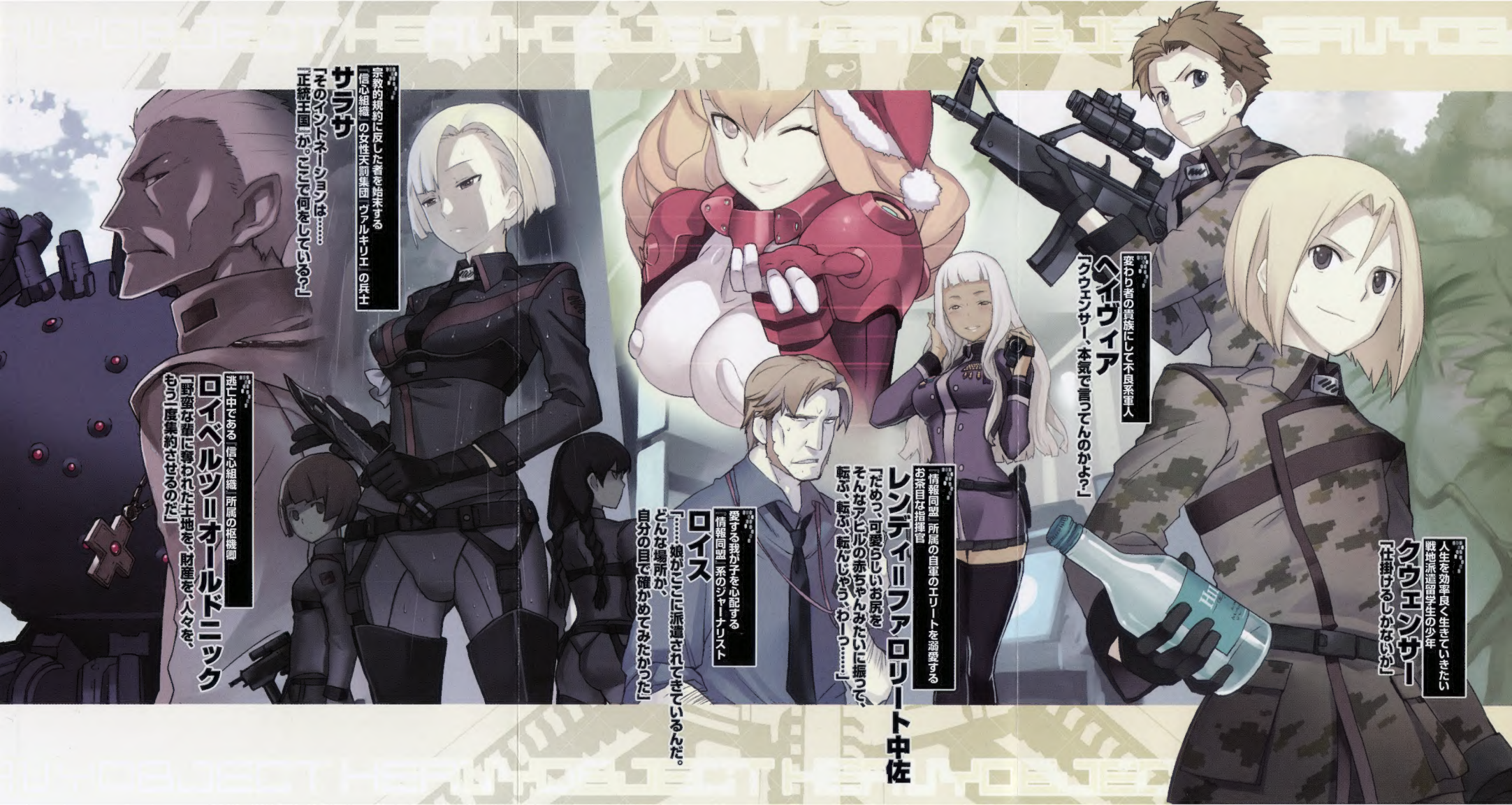
カバー／暁印刷

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI
イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO

結局、戦争はなくならなかった。
でも、変化はあった。
――超大型兵器オブジェクト。
それが、戦争の全てを変えた。

ヘヴィオブジェクト
HEAVY OBJECT

THEORETICAL WAR 電子数学の財宝


人生を効率良く生きていきたい戦地派遣留学生の少年
クウェンサー
「仕掛けるしかないか」
変わり者の貴族にして不良系軍人
ヘイヴィア
「クウェンサー、本気で言ってんのかよ？」
「情報同盟」所属の自軍のエリートを溺愛するお茶目な指揮官
レンディ＝ファロリート中佐
「だめっ、可愛らしいお尻をそんなアヒルの赤ちゃんみたいに振って、転ぶ、転ぶ、転んじゃう、わーっ……」
愛する我が子を心配する「情報同盟」系のジャーナリスト
ロイス
「……娘がここに派遣されてきているんだ。どんな場所か、自分の目で確かめてみたかった」
宗教的規約に反した者を始末する「信心組織」の女性天罰集団「ヴァルキリエ」の兵士
サラサ
「そのインネーションは……「正統王国」か。ここで何をしている？」
逃亡中である「信心組織」所属の枢機卿
ロイベルツ＝オールドニック
「野蛮な輩に奪われた土地を、財産を、人々を、もう一度集約させるのだ」

eye color / sky blur
belong / 37th C.M.B.
post / Elite
name / Milinda=Brantini
age / 14
weight / 39kg
sex / famale
hair color / blond
place of birth / unknown
body size / 79.56.80(cm)
height / 155m

歴史を動かせる。流れを変えられる。
持っている者と、持っていない者の違い。
それが、オブジェクトだ。

――とある僻地勤務の兵士のつぶやき

HEAVY OBJECT

THEORETICAL VEIN

ヘヴィーオブジェクト
電子数学の財宝

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

序章

何年に一度か、何十年に一度か。

繰り返してアナウンスされる、都市伝説のようなものがあるのは知ってるか？

そう。

近い将来、資源が枯渇する……という話だ。

だが実際、今のところはそんな事態になった試しはない。というか、そんな事態になったら人類は滅亡だ。在庫が綺麗になくなるまでご丁寧に分け合って全員で飢えるか、残り少ない資源を巡って殺し合いになり、資源が底を尽きる前に人類の方が滅びるかは知らんがね。

では、何故だろう。

資源がなくなる、という話自体は珍しくもない。それなりに信憑性だってあると思う。この地球では今もゆっくりと資源が製造されているが、明らかに消費量はそれを上回っている。

『いつか』『必ず』なくなるという話は不可避であるはずなのに、何故だか資源は底を尽きる事はない。

あれだけ馬鹿でかいオブジェクトを使った戦争が一向になくならないんだ。どれだけ資源が豊富で、どれだけ資源を恒常的に消費しているかは分かるだろう。資源はなくならない。地球という星の容積は限られているはずなのに、だ。

もう一度質問をしよう。

何故？

何度も何度もアナウンスされる『まことしやかな話』には何の根拠もないのか。今ある資源が枯渇しようという時に、新しい資源採掘場が都合良く見つかってくれるのか。

さて。

君はどう思う？

INDEX

000010 序　章

000012 第一章
青一色の海のはずだが
>>ロワイヨーテ方面非正規戦

000110 第二章
白い砂浜のクリスマス
>>オセアニア方面休暇駐留戦(?)

000182 第三章
真っ赤に染まる海の宝
>>ソロモン方面防衛戦

000284 終　章

【ディープオプティカル】DEEP OPTICAL

「資本企業」軍、「クライアントセキュリティ社」所属のオブジェクト。本国では「シャーベティ」と呼ばれている。

メインカラーリングは、灰色に近い青。最新第二世代の「ディープオプティカル」は球体状本体の真下に八本の脚を広げた、特殊な形状をしている。その八本全てがエアクッション機関として機能しており、水面であったとしても正確な水平を保つ海上戦闘特化型である。

主砲については、「ディープオプティカル」の右手側上部に巨大なレーザービーム砲が取り付けられ、球体状本体には八本もの太い円筒が主砲の台座を中心に時計の文字盤のように設置されている。その八本で生み出したエネルギーを集約し、巨大な一本のレーザー砲として機能する。

Designed by Hirokazu Watanabe(2725 Inc.)

第一章　青一色の海になるはずだが　〉〉ロワイヨーテ方面非正規戦

1

蒸し暑い空気。

バケツで頭から被せたような豪雨。

周囲一面に鬱蒼と生い茂る南国特有の木々の巨大な葉は、打楽器の連打にも似た轟音を鳴り響かせている。

洒落や冗談抜きに、ヘイヴィア＝ウィンチェルは首の調子を確かめたくなった。それぐらいの重みが常に頭に降りかかってくる。

「……クソッたれ。どこもかしこも泥臭せえな。珊瑚の海はどこ行きやがった」

時刻は日付が変わる直前。

人工的な明かりの一切ない暗闇は、頭上に立ちこめる分厚い雨雲のおかげで、月や星の光すら排除されてしまっている。

太い椰子の真下で屈んでいるヘイヴィアの隣には、同じような格好で、クウェンサー＝バーボタージュという少年が身を潜めていた。彼はライフルを所持していない代わりに、爆薬の詰まったバッグを背負っている。

「……お姫様が『信心組織』の第一世代吹っ飛ばしたらシャンパンパーティって話じゃなかったっけ？　何で俺達こんなトコで雨に打たれてセーシンシュギョーしてる訳？」

「追加の無線聞いてねえのかよ……」

ヘイヴィアはうんざりした調子で、

「このロワイヨーテ方面は、オセアニアの目と鼻の先にある諸島だ。そのオセアニアは、多国籍軍の攻撃で独裁政権が崩壊して、ただいま絶賛再興中だ。ここまでは分かるか」

「その独裁者を吹っ飛ばしたの俺達だしね」

確か、オセアニアは元々資源国だったため、採掘と精製のための設備さえ整えれば、後は自力で資金を稼ぐ事ができる、という話だったような気がする。

徐々にだが、オセアニア製の石炭や鉄鋼、プラチナなどは『正統王国』にも運ばれていたはずだ。それはつまり、ただ守られるだけの地域ではなく、対等の取引、商談のできる存在へとのし上がりつつある事をも示している。

「で、このロワイヨーテ方面は、オセアニア侵攻時にはオブジェクトの中継補給拠点として使われてた。その関係で、今もオセアニア製の資源は、一度ロワイヨーテ方面へ寄って、別の

船に積み替えてから世界中へ渡る事になってる」

「それがこの放置プレイとどう関係が？」

「……状況に余裕が出てくると、良からぬ事を考える馬鹿も出てくんのさ。例えば、積み替え作業を襲ったり、輸送船に乗り込んだりして、高価な資源を強奪しようとする連中とかな」

「……どう関係が……」

「報道関係じゃこぞってハイエナなんて呼んでやがるぜ。ま、オブジェクト全盛の『クリーンな時代』にこんなアナログなピクニックをされちゃ上のメンツも潰れる訳だし、そこで俺らの部隊に命令が飛んだ訳だ」

「どう関係があるってんだ!!　ハイエナとか知らないし！　これは戦争じゃなくて事件だろ。だったら制服警官でも連れてこいっての!!」

「命令なんだ。そもそもこんな不安定な場所に潔癖症の警官どもがやってくるかよ」

「……俺達の他にもオブジェクトあるじゃん。ここ、オセアニアのすぐ近くなんだろ？　多国籍軍の編成はまだ続いているんだから、オブジェクトだって……。海上のお掃除は『資本企業』の『ディープオプティカル』とかがやってなかったっけ？　ほら、レーザー技術の塊でさ、最新の第二世代でさー……」

「何で敵軍の兵器を思い浮かべてニヤニヤしてんだよテメェは……」

「とにかくこんなのは俺達の仕事じゃないよ！　なんていうか、インテリジェンスの匂いがし

ないっていうか、もっと、こう、俺達に似合うのはスマートな任務でさー!!」

『私だってさっさと寝たい』

と、指揮官のフローレイティアから通信が入ってきた。

『が、「何でもできる便利屋」なマルチロールの第一世代の悲しい性ね。対人戦や対車両戦も考慮に入れてるベイビーマグナムは、他の特化型第二世代と比べると「うってつけ」って評価を受ける訳。……ともあれ、島のプラチナ泥棒をさっさと潰してさっさと寝る。お前達、体を伏せて目を保護しろ。始めるぞ』

「……マジかよ。夏場のチョコレートよりぐっちゃぐちゃだぜ」

「お肌健康でピカピカになりすぎそう……」

敵兵と向かい合うような緊迫した状況ではないせいか、二人の反応が若干遅れた。

それが仇となる。

キュガッッッ!!!!!!　と。

直後に全ての闇が閃光に吹き散らされ、オブジェクトの砲撃が大地を焼いた。

第二七機動整備大隊所属の第一世代、『ベイビーマグナム』。

後部から延びる七本の主砲アームを中心に、本体に合計一〇〇門以上の巨砲を備える超大型

兵器。

今は主砲ではなく、球体状の本体の周囲に取り付けられた、大小様々な砲を撃っていた。

レーザービーム砲、連速ビーム砲、コイルガン、レールガン、下位安定式プラズマ砲。

それらが光のシャワーのように降り注いでいる訳だが、クウェンサーもヘイヴィアも、そのコンサート会場のような光景を悠長に眺めている事はできない。

「痛てぇ!!　くそ、光が目に刺さりやがるっ!!」

「その辺転がったって痛覚消える訳じゃない！　さっさと仕事するぞヘイヴィア!!」

意味もなく両目を擦りながら、クウェンサー達は前進する。

今現在、『ベイビーマグナム』が砲撃しているのは大体五キロぐらい先。ハイエナが装甲車や高速巡視艇などを隠している、海辺のトーチカだった。

膨大なスコールに混じって、親指ぐらいの石の塊がクウェンサーの足元に落ちる。

速乾コンクリートでできた、格納庫を兼ねたトーチカの一部分だ。

（……相変わらず、絶対敵に回したくない火力だな!!）

近づくのは怖いが、こっちもこっちでやらなければならない事がある。

「クウェンサー、例のキットは？」

「一〇分あれば七ヶ所には設置できる」

「急げよ。早くしねえとド派手な目覚まし時計に驚いたハイエナ連中がこっちに逃げてくるぜ」

という事なのだった。

クウェンサーが取り出したのは、『カーソル』と呼ばれる機材だ。全体的には直径五センチ、高さ二〇センチ程度の円筒形をしていて、部品のほとんどは強化プラスチック製である。

無線機と『カーソル』の周波数を確認し、それから円筒形の機材を辺りの木々に針金で縛り付けていく。

いくつかの『カーソル』を設置していると、ボトボトという鈍い音が聞こえてきた。

『ベイビーマグナム』の砲撃で粉々にされた、ヤシの木などだ。

「（……クウェンサー、伏せろ！　おもてなしの時間だぜ!!）」

「（……予定より早くないか？　まだ半分ぐらいしか設置していないぞ!!）」

「（……いつものパターンってヤツだ、とにかく伏せろ!!）」

ガサガサガサ、と周囲の下草が、豪雨とは無関係に震える。

（ハイエナか？）

クウェンサーは木々の陰に潜んで周囲を見回す。

聞いた話では、『ベイビーマグナム』の砲撃に驚いて逃げ惑うハイエナの連中を、待ち伏せして確実に仕留める、というのが今日のお仕事だったはずだが……。

それにしてはおかしい。

歩兵が歩くだけではこれほどの範囲で下草が揺れるはずがないし、そもそも、『ベイビーマ

グナム』が攻撃しているのは五キロ以上先の地点だ。こんなに早くここへやってくるとは思えない。

となると、

「……見ろよヘイヴィア」

「何だよ、頭上げんな。俺に後頭部ぶち抜いて欲しいのか」

「……あっちからギャラギャラ音立てて接近してきてるのって、戦車じゃない？」

ヘイヴィアは思わずヤシの木の幹を蹴飛ばし、そして爪先を押さえてうずくまった。

「（……あ・の・爆乳ウウウ

もちろん、手で投げて届く距離に近づく前に、戦車の方に勘付かれて軽機関銃の掃射を受ける可能性の方が高い。

「どうするヘイヴィア」

「ビールでも持ってって連中と一緒に乾杯してえな。殺し合いなんて間違ってるよ。世の中平和が一番だ」

「……平和主義って、大体負けてる側が唱えるもんだよね」

「やっぱ聞き入れてくれる訳ねえかあ」

豪雨ですっかり濡れ切った髪をくしゃくしゃと掻いて、ヘイヴィアはため息をついた。

「なら徹底的にやるしかねえだろ。クウェンサー、例のキットは？」

「カーソル？」

「そう」

ヘイヴィアは、クウェンサーがヤシの木にくくりつけていた機材を指差して、

「オブジェクトへ照準情報を送信するための赤外線トラップ。センサーの反応がオブジェクトのロック情報とダイレクトで繋がるから、百発百中で罠にかかった標的をぶち抜くっていう触れ込みなんだろ。さっさと見えないレーザーの網にかけて、バラバラに吹き飛ばしてもらおうぜ」

2

日付が変わった頃には、ハイエナの掃討は終わっていた。

「……ようやく『ベイビーマグナム』の砲撃が終わったみたいだね」

「目薬欲しい。目がおかしいぜ。なあクウェンサー、レーシック手術のパンフレットって整備基地にあると思うか？」

爆撃地点からいくつかの装甲車両が飛び出して来たようだったが、それらの大半も『ベイビーマグナム』のレーザービームが焼き払い、残ったものについても、拠点を包囲していた機動整備大隊の歩兵や機甲部隊が排除している。

『カーソル』を利用して吹き飛ばした戦車もその一部だ。

「……戦車より味方からの砲撃の方がよっぽど怖いよ。弾け飛んだ装甲板の破片で危うく死ぬトコだったぞ」

「爆発反応装甲とかヤバいよな。散らばったらただの地雷だぜ」

この時代、オブジェクトを保有する側の兵士とは、歩兵であって歩兵ではない。

照準関係の補正情報を送信する事で、間接的に超大型兵器の火力を利用できる兵士達は、戦場を圧倒的な速度で制圧していく。

それがたとえ虎の威を借る狐であったとしても、虎の牙や爪を存分に振るえるのであれば、

やはり勝利するのは狐の側なのだ。

……逆に言えば、現代では歩兵や戦車の争いにさえオブジェクトが介入し、その超大型兵器がなければ万全の力を振るえなくなっている事をも意味しているのだが。

豪雨で濡れる太い木の幹に背を預ける彼らの耳に、フローレイティアからの通信が入ってきた。

『作戦遂行ご苦労。ハイエナの活動及び再興が困難な数の被害は与えられた。一通り周囲を走査したら、そのまま帰って来い』

「（……どうせ帰ったら事後報告と兵器のメンテの時間だぜ、クウェンサー。俺ら下っ端が使ってねえような装甲車だの戦闘機だのってヤツまでな）」

『ん？　時間を潰すならハイエナの拠点捜索がお勧めよヘイヴィア。諜報部と一緒にやってみる？』

「やだよ!!　オブジェクトに蹂躙された敵拠点の調査なんて！　あの化け物は死体から尊厳すら奪っていくって有名じゃないですか!!」

『そんな都合の良いものでデコレーションされた死体なんぞ見た事がない。生クリームとストロベリーで飾り付けてほしいのか。ともあれ、嫌なら戻ってこい。お前達がちんたらやってると、監督役の私も休めないのよ』

「（……最後のが絶対本音だよな）」

『早く戻って来い』

一〇〇%聞こえているのか、断ち切るような声でフローレイティアが言った。

『……元々、お姫様が「信心組織」の第一世代を吹き飛ばした時点で休暇になっているはずだったんだ。私はさっさと部隊をオセアニアの珊瑚の海と白い砂浜に向かわせたい。……あのクソジジィども、残業は押し付けるくせに休暇の最終日はそのままと来た。つまりこうしている今も、一秒一秒休暇は減っているって訳よ。だからさっさと戻って来い一刻も早く!!』

一方的に通信が切られたが、クウェンサーやヘイヴィアの表情に不快感はなかった。

それ以上に有益な情報がもたらされたからだ。

「聞いたかヘイヴィア」

「これから部隊全体の休暇だって聞こえたぜ」

「オセアニアの珊瑚の海と白い砂浜って話だったよな」

「南半球の一二月は真夏で水着のシーズンだって話だぜ」

「……」

「……」

クウェンサーとヘイヴィアは互いの顔を見合わせた。

「つまり、それはつまり!!　俗に言う水着回ってヤツかヘイヴィア!!」

「お姫様の清楚水着と爆乳の放送禁止寸前水着のコラボレーションってヤツだぜクウェンサ

!!」

「だよな。そうだよな！　俺達だって休暇があって良いと思う。っていうか最近の俺達は働き過ぎなんだよ!!　何だ人間対オブジェクトって！　プロレスのデスマッチだってもうちょっと考えてから試合を組むわ!!」

「たまには教室でダベるだけの話があってもバチは当たらねえはずだぜ!!」

ばんざーい！　ばんざーい!!　と両手を上げて狂喜乱舞していた馬鹿（ばか）二人だったが、

ガシャガシャガシャ!!　と、全方位から金属質な音に取り囲まれた。

それは殺意を持った複数の人間がライフルの銃口（じゅうこう）を向けるものだった。

ばんざーい、の、ばんざ、ぐらいで動きが固まったクウェンサーとヘイヴィア。

構わず、地元の武装集団のリーダーらしき男はこう告げる。

「暇なら付き合ってくれよ」

3

『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』。

現代におけるクリーンな戦争とは、これら多数のオブジェクトを有する世界的勢力同士の小競り合いを意味する。圧倒的な火力であるオブジェクトとオブジェクトをぶつける事こそが重要であり、その他の兵科は全て、オブジェクトの運用をスムーズに実施するためだけに費やされる。

王政による完全な統治を掲げる『正統王国』。
情報の質と量で善悪を決定する『情報同盟』。
経済的活動が人命をも凌駕する『資本企業』。
信仰心によって社会を制御する『信心組織』。
国連の崩壊によって生まれた、新たなる『集合的組織』同士の対立は一向に終わる気配を見せない。終わらせる方法が分からないのか、終わらせたくない者がいるのかは不明だが。

さて。

オセアニア軍事国攻略の足掛かりとされた事から勘違いされやすいが、ハイエナが活動していたロワイヨーテ方面の島々は多数のオブジェクトを保有する世界的勢力に所属している訳ではない。

それらに属さない、半無政府状態の地域……いわゆる、『空白地帯』と呼ばれる区分になる。

もっとも、明確にどこかの勢力のカラーに染まっていなかったからこそ、普段はいがみ合っている多国籍軍の面々が『足掛かり』として使用する事ができたのだろうが。

つまり。

オセアニア軍事国攻略に協力していようが、再興中のオセアニアからの資源の中継地点となっていようが、根本的なところで、ロワイヨーテ方面に暮らす人々は、クウェンサー達『正統王国』の同朋という訳ではない。

そんな事もあって。

クウェンサーとヘイヴィアは後ろに回された両手を縛られ、頭に麻袋を被せられた状態で得体のしれない場所へ連行されていた。

頭の袋は取り外されるが、周囲を見回してもやはり場所は分からない。

「ぶはっ!?　くそ、これ元々土嚢のために使ってた袋だろう!!　泥で目詰まりしていて全然息ができなかったぞ!!」

「女のストッキングを被る趣味もねえ俺らに袋を被せるとは良い度胸だぜ!!」

噛みつくように叫んだが、胸板にライフルの銃口を押し付けられて二人はテンションを下げる。

「……何でよりにもよって有給休暇中に監禁されるかね、クソッたれが」

「……ハイエナとは完全な別組織だっただけでも幸運だったと思おうぜ。これがハイエナの残党だったら憎悪のはけ口にされてるぞ」

夜は明けていた。

早朝、日の入り直後の、湿気を含む涼しげな空気が辺りを包む。
とはいえ未だに雨は止まず、頭上の天井からは打楽器を叩くような音が続いている。
クウェンサー達がいるのは西欧風のログハウスとはまた違う、丸太と大きな葉を組み合わせて作られた木造家屋だった。その中心にクウェンサーとヘイヴィアの二人は座らされ、その周囲には浅黒い肌の男達が円陣を組むような格好で突っ立っていた。ご丁寧に、全員占びた型のライフルを所持している。
「……せめてヤシの葉ビキニの姉ちゃんに取り囲まれるんならさー」
「……甘い夢見るなよヘイヴィア。っていうか、多分それやったらデリケートな部分が硬い葉の端でズタズタになるんじゃないか？」
「そろそろ本題に入っても良いか」
ボソッとした声が飛んできた。
銃器から無線機、不味いレーションに至るまで装備を全て没収された馬鹿二人の真正面にドカリと腰を下ろしたのは、おそらく彼らのリーダー格なのだろう。
もしくは、彼しか『正統王国』の人間に通じる言葉を使える者がいないのかもしれない。
「五体満足でここまで招待した事を、我々の誠意と受け取ってもらいたい」
「身の代金の話ならやめてくれ」
ぴしゃりと言ったのはヘイヴィアだ。

「うちは生憎と、血統と名誉を重んじる『貴族』サマでね。そんな事になったらまず間違いなく『家』は俺を見捨てる。戦って死ねって言われるのがオチさ。お互い無駄な事は省こうぜ」

「うちは『平民』ね。月給二〇〇〇ユーロで払える程度の額しか出てこないと思うよ」

「我々はあなた方の素性を理解している。その減らず口も合わせて」

リーダーは特に調子を乱される事もなく、すらすらと言う。

「クウェンサー＝バーボタージュ。ヘイヴィア＝ウィンチェル。……共に『正統王国』第二七機動整備大隊に所属し、生身であのオブジェクトを何機も大破させてきた戦績を誇る」

「……、」

「……、」

大体、彼らの言いたい事が分かってきたクウェンサー達は、重たい息を吐く。

「先に言っておくけど、新聞とかゴシップサイトに書いてある事の八割は嘘だからね」

「それが全部真実なら俺らグーパンチで第二世代を薙ぎ払える事になっちまうぞ」

やはりリーダーは構わずに続けた。

「要求は一つ」

きっぱりと、

「このロワイヨーテ方面に駐留している『資本企業』軍の第二世代……あなた方の言うところの『ディープオプティカル』を、粉々に吹き飛ばしていただきたい」

ひくっ、とクウェンサーの口元が引きつった。

近くにいるらしい『ディープオプティカル』について、一度遠くからでも観察してみたかった……のだが、まさかこんな話になるとは思ってもいなかった。

「おいおいおい」

ヘイヴィアが遮るように言った。

「テメェらがどこでどんな無茶苦茶な噂を聞きつけてきたかは知らねえがな、俺らはただの生身の人間なんだよ!!　あんな怪物兵器の前にポンと出されたって、そうそう簡単に奇跡なんか起こりゃしねえ。俺らを特殊合金でできたアンドロイドか何かと勘違いしてんじゃねえのか!?」

「……、」

「そもそも、敵の敵は味方、なんて甘い事考えてんじゃねえぞ!!　オブジェクトを相手にする以上、これは戦争だ！　俺らの一存で、『正統王国』と『資本企業』を争わせる訳にはいかねえんだよ!!」

リーダーは、パチンと指を鳴らした。

周囲を取り囲む男達の一人が、ヘイヴィアの頬にライフルの銃口を押し付ける。

「敵の敵は？」

「み、味方でしゅ！　やらせていただきましゅ!!　え、えへへ」

世界で一番不細工な事になっている愛想笑い男へイヴィアは使い物にならなさそうなので、クウェンサーは視界に入れない事にした。

リーダーは言う。

「『ディープオプティカル』は海上戦闘特化型の第二世代で、現在進行中の整備が終わればオセアニア周辺の権益を巡って戦闘行動に入るはず。つまり、あなた達にも今の内に倒すべき理由はある」

「……そっちにとっては？」

クウェンサーは質問した。

「単にオブジェクトを保有する勢力が我がもの顔をするのが気に食わない、っていうなら、『ベイビーマグナム』を支えている俺達だって同じはずだ。何故、『ディープオプティカル』を真っ先に狙う」

「『空白地帯』にも『空白地帯』の事情がある」

リーダーの男はそんな事を言った。

「信じてもらえるかどうかは関係ないが、我々に『正統王国』や『ベイビーマグナム』を攻撃する意思も理由もない。故に、我々はあなた方に協力をお願いしているのだ。……『命令』にしないところに、我々の善意を感じてもらいたいのだが？」

（……お願い、ね）

ライフルを持った一〇人以上の男達に取り囲まれたこの状況で、素直にそれを信じる人間がいたら、相当の正直者か、人格に致命的なバグがあるとしか思えない。

「すると、『ディープオプティカル』には、攻撃する意思も理由もあると？」

「……説明するのは簡単だが」

リーダーは一度、わずかに目線をクウェンサーから外して、

「実際に見てもらった方が分かりやすいだろう」

4

相変わらず、外はひどいスコールだった。

木造家屋の外に出ると、ここが森の中の一角を切り拓いて作られた場所で、似たような家屋が何軒か集まっているのが分かる。

周囲を有刺鉄線で囲んであったり、木造の物見やぐらがあったりする事から、ここがまっとうな施設ではないのは一目瞭然だ。

ぬかるんだ赤土の上を歩き、別の家屋へと案内されたクウェンサーとヘイヴィアは、入口から中を覗き込んだ事を一瞬本気で後悔した。

立ちすくむ二人に、背後からリーダーが告げる。

「……『ディープオプティカル』の行動の、副産物のようなものだ」

決して広くない空間に、所狭しと並べられた小さなベッド。

呻き声。

清潔とは言えない包帯。

妙な匂いは、消毒薬の代わりに、自生している薬草でも使っているからか。

「『資本企業』は整備基地やインフラ施設周辺の防衛、武装勢力の排除、そうした名目で、このロワイヨーテ方面内部でも作戦行動を実行している。諸島の周囲海域を移動し、島へ砲撃する形で」

「……、」

「実際には適度な緊張感を演出し、スポンサー会社から国防費の追加予算を下ろすための工作であると聞いている。あなた達と違って、明確な『敵』を排除している訳ではないのだ。彼らはただ、何もない場所に向けてノルマのようにレーザーを発射しているだけだ」

リーダーは淡々と言う。

「しかし、国中で放たれているのはレーザー……それも、核より便利で核より強力と呼ばれる、あのオブジェクトの兵装だ。存在しない敵を撃つために、どれほどの二次的被害が生じているかは説明するまでもないだろう。さっきも言った通り……見てもらった方が分かりやすい」

小さなベッドで寝かされているのは、リーダーと同じ浅黒い肌をした子供達だった。

下は一〇歳前後、上は一五歳程度か。共通する項目は他にもある。包帯が巻かれている、なんて甘い話ではない。

足りない。

五体満足のクウェンサー達と違って、明確に。

「……あなた方には、これを止めていただきたい」

リーダーはそう言った。

自分の手で事態を解決できない負い目があるせいか、その声はどこか沈んでいた。

「『資本企業』軍の第二世代、『ディープオプティカル』の破壊に協力してはくれないか」

5

クウェンサーとヘイヴィアの二人は、木造家屋から外へ出た。

豪雨が収まる様子はない。

ブーツの底が沈んでいくかのようなぬかるんだ赤土を気味悪そうに踏みながら、ヘイヴィアは息を吐いた。

「……今なら逃げられるんじゃねえか」

「物見やぐらに狙撃銃持った見張りが立ってるのに？　よしんば監視の目をかいくぐったっ

て、整備基地までどれだけあるんだ。オフロードカーで山狩りされたら、あっという間に追い着かれるぞ」

「だよなあ。言ってみただけだ。こうなりゃ爆乳待ちかね。連中の規模自体は大したもんじゃねえ。最新装備で固めた歩兵が一〇人に支援用の攻撃ヘリを一機でも飛ばしてくれりゃ余裕で制圧できるはずだぜ」

「……そんな時間をあの武装勢力が与えてくれるかね。あとフローレイティアさんが最優先で捜索の指示を出してくれているかどうかも分からない」

「だとすりゃどうする？」

ヘイヴィアの質問に、クウェンサーはわずかに黙った。

それから、言う。

「『資本企業』の第二世代……『ディープオプティカル』だっけ？　聞いた事ある？」

「爆乳の愚痴程度なら。例の休暇が終わったら、次辺りにぶつかる相手じゃねえの。表面上はオセアニア再興のために協力しているが、そろそろ『余裕』ってのができ始めてる。つまり、資源国のオセアニア周辺じゃ、軽い衝突も起き始めているって訳だ」

ヘイヴィアはそんな事を答えた。

「あくまで非公式だが、諜報部なんかじゃ『ディープオプティカル』に対する偵察活動なんかも始められている。もちろん、『次に潰すべき相手』だなんて喧伝できねえから、バレたら

懲罰ものだけどな」

「となると……バレちゃならない『偵察活動』を行う事自体は悪い提案ではないって事か」

「クウェンサー、本気で言ってんのかよ？」

ヘイヴィアはうんざりしたように言った

しかし、その表面上のポーズの奥には、うっすらと怯えの感情が覗いている。

「オブジェクトだぜ。あいつら、俺らにあの怪物と戦えって言ってんだぞ!?　頭の後ろにライフルを押し付けてな!!　そんなもんに協力して死ぬなんてごめんだ！　俺らはただの人間なんだよ!!　両手を前に突き出すだけで得体のしれないビームが出るようなスーパーヒーローじゃねえんだ!!　知恵を絞る必要なんかねえ。『ディープオプティカル』ってのが具体的にどんな怪物か知らねえが、戦えば地獄になるのは間違いねえ。だったら、その力をこの武装集団の砦に注いじまった方が楽に生き残れる!!」

「……」

「そもそも、オブジェクトまで近づけるかどうかも分からねえんだぜ!!　正規のサポートを受けている訳でもない。武装勢力の持っている情報なんて古くて使えねえかもしれねえ。武器や装備だって潤沢な訳じゃねえ!!　プロの指揮官や電子シミュレート部門があらゆる数値と睨めっこして構築した作戦なんてもんもねえんだ!!　挙げ句に『正統王国』の庇護がないからクリーンな戦争のセオリーなんて通じねえ　両手上げたって撃ち抜かれるし、捕まったら捕虜に

関する条約なんて全く通用しねえ。それが何を意味してるか分かってんのかよ!?」
「まともな状況じゃないのは俺も分かってるよ」
クウェンサーは濡れた前髪を鬱陶しそうにかき分け、
「……ただ、ヘイヴィアも『あれ』を見ただろ」
「理由にならねえよ」
ヘイヴィアは首を横に振った。
「確かにここでは悲劇があった。でも、それが俺らの命を危険にさらす理由になんかならねえ！　俺は正義の味方をやるために軍に入った訳じゃねえ。『貴族』として武勲を立てるためなんだ。テメェだってオブジェクトの設計を学ぶためにやってきた『学生』だろ!!　だったらその力はもっと別の所で使うべきじゃねえのか!?」
「ヘイヴィア」
クウェンサーは軽く息を吐いて、
「本気でそう思ってるなら、何も言わずに一人で逃げる算段を立てているんじゃないのか？」
「俺は……」
クウェンサーは周囲を見回し、物見やぐらの兵士がこちらを眺めているのを確認しながら、
「どっちみち、今のままじゃ整備基地ベースゾーンには帰れない。いつかは『ディープオプティカル』に対処する必要もある。だったら今やるのも悪くないんじゃないか。……幸い、非公

式の偵察活動っていう前例はあるようだしな」

「……個人としちゃ一理あるのは分かるんだがよ」

ヘイヴィアはまだ踏ん切りがつかないような様子で、

「組織としちゃまずいんじゃねえの。軍隊行動としてはさ」

「俺は『軍人』じゃなくて『学生』だし」

「……チッ、自分だけ逃げ道用意しやがって。言っておくが、その言い訳はいつでも便利に使えると思うなよ」

「ヘイヴィアの意見は？」

クウェンサーが質問しても、ヘイヴィアはしばらく答えなかった。

口の中で何かをモゴモゴさせ、悩み、

「やるよ。クソッたれ、やってやるよ!!　ただし地獄へ突っ込むのは俺だけじゃねえからな!!」

そこまで叫ぶと、彼は荒い息を吐きながらも、わずかに語調を落とす。

「……どうせそれしか道はねえ訳だしな。これは手足を失ったガキどものためだ。……元々、『貴族』としての箔をつけるために軍へ入ったんだ。多少回り道にはなるが、こういう美談があった方が『家』の連中叩き伏せるのに有効かもしれねえからな」

よし、とクウェンサーは一度だけ心の中で呟いた。

覚悟さえ決まってしまえば後はいつも通り、死神から地獄行きの片道切符をもらうだけだ。
「それじゃクウェンサー、あの連中に使える武器がねえか聞くところから始めようぜ。元々、通常業務に残業までやった後に捕まった訳だしな。装備を返してもらうだけじゃどう考えたって弾薬が足りねえ」
「そうだな。ただ」
クウェンサーは遮るように言う。
馬鹿にしては珍しく、殺意に似た感情を込めながら。
「一つだけ、あいつらに確認しなきゃならない事がある」

6

申し出を受ける事を告げると、リーダーは木造家屋の一つにクウェンサー達を案内した。
そこにあったのは、いくつもの金属製のコンテナだ。
「装備や火器には『資本企業』のものがそのまま使える」
「？」
「『ディープオプティカル』の整備部隊は、輸送機で空中から補給を受けている。パラシュートを使ってコンテナを投下している訳だ。でも、全部が全部狙ったように落ちる訳じゃない。

風で大きく流されたコンテナは、こうして第三者が拾う事もできる。もっとも、ハイテク過ぎるものは我々には不向きだがね」

「なるほど」

「『資本企業』っつーと、クソ、貫通力の低い五・五六ミリか。まぁ良い。ついでに軍服も借りて行こうぜ。騙し切れるとは思えねえが、『正統王国』のをそのまま着ているよりは撃たれにくいだろ」

「……『ハンドアックス』に似た性質の爆薬があれば良いんだけどな」

ブツブツ言いながらも、二人はコンテナの扉を開けて、中から必要な装備を取り出していく。その間も、当然ながら浅黒い肌の男達はクウェンサー達に銃口を向けていた。

だが死角はある。

例えば、開いたコンテナの扉の裏。

粘土のような爆薬を取り付け、千切れた鋼鉄の扉の破片が男達へ向かうように調整する事もできるのだ。

（三秒後）

「サインが見え見えだ」

リーダーが言うと、周囲の男達が慌ててライフルを構え直した。

彼は目を細めて、クウェンサー達に告ねる。

「どういうつもりだ？」
「この状況でも、爆破すれば吹き飛ばされるのはお前達だ。ついでに言えば、コンテナの中にいる俺達は破片も圧力も一切受けないように考えている」
「どういうつもりかと聞いている」
冷静にリーダーは繰り返した。
この場のメンバーを皆殺しにしても、施設の周囲には警備の兵隊が大勢いる。彼らが爆発に気づいて駆けつければ、間違いなくクウェンサー達が追い詰められる事を理解しているのだ。
クウェンサーとしても、ここから力業で逃げるつもりはない。
「こんな茶番でもしないと、質問に答えてくれなさそうだったので。その胸糞悪い奇麗ごとじゃなくて、メッキの剝がれた生々しい回答をな」
「……聞きたい事は？」
質問には、若干の間があった。
嫌な予感、というのを彼も感じているのかもしれない。
構わずにクウェンサーは言う。
「『ディープオプティカル』の無意味な襲撃のせいで、子供達は手足を失った。そういう話だったな」
「それが？」

「そんな訳ねえだろ」

きっぱりと言ったのは、ヘイヴィアだった。

「たとえ旧型の第一世代であっても、オブジェクトの砲撃には容赦がない。流れ弾なんて喰らったら、まともな形の死体すら残らねえんだ。あんな半端な形で、俺らに『死体よりも痛みを与える』ようなレベルの傷が、そうそう何十人分も作られるはずがねえ」

「……無線でも傍受したのか、それとも他の方法があるのか、アンタ達は、かなり早い段階から『正統王国』の第二七機動整備大隊がロワイヨーテ方面へやってくる事を摑んでいた」

クウェンサーは、自分の息が浅くなるのを感じた。

自分で思っているより、感情をコントロールできていないのかもしれない。

「その上で、アンタ達は作ったんだ。俺とヘイヴィアが、思わずアンタ達に協力しようと思ってしまうような『材料』を。……あれがオブジェクトによる傷口じゃないんだとしたら、他の要因は一つしかない」

一度、大きく息を吸う。

気分は晴れない。

それでも、言う。

「あの子達は、アンタの手で切り刻まれた。……そういう事なんだろう？」

「……」

リーダーは、しばらく黙っていた。
やがて、彼もまた、大きく息を吸って告げる。
「その通りだ」
「どうして」
クウェンサーは呟いた。
それは、すぐに大きな叫び声に変わった。
「そうまでして俺達を『ディープオプティカル』にぶつけたいのか!!　ただの『学生』と『歩兵』の二人組に!!　お涙頂戴の美談を作り上げて、『ディープオプティカル』を悪者にして！　そんな事に何の価値がある!!」
「あなた達は何も分かっていない!!」
リーダーも、言葉で押し返すように語気を荒げた。
「分かりやすい美談を作らなければならなかったのは、そうしなければいけない理由があるからだ！　自分の子供達を、次へと繋がる世代へ自ら刃物を突き立てなければならなかった者の気持ちなど、言葉で言って分かるものではないんだ!!」
「どんな理由なら……!!」
「実際は!!　あんなものじゃないんだ!!」
その一言で、場の空気が一気に停止した。

リーダーは荒い息を吐きながら、さらに言う。

「あなたの言ったように、オブジェクトの流れ弾が本当に当たれば、目で見て分かるような死体すらも残らなくなる。……実際、あなた方は分かっていないだろう。見えてはいないだろう。この国で起こっている、『ディープオプティカル』の本当の蹂躙を」

「見えないから、見えるようにした」

ヘイヴィアが、呻くように呟く。

「分かりやすいレベルに落とす事で、ようやく俺らを議論の場まで引きずり上げた。そんな言葉で正当化するつもりなのかよ……？」

「先に言っておくが、我々から強要した事は一回もない。あの悲劇は、全て志願によって編成されている」

負い目は自覚しているのか、リーダーは若干の早口で言った。

「しかし、実際にはあの何十倍、何百倍もの悲劇が起きている。このロワイヨーテ方面で、今現在も。……言ってはなんだが、この程度の傷口で怒りを覚えているのなら、あなた達はもっと激怒した方が良い。『目に見えないレベルまで』引き上げられた彼らの蹂躙は、もうそのクラスに達している」

「良いだろう」

クウェンサーは呟くように言う。

「どっちみち、『ディープオプティカル』とぶつかるのは早いか遅いかの違いだ。……ついでに結果次第では賞罰に関わりそうだけどな。それについては目を瞑る。ただし、ハッピーエンドで終わると思うな」

「……、」

「理由はどうあれ、アンタ達はここまで踏み込んだ。そのツケを払う時は、必ずやってくる事を忘れるなよ」

7

そんな訳で、クウェンサーとヘイヴィアは久しぶりに有刺鉄線で囲まれた赤土の外へと出る事ができた。

『資本企業』軍の制服と火器で身を固めた二人が歩いているのは、深いジャングルの中。連日続くスコールでほとんど小川のようになった木々の隙間を、できるだけ痕跡を残さないように歩いていく。

「金も出ねえ。美人もいねえ。これでチャチなライフル抱えて第二世代と戦えだとよ」

「多分ここで貯金した分が後で大盤振る舞いされる日が来るよ水着回とかで」

ブツブツ言っていた二人だったが、やがて、彼らの声のトーンがわずかに下がる。

「……どう思う？」

「黙って逃がすつもりはねえだろ。一定の距離を開けてこっちを観察してる。いくつか『視線の元』は辿れそうだが、全部把握できてる保証はねえ。地元の連中の方が隠れるのは上手そうだしな」

「……俺達を監視するのは結構だけど、位置を言ってくれないとこっちは全部『所属不明』で対処しかねないよね」

今回はお目付け役のフローレイティアがいないので、クウェンサーも比較的反動の少ないカミリのサブマシンガンをスリングベルトで提げている。

「良いんじゃねえの？」

と言ったのは、クウェンサーと違ってガンオイルの匂いにも慣れたヘイヴィアだ。

「間違ったら間違った、だ。……正直、あいつらを守る気なんて最初っからねえしな。誤射しても面倒事が減ったぐらいの感覚しか湧かねえよ」

程度の差こそあれ、やはりクウェンサー達もよそ者で、『ディープオプティカル』と本質は変わっていないのかもしれない。

とはいえ、クウェンサーやヘイヴィアの場合、そもそもの出発点からして悪印象を抱く以外の道がない訳だが……。

「目的地までは？」

「ざっと、五キロ。だがこの豪雨とぬかるんだ赤土だ。まともな車じゃ足を取られるだけだし、馬力がありすぎると音で勘付かれる。……電気駆動でもありゃ良いんだがな」

「そんな調子だと、敵さんも動きたがらないかもな。書類の上では巡回ルートが決まっていようが、末端の連中まで規則正しく守っているとは限らないし」

「検問所のログハウスで3Dのポルノ映画でも観ている事を祈ろうぜ。ま、同じ給料しか払われないのに、来るかどうか分からない敵兵のために上砂崩れ覚悟で見回りを続けるようなヤツは早死にするだけだろうがな」

指揮官のフローレイティア辺りが聞いたら頭を抱えそうな台詞だが、オブジェクト全盛の『クリーンな戦場』の実情などこんなものである。

「ともあれ、目的は整備基地じゃなくて『ディープオプティカル』だ。こんな所でちんたらやってねえでさっさと近づこうぜ。第一ステップで手間取ってるようじゃ……」

「ヘイヴィア」

と、クウェンサーが足元に視線を落としながら呟いた。

ヘイヴィアは怪訝な顔で、

「何だよ。この泥ん中で自分の足跡でも気にしてんのか？　よせよ神経質にならなくったって一〇分で洗い流されるぜ」

「そうじゃない。……何か四角いのが顔覗かせてるんだけど」

「あん？」

改めてヘイヴィアがクウェンサーの視線の先を凝視してみると、赤土の泥の中から、確かにプラスチックのようなものが飛び出ている、ちょっとした、パソコン用のＡＣアダプターぐらいの大きさの箱だ。

「……ヤベえな。対人地雷じゃねえか？　しかも非金属のいやらしいタイプだ。磁気系の地雷探知機を潜り抜けて起爆するヤツだぜ」

「連中、こんなの言ってなかったよな!?　地雷があるならあるって言えっての!!」

当然ながら、地雷というのは隠さないと意味がない。しかし仕掛けた側が分かるように仕掛けないと、自分達の足を吹き飛ばす事になる。

なので、普通なら木々に『サイン』などを施し、安全なエリアと危険なエリアを区分けするものなのだが……、

「この雨だ。本来の『サイン』の範囲の外まで地雷が流れてんだぜ、きっと」

「もう仕掛けた側も仕掛けられた側も場所分からないって事？　そんな中を一五キロも歩けって!?」

「連中にとっちゃ『報告するまでもない日々』なんだろ。当然、足を吹っ飛ばす事も合わせてな」

ヘイヴィアはうんざりしたような調子で、

「それにしても、今時の戦争ってのはオブジェクトとオブジェクトをぶつけるもんじゃねえのかよ。人の足を吹き飛ばすための地雷なんか使いやがって。クリーンな戦争はどこ行きやがった」

言いながら、ヘイヴィアはアサルトライフルのセンサーのスイッチへ手を伸ばす。

クウェンサーは眉をひそめ、

「……地雷探知機ダメだって言ってなかった？」

「磁気系を使わなきゃ良いのさ」

「センサーのバッテリーが底を尽きた時が命日だな……」

という訳で、ヘイヴィアが先導する形で二人はさらに森の奥へと進む。

土砂降りのスコールのおかげか虫などは少ないが、時間が経つにつれて早朝特有の冷気は失われていく。後に残るのは換気扇を回さない風呂場に溜まったような、不快な熱気だけだ。

彼らの予想通り、『資本企業』軍の兵士達はあまり熱心に見回りを行っていないようだった。歩兵の足跡ならともかく、流石に車両のわだちはすぐには消えない。しかし、そういったものがほとんど見当たらないのだ。

「あっちもこっちもドロドロ。どこが崩れるか分かったもんじゃねえぜ」

「地雷に土砂崩れの危険っていうんじゃ、見回りを嫌うのも当然か。誰だって、生死を分ける面倒事はオブジェクトと操縦士エリートに押し付けたいだろうし」

ヘイヴィアは必要最低限の情報しか入っていない『資本企業』製の携帯端末に目をやりながら、

「……そろそろ、一番外側の検問が守る防衛ラインを越えたんじゃねえか？」

森というよりほとんど山に近くなってきた。

地面に傾斜ができた事で、さらに足元を流れる雨水の勢いが増す。

クウェンサーは耐水性の軍服のポケットから透明な袋を取り出し、

「ちくしょう、『資本企業』のレーションは美味いな。ハンバーグみたいな味がする」

「よせよ。そこで感動すると帰ってからが辛えぞ。……っと？」

クウェンサーとヘイヴィアの二人はそこで動きを止め、ゆっくりと屈み込んだ。

三〇〇メートルほど先。

森の木々と土砂降りのスコールのせいで分かりにくいが、太い幹の下でじっと息を潜めている影がある。

数は、ここから分かるだけで……。

全員が同じような格好や銃で身を固めているところから、所属も一緒だろう。

女性しかいないのも部隊の配置の関係だろうか。

ここからではおそらく聞かれる事はないと思いつつも、クウェンサーは小声でヘイヴィアに話しかける。

「（……こっちには気づいていないみたいだけど、『資本企業』かな？）」
「（……違うな。見ろよあの銃。『信心組織』の連中だ。それも短距離狙撃ライフルなんてもんを持ってやがるとなると……）」
「（……短距離で、狙撃？）」
「（……市街地で人質を取った強盗なんかを撃ち抜くためのもんだ。貫通力も意図的に低くして、流れ弾が周りへ被害を出さねえように考慮されてる）」
「（……弾が体の中に残るようにって事は、ターゲットの傷口が一番ひどくなるように設計されているんだね）」
遠方の影が、小さく首を振った。
クウェンサーとヘイヴィアは迂闊に動かない。小さな動きでも、周囲の草は意外と大きく揺れてしまう。スコールで元から激しく叩かれているが、不自然な揺れというのは目立つのだ。
「（……でも、市街戦を考慮しているっていうのは？　『安全国』の事か？）」
「（……軍人系じゃなくて、警察系の特殊部隊って事。おそらくヴァルキリエとか呼ばれているヤツじゃねえかな。『信心組織』の各地を回って、宗教的規約に反した者を始末するグローバルな天罰集団だ。装備も特徴的だし、何より隊員が女しかいねえ）」
「（……ヴァルキリエねえ。なんか軍服の上からガーターベルトとか、シェルフカップブラっていうんだっけ？　胸を隠さない本末転倒な下着を着けているのも、何かしら思想上の理由で

もあるのかね）」

「（……上の趣味じゃねえの？　くそっ、『信心組織』なのが惜しいね。良いケツしてやがるじゃねえか）」

「（……やめた方が良いんじゃないの？　ヴァルキリエって、『信心組織』の風紀委員みたいな連中なんでしょ。そういう冗談が通じる相手じゃないような気がするけど）」

「（……宗派にもよるぜ。豊穣神とか地母神辺りを祀ってる連中の中には積極的にヤリまくってるトコもあるみてえだしな。ギリシア系のデュオニソス辺りの話とかすげえぞ）」

「（……それにしても、警察系か）」

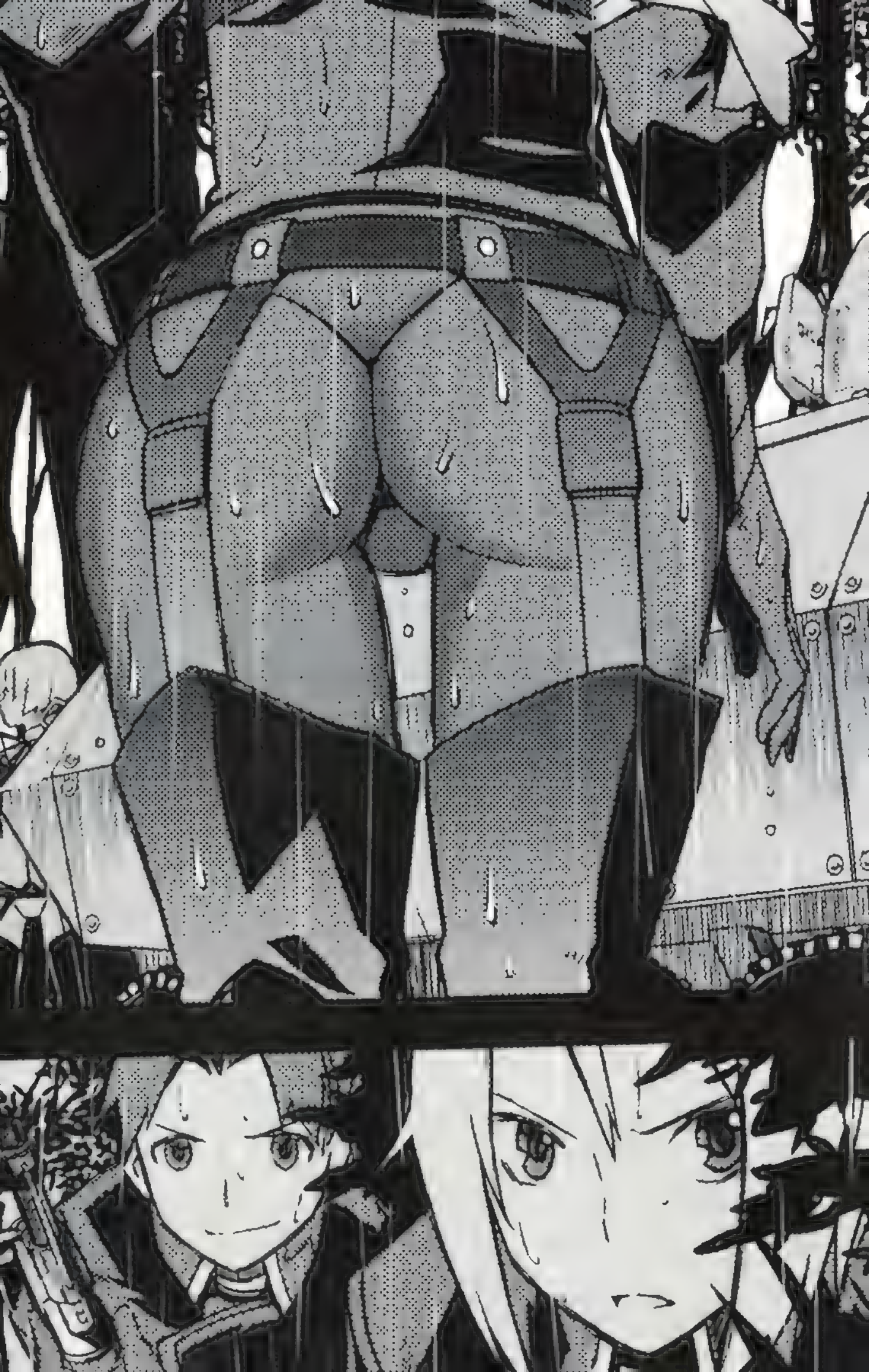
戦争をオブジェクト任せにする軍人系よりも、市街地で実際に人を撃っている数は警察系の方が多い、という統計結果が出ている　当然、白兵戦なら『安全国』で働いている警察系の方が強い可能性も否定できない。

「（……そんなヤツらが何でまた）」

「（……『資本企業』と繋がっているって訳じゃなさそうだな。だとしたら、あんなコソコソはしてねえだろ）」

「（……元々、宗教で金を稼ごうとする『資本企業』とか、伝承の科学的見地をウェブで発表しまくる『情報同盟』とは仲が悪いもんなあ）」

ヴァルキリエの三人の内、リーダー格の女性は腕に布のようなものを巻いていた。ひょっと



すると、すでに何度か『資本企業』側とやり合っているのかもしれない。それとも、彼女達の『敵』は別にいるのか。

クウェンサーは冷静に観察し、

「（……かと言って、別に俺達『正統王国』の味方でもない。気づかれれば銃撃戦になる）」

「（……ここで仕留めておくのが無難ではあるが）」

分かるだけでも数では向こうが優勢だし、他にも潜んでいるかもしれない。挙げ句、下手に銃声を鳴り響かせれば『ディープオプティカル』を守る『資本企業』の連中を呼び寄せかねない。

ヘイヴィアはゆっくりとライフルを構えつつ、

「（……気づかれねえなら、それに越した事はねえ）」

影の一人が、身振りで仲間に何か指示を出した。

部下と思しき女性達が、遮蔽物に使っている背の低い茂みから音を立てずに移動していくのが分かる。

「（……ゆっくり、ゆっくり、そうだ、さっさと行っちまえ。くそ、ここからだと幹が邪魔で狙えねえぞ）」

部下の先導の後に、指示を出した人影も動く。

彼女達が目指している方角は、クウェンサー達とは違う。『ディープオプティカル』に用が

ある訳ではないのか、あるいは別の進行ルートを迂回するつもりなのか。

「（……行ってくれそうだな）」

クウェンサーが顎に伝う雨水を拭おうとした時、影の一人が立ち止まり、周囲を見回した。

「っ！」

「（……待てヘイヴィア!!）」

思わず引き金にかかる人差し指を震わせたヘイヴィアと、それを言葉で押し留めるクウェンサー。

影はしばらく静止していたが、やがて森の木々の向こうへと消えて行った。

「（……何とか、なったみたいだな）」

「（……それにしても、ヴァルキリエのヤツら、こんな所で何してやがるんだ？）」

ヘイヴィアの疑問はもっともだが、そちらを追っても仕方がない。

『ディープオプティカル』だけでも、すでに手に余る。

8

クウェンサーとヘイヴィアの二人がそこからさらに森の中を進むと、地面に傾斜が出てきた。

上砂降りのスコールの水が、緩やかな抵抗となって彼らの行く手を阻む。

「青い海と白い砂浜はどこだよちくしょう」
「ハイエナ追い込んでた時にも言ってたよねそれ」
「部隊の連中がみんな揃ってバカンスしてやがるのに、俺らだけ泥まみれで働いてると思うと余計に腹が立つんだよ」
ブツブツ言い合っていると、ヘイヴィアの胸の中心に赤い光点が映った。
狙撃銃の照準を補正する、レーザーサイトの光だ。
彼が小さく両手を上げると、赤い光は消える。
「……監視役からの警告ってヤツか。ふざけやがって」
「索敵マイクでこっちの声も拾ってるのかな？」
馬鹿なヤツ、とクウェンサーは心の中だけで呟く。この土砂降りの中では、レーザー光は真正面以外の側面からでも肉眼で捉えられる。武装勢力は優勢に立って気が大きくなっているかもしれないが、あれはみすみす反撃のチャンスを与えているようなものだ。
「ヴァルキリエをやり過ごしてた時にこの警告をやられてたら流石にアウトだったよね」
「連中がそこまで空気が読めねえ馬鹿じゃねえと信じるしかねえな」
無知な銃口に気を配りつつも、今は『資本企業』の整備基地ベースゾーンを目指す。
崖というより丘のような所を上っていると、ヘイヴィアが気づいた。
「まずい」

「何だよ」

「崖下。『資本企業』の連中がわんさかいやがるぜ」

木の幹に体を隠して、クウェンサーも確認する。

彼らがいるのが数メートルの崖の上だとすると、『資本企業』の兵士達はその下にいた。泥の色をした濁流に沿う河川敷に、電気駆動の装甲車が停まっている。その周囲には二、三人の歩兵が集まっていた。

「……弾薬かバッテリーの受け渡しの最中、って感じだな。最新機器にはエネルギー問題が付き物だ。ったく、中には熱心なのがいるのか」

「どう思う？」

「向こうはこっちに気づいている訳じゃねえが、厳しいな。特に装甲車は何とかしたい。見ろよ、あの屋根のセンサーの数。受け渡しが終わったら、あれで片っ端から森の中をスキャンしつつパトロールって感じだろうぜ」

「仕掛けるしかないか」

クウェンサーは呟き、

「でも、下手に銃撃戦をすると他の兵士達を呼び寄せる事になるぞ。装甲車を吹き飛ばすとなればなおさらだ。どこまで爆発音が広がるか分かったものじゃない」

「だったら自然にやれば良い訳だよクウェンサー君」

ヘイヴィアは足元のぬかるんだ土を指差し、

「自然にな」

9

森の中を静かに移動していたヴァルキリエの女、サラサ＝グリームシフターは、きつく縛った布の中に入り込む雨水のせいでじくじくと痛む右腕の傷口にも表情一つ変えなかった。ただし、警戒は行う。わずかな血の匂いは敵兵よりも肉食の動物を招く。その動きが敵兵の注目を集める懸念はあった。

そんなサラサは、ふと足を止めた。

上の壁が崩れる派手な音を聞いたからだ。続いて、『資本企業』の無線のやり取りを傍受していた機材から、周囲で飛び交う連絡事項が届いてくる。

「……南西で土砂崩れ。『資本企業』の装甲車や歩兵達が巻き込まれたようです」

「言われなくても分かってる」

部下のレイチェルにそう切り返すサラサ。

彼女達の標的は『資本企業』ではなく、この地に逃げ込んだオールドニックという老人だ。

しかし索敵行動にいちいち許可など取っていないので、『資本企業』に見つかれば問答無用の

銃撃戦となる。そういう意味では、勝手にやられて注目がそちらへ向いてくれれば、それに越した事はない訳だが……。

サラサ＝グリームシフターは、安易に幸運を甘受しない。

そこから違和感を受け取り、警戒する。

原因は鼻で感じ取った。

こちらは土砂崩れの地点から風下にあたる位置にあった。

「……火薬の匂いがするな」

サラサは呟く。

「それもこの匂いは銃弾用の装薬じゃない。プラスチック爆弾なんかが起爆した時に漂うものだ」

少し考え、サラサは身振りで指示を出す。

原因を確かめる。

彼女達は『信心組織』の中で、宗教上の規約を破った者……『神敵』を始末するために世界中へ派遣される特殊部隊だ。今のがここへ逃げ込んだターゲットの行動なら、即座に追う必要がある。神の『摂理』に反し、歪んだ財をこの世界へばら撒こうとしている老人は、何があっても処罰しなくてはならない。

また、仮にターゲット以外の人間が起こしたアクションだったとしても、ターゲットを追う

のに邪魔なイレギュラー因子は排除しておいた方が良い。

土砂崩れの地点には、じきに『資本企業』の連中が集まるだろう。

ヴァルキリエはその地点を迂回しつつ、爆発の起きた方角を目指す。二〇分ほど経って、彼女達は目的の場所へ到着した。

『資本企業』の兵士達は崖の下で仲間を助け出そうとしているが、ヴァルキリエがいるのは崩れた崖の上だ。

サラサは屈み込み、土に手を触れる。

（……表面はぬかるんでいるが、奥は硬い。土の質も均一だ。これで土砂崩れが起きるのはやはり妙だな）

周囲に足跡のようなものはないが、このスコールではすぐに流されてしまうだろう。

舌打ちし、そこからさらに一〇メートルほどの痕跡を探ろうとしたところで、サラサ＝グリームリフターは不愉快なものを見つけた。

木々の枝、ちょうどサラサの目線の辺りに挟むように、『資本企業』軍の応急キットが設置されていたのだ。ご丁寧にスコールの影響を受けないよう、食べ終わったレーションのビニール袋を被せる形で。

「……、」

サラサは自分の右腕に目をやる。

どこの誰だか知らないが、こちらの活動を捉えている者がいる。それは土砂崩れで右往左往している『資本企業』とは別口だろう。

入念に観察し、罠の有無を調べ、それが本当に単なる応急キットでしかない事を知ると、いよいよサラサの怒りは頂点に達した。

この応急キットは、小さな子供に飴玉を差し出すよりも上から目線の行いだ。

「ふざけやがって!!」

応急キットを叩き落として、さらに森の奥を調べようとするサラサ。

しかし五メートルほど進んだところで、彼女はまたしても不愉快なものを発見した。

ワイヤーを使ったトラップだ。

足に引っ掛けると作動する簡単なタイプである。良くしなった木の枝の先には鋭い杭が設置されており、それが猛烈な速度で獲物を襲うようだ。

ただし、ワイヤーの端には電気信管が取り付けてあった。

信管とは、極めて小さな爆発を起こす事で、他の爆薬を反応させるものだ。

応用すれば、遠隔地からワイヤーを切る事もできる。

「く、そ……!?」

叫ぶが、それで信管が止められる訳ではない。

敵と分かれば殺す。

慈善を振り払う者にまで慈悲を与え続けるほど、この敵は博愛精神を持ち合わせていないようだ。

10

クウェンサーとヘイヴィアは銃器のスコープでその様子を観察していた。

「ヤバい、生きてる！　すごい生きてる!!　うわあ、女の人って本気で怒るとあそこまで人相が変わるものなんだ!!」

「……やっぱ受け取らなかったか。ま、これだけ距離が離れてりゃ追い着かれる事はねえだろ」

土砂崩れに使った最初の爆発自体、相当の距離を空けてから実行している。『信心組織』のヴァルキリエは鬼の形相でクウェンサー達を捜索しているようだが、そう簡単に捕まる場所にはいない。

のだが、

「……どうしよう。この言い知れぬ寒気。念には念を入れて逃げ惑った方が良いような気がする」

「女の恨みは怖えからな。その分、妖しい華があるのが救えねえんだが」

という訳で、『信心組織』を相手取ったからか、珍しく彼らは根拠のある情報以外のものに

突き動かされて作戦行動を続行する。

さらにしばらく歩き、低い山を一つ越えると、目的のものが見えてきた。

すでに武装勢力の拠点から、半日以上が経過している。

「あれが『資本企業』軍の『ディープオプティカル』の整備基地、か」

『正統王国』の車両団とは違い、森を切り拓いて実際の建物をいくつも建造している。素材はプレハブのように、薄く、軽い金属が大半のようだ。

「……良くやるね。辺りを伐採するだけでも面倒臭いだろうに。植物の繁殖力は旺盛だから、放っておくとあっという間に基地の中が雑草だらけになるんじゃないか」

「あっちこっちが焦げてんのって、除草用のバーナーでも使ってるからじゃねえの？」

ただし、一ヶ所だけ、極端に巨大で、分厚いコンクリートで造られた建物がある。

おそらくは、オブジェクトの整備場だ。

ヘイヴィアが大雑把に基地を見下ろしながら、

「海上戦闘特化型の第二世代って話だったろ。こんな森ん中にベースゾーン作ってどうすんだ？」

「一応はエアクッションらしいし、スコールで島中が水浸しになっている間なら移動はできるのかもしれないな。こればっかりは、実際に観察して情報を集めるしかないんだろうけど」

「……何にしても、相手が本調子じゃねえ間にどうにかしてえぜ」

ヘイヴィアはスコールとは別の、嫌な汗を流しながら言う。
「たとえ動かなくても、オブジェクトはオブジェクトだ。勘付かれたら大小無数の砲で直接狙われちまう」
「そのためにこうしてこっそりやってきているんだけど……こりゃ面倒臭そうだ」
クウェンサーの言葉を聞きながら、ヘイヴィアはライフルのスコープで整備基地周辺を観察し、
「……そう簡単に忍び込める感じじゃねえな。流石に基地の近くになると『末端』とは違う。お上の目が近くにある分、サボれば見咎められるリスクも大きくなる訳だし。まともにやり合って、誰にも気づかれずに入るのは多分無理だぜ」
「それができていれば、俺達より地形に詳しい武装集団が勝手に潜入してそうだしね」
成功例がないという事は、やはりできないという事なのだろう。
「見たところ、警備の担当は腕章の色で区別しているみたいだな。基地周辺と基地の中じゃ、腕章が違う。同じ『資本企業』でも、色が違えば即不審者扱いじゃねえか」
当然、ただの布切れではないだろう。
磁気テープなりＩＣチップなりを使って、電子的な情報を封入されているはずだ。
「ひょっとすると、基地内部でもセクションごとにカラーが分かれているのかもしれない。だとすれば、無事に中に入った後も大変かもね」

やはり、『資本企業』の軍服を着ていれば中へ潜り込めるというほど甘くはないようだ。というより、一機五〇億ドルもするオブジェクトを守っているのだ。それもクリーンな戦場ではない、武装集団のいる場所で。そうそう簡単に分かる『穴』があるとも思えない。

「となると」

「まずは、『見えない穴』の捜索から始めますか」

言って、彼らが取り出したのは指向性の索敵マイクだった。

11

日没後、雨の降り続けるジャングルの中で、クウェンサーとヘイヴィアはひたすらに動きを止めていた。

彼らは拳銃のような形の特殊なマイクを整備基地へと向けている。

ヘッドホンを耳に装着しているヘイヴィアは、マイクの先端を上官室の方へ向けようとしたが、

「そっちじゃ駄目だ、ヘイヴィア」

「あん？　でも整備基地の情報を探るなら、将校を狙うのが一番手っ取り早いだろ」

「そういうものの価値を知ってる連中は、盗聴の対策だって整えているさ。壁の間を真空にし

て音が伝わらないようにしたり、窓にモーター取り付けて振動させたりな」

「じゃあどうするんだ」

「ストレートにやっても駄目なら、周りから攻めるんだ。そこらを歩いている巡回の兵士達だよ」

「そいつらじゃ、声は拾えても大した情報を持ってねえんじゃねえか？」

「一人ずつならな。だが、何十人、何百人と情報を集めてくれば話は変わる。それらの細かい情報を統合して、整備基地の全貌を探ろうって事さ」

そんな訳で、遠隔地からの盗聴を続けつつ、必要だと思われる情報は逐一メモを取っておく。この雨では紙は使えないし、携帯端末はバックライトが光るのでやはり避けるしかない。クウエンサー達は耐水性の軍服の裏地に、油性ペンで直接メモを書き込んでいった。

「……早くしねえと『ディープオプティカル』の整備が終わっちまうぜ」

「ちくしょう、ホントに『資本企業』のレーションは美味いなあ」

ブツブツ言いながらも、彼らは夜が明け、太陽が分厚い雨雲の上を通過し、再び暗闇に包まれた後も、ひたすらに断片的な情報を収集していく。

「……整備場は速乾性のコンクリートでセラミックを圧縮してやがるのか。オブジェクトの砲撃ならともかく、並の戦車の砲弾じゃ四、五発受けても風穴は空きそうにねえな……」

「『資本企業』のレーションうめー……」

「……テメェ、いつからグルメキャラに転職しやがった？　っつーか一人で食ってねえでこっちにもよこせよ!!」

ほぼ二日。

この土砂降りの中、木の幹に背を預ける形で代わる代わる仮眠を取りつつ、クウェンサーとヘイヴィアはただ休を小さくして微かな声を拾い続けた。

結果、夜明け前にクウェンサーはこんな事を言った。

「シャドウコードだ」

12

一方、そんなクウェンサーやヘイヴィアを監視している者達がいた。

彼らに『ディープオプティカル』の撃破を頼んだ、武装勢力のスナイパー達だ。ボロ布をさらにナイフで引き裂き、複数のスプレー塗料を何重にも噴く事で自作したギリースーツをまとって身を隠していた彼らは、いつまで経っても動かないクウェンサー達に痺れを切らしていた。

あれは一体何をやっているのだ？

監視している側の共通の見解だった。整備基地ベースゾーンの近くまでやってきたは良いものの、そこから一歩も動く気配がない。

『資本企業』の装甲車を土砂崩れに巻き込んだ時はそれなりにやるようだと多少は感心したものだが、それ以降目立った成果を上げなくなると、武装勢力の方にも苛立ちが募ってくる。彼らは整備基地ベースゾーンの前で怖気づいたのではないか、と。

武装勢力はクウェンサーやヘイヴィア達の活躍を、ニュースサイトなどで断片的に知っているだけなので、その過程については全く認識していなかった。戦場へ向かえば後には何も残らない。立ち向かえばその日の内に何でも解決する。そんな便利屋のようなものをイメージしていたのだ。

結果だけをダイジェストでしか見ていない、偏りに偏った知識と判断能力は、スポーツ選手がどれだけ努力しているかも理解しないまま『俺にはあいつと違って才能がないから』などとブチブチ言う連中と同程度のものでしかない。

だが問題なのは、武装勢力が実際にスナイパーライフルを所持しており、いつでも人間を撃てる環境にあるところだ。

どうする。

様子を見るか。動くか。

武装勢力のスナイパーは考える。クウェンサー達を腰抜けの裏切り者と判断するのは簡単だが、整備基地ベースゾーンの近くで発砲すれば、監視役まで危険に巻き込まれかねない。また、クウェンサー達を始末しても、『ディープオブティカル』がいなくなる訳ではない。状況を作

るために『志願』した子供達の努力も無駄になる。
（……警告に留めるか）
レーザーサイトの光点を利用した警告なら、発砲音はしないので危険は低い。だが、以前にも一度使った手だ。何度もやれば心理的な効果は弱まる。
どうするべきか。
じりじりと緊張に後押しされる監視者は考え続ける。
だから気づかなかったのかもしれない。
その真後ろから音もなく迫り来る、別の影を。

13

クウェンサーとヘイヴィアの二人は、突破口のための情報を整理していく。
そう。
糸口は見つかったのだ。
「連中の上級将校は一般的な物資のやり取りの他に、シャドウコードって名前の荷物を別ルートで取り寄せている。ま、そういう悩みがあるのは分からなくもないけど」
「このシャドウコードは通常のルートを通らねえ。補給兵が運ぶ訳でもねえし、通行の許可証

の提示も記録を取ったりしねえ。……そんな事すりゃ、まずいデータが残っちまう訳だしな」

「『秘密の運搬者』については、整備基地では暗黙の了解になっている」

クウェンサーは一つ一つ条件を確認しながら、

「……だとすれば、基地の警備がセクションごとに腕章で色分けされていても、この『秘密の運搬者』だけは素通りできるって訳か」

となれば、整備基地へ潜り込むために必要なアイテムも自ずと分かってくる。

クウェンサーとヘイヴィアが次の行動を起こそうとした時だった。

ガサリ、と。

真後ろで、下草を踏む音が聞こえた。

「っ!?」

だが近すぎる。

クウェンサーとヘイヴィアが慌てて振り返ろうとしたところで、襲撃者の猛チャージがクウェンサーの横っ腹に突き刺さった。

「クウェン……!!」

言いかけ、ライフルの銃口を向けようとしたヘイヴィアの動きが止まる。

別々の箇所、二方向から、短距離狙撃ライフルの銃口を向けられている事に気づいたからだ。

「『資本企業』じゃないな　……整備こそそれっぽく整えているが、正規兵にはわざわざ離れ

たところから白軍の整備基地を盗聴する理由はないはずだ」

クウェンサーの上にのしかかってきた襲撃者は、そんな声を発した。

声は低かったが、女性のものだった。

それを見たヘイヴィアが思わず片手で顔を覆い、

「（……代われクウェンサー!!　どうしていつもテメェばっかり……!!）」

「（……喉元にナイフのブレード密着していますが同じ台詞吐けますかね先生!!）」

「そのイントネーションは……『正統王国』か」

襲撃者は若干クウェンサーにかける体重を緩め、しかしナイフの刃を首に当てたまま呟く。

「ここで何をしている？」

「……せっかく応急キットを差し上げたってのに、関わるなってサインは伝わらなかったか」

「よせよガキが。粋がったところで言動から小便臭さが取れていないぞ。さっさと人の質問に答えろ」

「そういうアンタこそ。『信心組織』のヴァルキリエが、俺達を見逃す理由っていうのは？」

クウェンサーがそう尋ねたのは、そもそもこの距離まで近づく前に、確実に射殺する事はできたはずだ、という意味である。

無意味な接近をしてきたという時点で、相手がいくら武器を構えていても、見た目ほどの殺意は持っていない事を示してしまっている。銃声を聞かせないために刃物を使う、という場

合だったとしても、それならすでにクウェンサーの喉は裂かれているはずである。

「軽い礼だ」

言うだけ言うと、ヴァルキリエの女は今度こそクウェンサーの上から完全に退いた。

「最後のは痛かったがな」

「本題は？」

「私の見立てが確かなら……『資本企業』の整備基地を襲う算段だろう？」

ヴァルキリエの女は薄く笑う。

決して友好からくるものではない笑みだ。

「我々はこの近辺へ逃げ込んだ『神敵』の捜索を行っている。だがそれにはあいつらが邪魔だ。お前達がかき乱してくれるなら利用させてもらうが、タイミングを教えてほしい」

「……それを『正統王国』の俺らに頼むかよ？」

「『資本企業』や『情報同盟』に比べればいくらかはマシだろう。『正統王国』は戴冠の儀式などでは、宗教的様式に則る部分も大きいしな。……何より、お前達は宗教上の規約を破る『神敵』でも、『神敵』の捜索を妨害する協力者でもない。今のところはな」

「（……ヤバい、馬乗りにされた時に下ネタで切り返さなくて良かった）」

密かにホッとするクウェンサーだが、別の懸念もあった。

クウェンサーとヘイヴィアは、逃走防止の意味も含めて、地元の武装勢力から監視されてい

る身だ。ここで『世界的勢力の部隊』と不用意に接触すると、逃走の準備とみなされて遠距離から狙撃を受けるリスクがある。

と、クウェンサーが視線を周囲へ走らせるのに気づいたのか、ヴァルキリエの女はこう切り返した。

「そちらについては問題ない」

「？」

「邪魔な者は排除した。利用できるのなら利用はするが、そうでないもの、かつ今後の行動に支障を与えそうなものを残しておく必要もないのでな」

ガラガラ、という硬い物がぶつかる音が聞こえた。

ヴァルキリエの女が取り出したのは、いくつものスコープだ。どれもレンズは砕け、側面には赤黒い液体がこびりついている。

「指や耳といった方が、証としては分かりやすかったか？」

「……」

分かってはいたが……改めて、クウェンサーは目の前の女に悪寒を覚えた。

どう考えたって、どう転がったって、こいつらは敵だ。

味方にはならない。

それを再確認した上で、ジャングルに溶け込んだ監視者を音もなく的確に、一つ残らず摘み

取ったその手腕にも、舌を巻きそうになる。

あの時、もっと踏み込んだ罠を設置しておくべきだったと思うほどに。

「（……クウェンサー、おいクウェンサー!!）」

「（……何だよヘイヴィア）」

「（……武装勢力の監視から解放されたって事はよ、今なら黙って逃げられんじゃねえのか？『資本企業』のオブジェクトなんて無理して狙う必要ねえって!!）」

確かに、それは一理ある。

向こうも向こうで監視役がやられたと分かれば、次の手を打ってくるだろう。最悪、クウェンサー達が裏切ったと判断されれば、勘違いで追撃部隊が編制される危険性もある。

ただし。

ここで『ディープオプティカル』を放置すれば、ロワイヨーテ方面では今後も『目に見えないレベルにまで拡大した』大惨事を繰り返す。

あの武装勢力は子供を盾にまた別の誰かに戦闘の交渉を行うかもしれないし、それで効果がなければもっと卑劣な手段を講じる可能性もある。

何より、

「（……完全に解放されたって訳じゃないんじゃないか？）」

「（……何でだよ）」

「（……『信心組織』のヴァルキリエが、何の理由もなくリスクを抱えて俺達と接触してくるか？　こいつらはこいつらで、俺達の事を利用しようとしているんだろ。当然断れば……）」

ちくしょう、とヘイヴィアは呻くように呟いた。

当然、その小声は聞こえていながらサラリと流してしまうヴァルキリエの女。

「具体的に、どういう算段で行く？」

武装勢力を必要か不要かだけで容赦なく殺害し、顔色一つ変えずに彼女はそう言った。

「お前達がどうなろうが知った事ではないが、騒ぎは大きく、継続された方が好ましい。必要なものがあれば言ってくれ」

「……そうだな」

意識的に呼吸のリズムを整え、クウェンサーは言う。

「瓶が欲しい。銘柄は教えるが、中身はなくても良い。おそらく連中がゴミとして捨てているはずだ。後は、そうだな……」

クウェンサーの声に、ヴァルキリエはおろかヘイヴィアまでもが驚いた顔をした。

ヴァルキリエの女はやや怪訝な調子で、

「……そんなもので良いのか？」

「こっちは機材が少ないんでね。その『そんなもの』もできないんだ」

「了解した」

請け負ってから、彼女は低い声でこう付け足した。

「ただし、仮に『資本企業』側の捕虜になったとしても、私達の事はしゃべるな。それをやった場合、我々はお前達の素性を徹底的に調べ上げ、『安全国』に潜入してでも親類縁者を皆殺しにする」

「脅す必要はないよ。そもそも、俺達はアンタらが本当にヴァルキリエかどうかも分かっていないんだから。俺が今着ている、この軍服と同じようにな」

「それで良い」

ヴァルキリエの女は、それこそ自分の方が神を冒瀆していそうな、底意地の悪い笑みを浮かべる。

「お前達はお前達で自由にやれ。それが我々の役に立つなら利用させてもらおう」

14

クウェンサーとヘイヴィアが取った作戦は、それほど綿密に練ったものではなかった。

小さなゲートにできるだけ目立ちにくく、しかし真正面から近づいていく。

『ちょっと待て。止まれ。そう、お前達だ』

実際にはゲートに辿り着くどころか、一〇〇メートル以上手前で拡声器に制止を促された。

ゲート近くの巨大なライトの光を浴びせられ、機銃を積んだオフロードカーが接近してくる。
アイドリング中のオフロードカーから、二人の歩兵が降りてくる。
共に、クウェンサー達と同じ『資本企業』の軍服を着ていて、ヘイヴィアと同じアサルトライフルを所持している。
クウェンサーは眩しそうにライトの光を片手で遮りながら、
「……おい、何だよ。頭がガンガンするな」
「部隊の人間か……？」
歩兵はクウェンサー達の格好をじろじろと眺め、
「ここで何をしている。深夜シフトの巡回組はまだ帰還するような時間帯じゃない。それにお前達、腕章はどうした。全員が右腕につけているはずの、この腕章だ」
「……つけちゃ困る仕事をしてるからつけられねえんだよ」
「なに？」
ヘイヴィアの呟くような声に、眉をひそめる歩兵。
すると彼は歩兵の耳へさらに口を寄せて、囁くように言った。
「腕章の照会はやめた方がお互いのためだぜ。アンタも聞いた事あるだろ、上級将校のシャドウコード」
「あれか……」

歩兵は苦い顔になり、それからクウェンサーやヘイヴィアから目線を外した。
彼が見ているのは、クウェンサー達が運んできたもの。
手押しの荷車だ。
ＬＥＤの懐中電灯を使い、幌の中を覗き込む歩兵。そんな彼に、クウェンサーは後ろから小さな声で続ける。
「……あんまり光を当てるなよ。基本的にはお茶の仲間だからな。栓を開けなくても、光で成分が壊れる事もあるんだ」
「そうか、そうだな、だが、ちくしょう……」
歩兵は呻くような声を上げ、懐中電灯の光を消した。
「上の連中、相変わらずダイエットドリンクなんて取り寄せてやがるのか……ッ!!」
「シャドウコードなんて仰々しい名前をつけてるのは、中身を悟られないようにするためのもんだろ。……そりゃまあ、俺達みたいな下っ端が汗水垂らして肉体労働してんのに、上の連中が脂肪の吸収をどうにかしたいぐらい飲み食いしているってのは頭にくるが、世の中なんてそんなもんだ」
「４ＷＤは泥にはまっちまってな。普段なら救援を呼ぶところだが、運んでいる物が物だけに連絡も入れられなかったって訳だ。おかげで泥にまみれて、こんな時間まで残業だぜ。俺らは本来昼シフトだ。さっさと運んでベッドに潜り込みたいぜ」

チッ、と歩兵は舌打ちした。
騒ぎが大きくなるのはまずいと感じたのか、彼は身振りで指示し、ゲート近辺から放たれる強力なライトを消灯させる。
「分かったよ。通れ。深夜シフトは基本的にピリピリしているから、中に入ってからもあんまり目立った動きはするな」
「了解」
「そいつがお偉方に届かなくて不利益を被るのは、お前達だけじゃないんだからな」
ゲートの前に置かれていた鉄骨と有刺鉄線のバリケードが横にどけられ、鋼鉄製のゲートが開く。クウェンサーとヘイヴィアは衆人環視の中、荷車を押して堂々と整備基地へと侵入した。
「(……この後は？)」
「(……このままオブジェクトの整備場まで行けたら俺は『資本企業』に亡命してハリウッドスターに転職するぜ。ひとまず兵舎の方へ行ったら腕章を拝借。整備場にいても不審がられないように準備を整えねえとな)」
「(……腕章のカラーは分かっているんだよな)」
「(……美人の尻ならともかく、何のためにクソ面白くもねえ筋肉オヤジを何十時間監視していたと思ってんだ。ヤツらの使う歯磨き粉の色だって覚えてるよ)」
そんな事を囁きながら、クウェンサー達はいくつかのセクションを越える。

時折、見張り台から強力なライトが基地の敷地内へ向けられて冷や汗が出るが、クウェンサー達の荷車に光が当てられると、慌てて光の円が遠ざかるのがユーモラスだった。やはりこの整備基地には暗黙の了解がある。

わざと兵舎の裏手、見張り台から見えない位置で荷車を停めたが、咎めるような声は飛んで来ない。クウェンサー達はズラリと並ぶ窓の一つに手を掛け、ゆっくりと開ける。

当然、普段なら鍵はかかっているだろうし、センサーもあるのだろうが、

「……これも調査通り。ゲートでシャドウコードの話が出ると、こっそり窓の一つが開けられる」

念のため、荷車からダイエットドリンクの瓶を一本抜いてお守り代わりに持ち、クウェンサー達は兵舎の中へと潜り込む。

これはヴァルキリエが調達した空き瓶で、中身はただ透明なだけの雑菌まみれの生水なのだが、不審に思う者はいても中身を改めようとする者はいないだろう。

ダイエットドリンクなんてコンプレックスの塊だ。不要な人間が覗き見していると上級将校に思われたら、どんな私怨をぶつけられるか分かったものではない。

「……ホントに将校のトコまで運んじまえば、食中毒で指揮系統メチャクチャにできるかもしれねえな」

「上の連中も首のすげ替えで結構何とかなるもんだよ。やっぱり『ディープオプティカル』を

直接狙った方が良い」

そんな事を言い合いながら、二人は兵舎の一室を選んで侵入する。

もちろんそれも、ネームプレートを見てターゲットを見定めていた。

目的の人物の役職や、今警備に出ていて部屋には誰もいない事も、索敵マイクを使った情報収集でデータを入手していたのだ。

クウェンサーとヘイヴィアは、持ち物を急いで漁り、目的の腕章を探しながら、

「支給される腕章は一人一つって訳じゃねえ！　スペア合わせて三つはある！　目的のカラーのが見つかれば何とかなるぜ!!」

「色は!?」

「青か緑！　青が警備で緑が技術だ!!」

クウェンサー達の格好からすれば、警備の青の方が違和感はないだろう。部屋の住人も、元々警備を担当していたはずだ。

「びしょ濡れの軍服も新しいのに着替えた方が良いのかね」

「それこそ上級将校じゃねえんだ。優雅に傘差してお散歩している歩兵なんて逆に珍しい。そんな事より腕章だ腕章！　くそ、やっぱ青や緑はそう簡単には置いてねえのか!?」

その時だった。

カツコツという足音が近づいてくるのを、クウェンサーとヘイヴィアの二人は察知した。

「（……ヤベえ。ヤベえぜクウェンサー）」

ヘイヴィアが声のトーンを落として言う。

「（……腕章は見つからねえ。ダイエットドリンク持ってたって、こんなトコに寄り道してりゃ絶対怪しまれる！　このままじゃ八方塞がりだぜ!!　どっちに進んでも行き止まりだ!!）」

足音は止まらない。

明らかにこの部屋を目指している。

クウェンサーはとっさに言った。

「（……ヘイヴィア、ダイエットドリンクの瓶を貸せ）」

「（……何だって？）」

「（……どうせ隠れる場所なんてない!!　だったら今まで通りだ。とにかく貸すんだ！）」

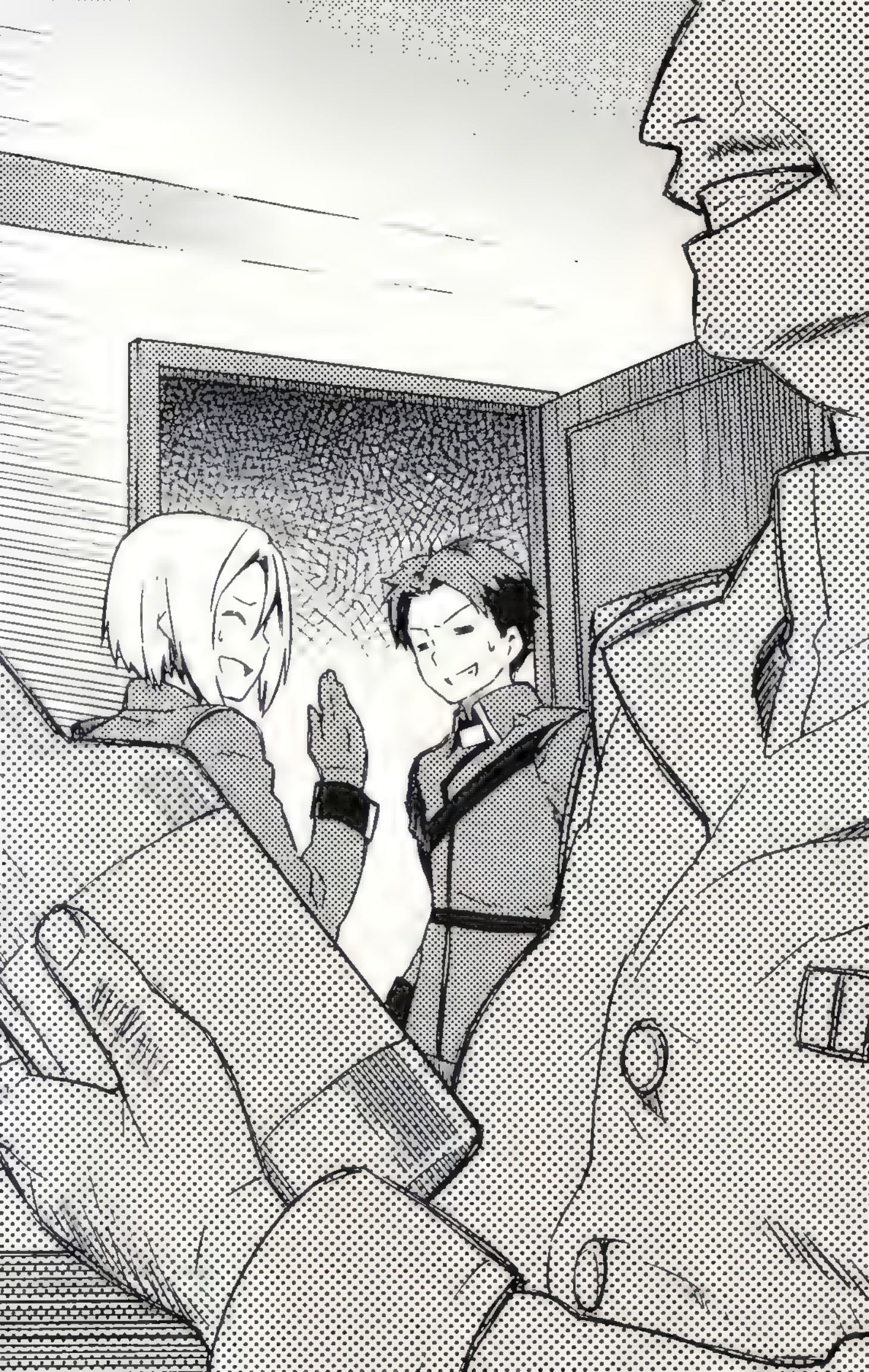
ヘイヴィアが投げた瓶を片手で受け取ると、クウェンサーは自分が元々持っていた物と一緒に、真新しい軍服のジャケットでぐるぐると巻いていく。

その途中で、ノックもなしにドアが開いた。

いかにもお高そうな……言ってみれば実戦向きでない軍服をまとった中年の男が、怪訝そうな目でこちらを見ていた。地図に矢印を書き込みたがるタイプの軍人らしく、大変恰幅のよろしい体型をしている。率直に言えば現場の人間に嫌われそうなヤツだった。

「ここで何をしている？　お前達の部屋か？」

「い、隠蔽中です。色々と」
中年の男はクウェンサーが隠そうとしている物を眺めると、呆れたように舌打ちした。
「着いたのなら早く届けておけ。品が基地にあるのに不始末扱いされては敵わん。……あと、いくらシャドウコードだからって、梱包に使ったものは後で返せよ」
クウェンサーとヘイヴィアは中年の男の脇を通り、そそくさと退室しようとする。
そこで声を掛けられた。
「待て」
「……何か？」
「それだけあるんだ。一本ぐらいここで開けても構わないのではないか？　こっちもレーションばかりで健康には気をつけないといけないしな」
ギクリ、とクウェンサーは肩を震わせそうになる。
瓶の中身は雑菌まみれの生水なのだ。
「せ」
「せ？」
「栓を開けられるほど、我々が太るような事がありましたら」
「言ってくれる……」
「で、では、私達はこの辺りで」



中年の男はわずかに苦笑いを浮かべると、犬を追い払うような手振りでクウェンサー達を遠ざけた。

ひとまず部屋から出られた事に、ヘイヴィアは大きく息を吐いた。

「……ひとまず助かったけどよ、これからどうする？」

「そうだな」

「いくらダイエットドリンクの通行証があるからって、そういつまでもはうろつけないぜ。おまけに、腕章のありそうな部屋にはあのおっさんが居座っちまった。緑か青の腕章がなけりゃ、『ディープオプティカル』の整備場に近づく事もできねえ。これじゃ、いくら基地の中に入ったって何の意味もないぜ」

他の部屋にも目的の腕章はあるかもしれないが、そちらについては情報がない。一〇〇以上の部屋を一つ一つ調べるのでは時間がかかるし、怪しまれる。何より、シフト外で休憩している兵士の部屋のドアを間違って開けた場合、もはや戦闘は避けられなくなる。

この状況でそれをやれば、こちらの命はないだろう。

「……なら、『ディープオプティカル』には、切触れずに破壊できれば良いんだ」

「あん？」

「ヘイヴィア、この二日間、索敵マイクでお互い拾った情報をもう一度確認しよう。『ディープオプティカル』がこの整備場でどんなメンテナンスを受けているか」

クウェンサーは言いながら、一度兵舎から離れるため、セキュリティの切れた窓へと引き返す。

「それさえ分かれば、まだ打つ手はあるかもしれない」

15

「『ディープオプティカル』はレーザービームを主砲に採用している第二世代だ」

兵舎の窓から外へ脱出し、荷車の陰に隠れた状態で、ヘイヴィアはそんな事を言った。

「だが、その主砲ってのが曲者でな。八本の励起装置のレーザーを束ねて誘導放出に利用するために液化プリズムってのを使っているんだが、液体内の光線屈折率がわずかでもズレるとレーザービームは主砲そのものを噛み砕いちまう」

「そのためのメンテナンス？」

「正確には、液化プリズムの溶液濃度を自動調整する電子制御プログラムのデフラグってトコか？　ソフト的な問題が定期的に発生するらしくてな。そいつへの対策として、記憶装置のクラスターの管理をこまめに行いましょうって方針にしているらしい」

「……」

「おい。言っておくが、このメンテ作業を妨害したって『ディープオプティカル』が粉々に吹

き飛ぶなんて事は絶対にないぜ」

ヘイヴィアが念を押すように言った。

「さっきも言った通り、ソフト的なメンテナンスなんだ。例えばJPlevelMHD動力炉をいじっている最中に横槍を入れれば俺ら歩兵でも『ディープオプティカル』を爆破できるチャンスがあるかもしれねえが、今回はただ主砲のプログラムをいじってるだけ。吹き飛ばすための材料が足りねえ」

当然ながら、主砲が使えなくても、オブジェクトにはその他に一〇〇門近い砲が用意されている。そのどれもが、生身の人間はおろか、戦車や戦艦にとっても致命的なダメージを与えるほどの破壊力を持つ。

「いつぞやの『ウォーターストライダー』の事でも思い浮かべてるか？」

ヘイヴィアはそんな事を言った。

「あの時はオブジェクトのパーツに爆弾を仕込んで、それを『ウォーターストライダー』の内部に組み込ませた上で爆発させてたな。でも、その手も今回は使えない。そもそもソフト的なメンテだから部品をあれこれ交換する訳じゃねえし、『ディープオプティカル』はおろか、そのスペア部品が並んでいる区画にも俺らじゃ近づけねえよ」

「……スペア部品が並んでいる区画っていうのは？」

「この兵舎のほぼ対角線上。だがそこにダイエットドリンクを運ぶのはあまりにも場違いだぜ。

管理腕章は赤だが、今の俺らにとっちゃ何色でも同じだ。ない物は調達できねえ」

『ディープオプティカル』の整備場には青か緑の腕章が必須。

オブジェクトのスペア部品を収めている倉庫には赤の腕章が必須。

例外は認められず、ダイエットドリンクを持っていたとしても通過できないどころか、逆に怪しまれてしまう。

「……スペア部品以外の倉庫の腕章は？」

「黄色以上。それぐらいなら忍び込めるかもな。だがそれがどうかしたのかよ。普通の倉庫に忍び込んだって、そこにはオブジェクトのパーツなんてないんだぜ。何を仕込んだって、『ディープオプティカル』にまでは届かねえ。それじゃ何の意味もねえだろ」

「そうでもない」

クウェンサーはポツリと呟くように言う。

「……ようは、『ディープオプティカル』と戦わなければ良いんだ」

「？」

「それより、もっと重要な問題がある。ヘイヴィアの集めた情報と照らし合わせたいんだけど」

「何だよクウェンサー」

ヘイヴィアが尋ねると、クウェンサーは慎重な調子でこう答えた。

「この『整備基地』の連中が、今時のクリーンな戦場の流儀に則っているかって事さ」

16

『資本企業』軍の指揮官、ロックベルト＝ディーンズゲート中佐は舌打ちした。

ゲートにシャドウコードが運ばれてくれば、それは特定の兵士達からの伝言を介する形で、ロックベルトにも届くように手配されている。だが、そもそも前回のシャドウコード納入から時間が経っていなかった。不審に思っていると、今度はいつまで経っても目的の品が届かない。そして軽く巡回してみれば、兵舎の裏手に荷車が放置してあるのを発見した。

ロックベルトは残されていた瓶を一本摑み、顔を近づけ、それだけで偽物だと判断した。味や匂いなどを確認するまでもない。足元の地面に瓶を叩きつけ、彼は無線機のスイッチを入れる。

眩いライトの光が、整備基地の外ではなく内側に向けて照射された。

倉庫の壁に背中を張り付けたヘイヴィアは、全身からスコールとは明らかに違う水滴を噴き出させる。

「くそっ、気づかれやがった!!　あっちもこっちも真昼みてえに照らし出されてやがるぜ!!」
「予想通りさ。元々、届けるはずのダイエットドリンクがいつまで経っても届かない、届ける役の兵士だった俺達が忽然と消えたっていうんじゃ誰だって怪しむ。瓶の中身を改められれば決定的だな」
「そうまでしてこんな倉庫に来る意味ってあったのか？」
ヘイヴィアは胡散臭そうに倉庫へ目をやる。
「そりゃ確かにこんな基地の端っこにある倉庫じゃ誰も寄り付かねえ。黄色の腕章が必要って言ったって実質は素通りできる。でも、さっきも言ったがこの倉庫にゃ『ディープオプティカル』に関わる部品なんか置いてねえ！　何を小細工したってオブジェクトの元まで運ばれもしねえぞ!!」
「狙うのは『ディープオプティカル』じゃない」
「は？」
「あの第二世代を直接ぶっ壊さなくたって、メンテ作業を台無しにする方法はあるって事さ」
賊に入られた。
ロックベルト＝ディーンズゲートが真っ先に確認したのは、やはり『ディープオプティカ

ル』……彼らの正式名称では『シャーベティ』と呼ぶ第二世代の整備場だった。鬱陶しい雨の中を走りながら、彼は無線機で内部の兵士達と連絡を取る。

『いいえ、こちらは異常ありません！　入館管理の記録からも不審な人物の出入りは確認できていませんし、「シャーベティ」の数値にも怪しい点は見られませんが』

（そもそも、普通の方法であの分厚い整備場に入る事などできないのだが……）

それを言ったらこの整備基地だって同じだ。そして賊はこの敷地内へとすでに踏み込んでいる。

……実際にはその原因の一端はロックベルト本人にある訳なのだが、彼はそういう細かい事に目が届かない。

その時だった。

『うわっ!?』

「どうした」

『「シャーベティ」のデフラグの速度がいきなり減速しました。おかしい、かなり大型のコンピュータをこのタスクだけに使っているはずなのに!!』

「狙うのは『ディープオプティカル』そのものじゃない。そもそも、ありったけの爆薬を使っ

ても破壊できるかどうか分からないからな。だからメンテ作業を妨害するために、デフラグを手伝っている大型コンピュータの方を狙う」

クウェンサーはそう言った。

「『ディープオプティカル』と大型コンピュータが、どういう形で繋がっているかさえ分かれば方法は色々ある。整備場から離れた所にあるなら地中のケーブルを掘り返せば良いし、無線信号を使っているならジャミングでもすれば良い」

「でも、連中だって付け入る隙はできるだけ与えねえようにするだろ。分厚い壁で囲まれた施設があるなら、その中に必要な物を全部詰め込んじまった方が安全なはずだぜ」

「処理速度が減速している理由は!?　ハード的なトラブルか、それともサイバー攻撃の可能性か!?」

『デフラグに使用しているハードはネットワークに接続していません！　外部メディアなどを差し込んだ事もありません!!　おそらくはハード的なものだと思われます!!』

まずいな、とロックベルトは考える。

今行われている主砲の電子制御プログラムのデフラグは中断できない。それをやれば何日もかかる作業前のセッティングを再び一からやり直す事になり、そのトラブルを嗅ぎつけられれ

ば他勢力のオブジェクトから攻め込まれかねない。
『作業は続行しますか？』
「当然だ」
『可能性としては、熱暴走、強力な電磁波による外部干渉、有線ケーブルの内部破断、単純なマシンの突発的故障などが挙げられます』
「……電磁波攻撃が一番『賊のやりそうな事』だが、それはないな。攻撃されていれば、私達の無線にも何かしらの強力なノイズが混ざっているはずだ」
『デフラグ中のデータそのものの破損を防ぐため、処理システムを複数に分散するという対応策も考えられます。今使っている大型コンピュータほどではありませんが、使えそうなハードにはいくつか心当たりがありますので』
「それは作業中のタスクを中断せずに続行できるものか？」
『かなりのアクロバットですが』
「なら……」
始めろ、と言いかけて、ロックベルトはふと悪寒に襲われた。
「……そのサブシステム候補のマシンは、整備場の内部にあるものか？」
『い、いいえ』
無線相手は若干腰が引けたような声で、

『今は使われていないハードですから……別の倉庫の方で保管されているはずです』

（そう来るか……ッ!!）

「良いか少尉。サブシステムの案は破棄する。今のシステムのままデフラグ作業を進めさせろ」

『し、しかし……!?』

「何があっても整備場の扉を開けるな!!　たとえ私が訪ねてきてもだ！　賊の狙いはそこにある。トラブルを起こした上で、人員や物資を整備場の中へ送り込むのが目的なんだ!!」

『っ!?』

「それは爆弾を備えた工作員かもしれないし、内部に爆薬を隠したコンピュータかもしれない!!　だから絶対にその扉を開けるな!!　その扉が開かない限り、賊は『ディープオプティカル』に干渉する事はできないのだ！　分かったか少尉!?」

『了解しました、中佐!!』

部下の声を聞きながら、ロックベルトは雨の中で立ち止まり、ほくそ笑んだ。

本当なら自分も整備場へ乗り込むつもりだったが、こうなってしまっては締め出された方が部隊全体の安全に繋がる。

整備基地ベースゾーンは広大だ。しかし敷地は限られている。

賊はいつまでも隠れてはいられない。

整備場の防備を固めた上で、敷地内をくまなく捜せば必ず見つかる。

それでチェックメイトだ。

「でもよ。そう簡単に整備場の中に入れんのかよ？」

ヘイヴィアは懐疑的だった。

「連中だってそこが一番重要だってのは分かってるはずだ。問題が起きりゃ真っ先に整備場の出入り口を固めるはずだぜ。どさくさに紛れて忍び込んだり、爆薬を詰めた物品を内部へ送り込んだり……なんて事ができんのか？」

「確かに、人や物を直接送り込むのは難しい」

倉庫の中を漁りながら、クウェンサーはそんな事を言う。

「でも、だったら……整備場の分厚い壁をすり抜けるようなものを使えば良い訳だ」

「あん？　電磁波兵器でも作るってのか」

「そんな仰々しいものはいらないよ」

言って、クウェンサーは倉庫の中から出てきた。

彼が手にしているのは、

「……除草用の、ガスバーナー？」

「耐爆用の速乾コンクリートだの圧縮されたセラミックのキューブだのは、炎を弾く。……で

も、熱は蓄積されてそのまま壁の中を進んでいく」

クウェンサーは複数のタンクとパイプを繋げたような機器を軽く振って、

「だから大型コンピュータの位置を知っておきたかったのさ。仮に分厚い整備場の中にあるんだったら……作業の邪魔にならないように、壁際に設置しているものじゃないか？」

そして侵攻が始まった。

クウェンサー達がやってきたのは整備場の裏手。

出入り口ばかりを固めているロックベルト達は気づかなかったのだろう。オブジェクトによる砲撃ならともかく、工兵が手持ちで運べる量の軍用爆薬ではとても破壊できない強度の壁だ。

『爆破して風穴を空ける』という選択肢を除外している以上、既存の出入り口へ意識を集中させるのはごく自然な事と言えなくもない。

「大型コンピュータの位置なんてどうやって特定するんだ？」

「壁のパイプから出ている蒸気。おそらく冷却装置のものだ」

とクウェンサーは言う。

「さっきも言ったろ。壁は熱を通す。それは冷気も同じさ。ようは、一番冷える所に一番冷やしたい物がある。だったら後は手で触って確かめれば良い。そこにバーナーを浴びせればドン

ピシャだ」

クウェンサーの掲げているパイプ状の噴射口から青白い炎が噴き出した。

それを分厚いコンクリートの壁に当てると、まず表面の水分が蒸発する音が鳴った。その後にコンクリートの表面が白く変色していき……さらには石を焼いたようなオレンジ色へと変化していく。

ロックベルト達が最初に言及していた、大型コンピュータのデフラグ速度が減速した理由はこれだ。

答えは熱暴走。

ただし、彼らは最初から除草用バーナーで壁を熱し続けていたのである。

その異変を、クウェンサー達が直接知る事はできなかった。

目撃者は当然、壁の向こうで『ディープオプティカル』のメンテナンスを行っていた整備兵達だ。

「何だ、黒煙……？」

「くそ、コンピュータの外装が溶けてやがる!!」

「やめろ、近づくな！　うわっ!?」

慌てて大型コンピュータへ近づこうとした整備兵の一人が雷にでも打たれたかのように痙攣し、続いて空気を割るような轟音が整備場に響き渡った。

漏電。

その事実に気づいた直後、整備兵達が注視していたモニターが完全な暗闇に包まれた。

そう。

彼らのオブジェクトのデフラグを行っていたはずのモニターが。

そして当然、結果が出てしまえば、そこから辿る形で原因を突き止める事もできる。

ロックベルト＝ディーンズゲート中佐は、多くの兵士達を引き連れて整備場の裏手へと急いだ。

「動くな!!」

怒鳴り声を上げるその瞬間まで、賊は整備場の耐爆コンクリートの壁に除草用バーナーの炎を浴びせ続けていた。

賊は今さらのようにバーナーのスイッチを切ると、それを適当に放り捨ててこう言った。

「……その慌てっぷりだと、どうやらデフラグ作業は潰れたみたいだな。オブジェクト側のクラスターの破損状況がどれぐらい広がっているか、内心ではビクビクってところか？」

「事態を理解しているのか？」
「そっちこそ」
と、もう一人の賊が言う。
「ここが本当に安全でクリーンな戦場だっていうなら、追い詰められているのはテメェらの方だぜ」
「今はオブジェクトの時代だ。オブジェクトとオブジェクトが戦って勝敗を決める形だから、兵士達は無駄死にしないで済む」
賊は楽しそうに言う。
「だが、そのルールが破られてしまえば後は総力戦だ。歩兵も戦車も関係ない。俺達は、ただ持っている戦力を全てぶつけて殺し合う。さてそうなった場合、最終的に困るのはどっちかな？　アンタ達ご自慢の『ディープオプティカル』は主砲以外でも大抵の兵器は破壊できるだろう。……が、同じオブジェクトに限っては違う。核でも破壊できないあの装甲は、やっぱりオブジェクトの主砲クラスの火力が必要になってくる」
「……、」
賊の言いたい事が分かってきた。
つまり、こいつらはどこかの世界的勢力の部隊に所属しているようだ。
（……展開状況から察するに、ハイエナを潰していた『正統王国』辺りの部隊か）

「手を退け、と言うつもりか？」

「殺し合いがお望みならその限りじゃないが、立場としちゃあ、こっちの方が強い事を忘れるなよ。何しろ、俺達には使えるオブジェクトがあり、お前達にはそれがない。どんなに理不尽な条件だろうが、呑まなきゃ皆殺しっていうのは明白だろう？」

「何ならウチの可愛いお姫様を呼んでやろうか。おっと、ここで俺らを殺しても映像はオブジェクトまで届いてるぜ。怒り狂った怪物兵器とやり合うかよ？」

「一発だ」

賊の一人が、片手で拳銃のサインを作り、自分のこめかみに人差し指を当てる。

「選択はそっちに委ねられているぞ、やりたきゃやれよ。ただし全面対決になったら、もう『白旗』なんて使えないけどな」

これが、互いのオブジェクトが万全の状態であれば、賊の言い分など切り捨てて構わないものだった。

だが今は違う。

最初にロックベルトが『動くな』と警告を発したところからも明らかだ。

オブジェクトをやられた時点で勝敗は決した。

彼らとて、口には出さないが落とし所を探していたのだ。

（……幸い、『シャーベティ』は完全にやられた訳ではない。主砲のデフラグさえやり直せれ

ば、再び戦場に立つ事はできる。ならば、今は最小の被害で食い止める事こそ重要か）

奥歯を噛み砕く勢いで怒りを押し殺しながらも、ロックベルトは言う。

「良いだろう。そちらの『提案』には従おう」

「しかし!!」

と異を唱えたのは、彼の副官として働いている少尉だ。『シャーベティ』のデフラグを強制中断させられた時点で、少尉は整備場の扉を開けてロックベルトと合流していた。

「ここが安全でクリーンな戦場だというなら、先にルールを破ったのは賊の方です！　我々が要求を突きつけられるいわれはありません!!」

「少尉」

「やりましょう！　いえ、私がやります!!　そもそも、情報通りなら、推測される敵は『正統王国』の第一世代です。それなら本調子でない『シャーベティ』でも可能性はゼロではありません!!　我々は断固として……!!」

ロックベルトは小さく舌打ちした。

それから腰のホルスターから拳銃を抜くと、躊躇なく少尉の眉間に鉛弾を叩き込む。

悲鳴など聞こえなかった。

銃声と共に迅速な死が訪れ、辺りにスコールを忘れさせるほどの静寂が広がっていく。

「……ゼロではないから立ち向かうのではなく、一〇〇でないなら速やかに下がるべきなのだ

よ、少尉」

吐き捨てるような色があるのは当然、少尉一人の行動が部隊全体の命に関わるリスクを生みかねなかったからだ。

従って速やかに処理したが、それで個人的感情が治まる訳ではない。

処理せざるを得ない状況を作り出したのは、賊の方だ。

「今回は呑もう」

恐ろしいほど冷え切った声で、ロックベルトは告げる。

「……だが、次はない。すでにお前達二人は、我々の部隊と第二世代の『シャーベティ』に真正面から襲撃されるだけの理由を作った。それが何を意味するか、ここを出て、安全だと思えるような場所まで避難してからうずくまれ。そんな場所などない事を思い知れ」

17

こうして、クウェンサーとヘイヴィアの二人は『ディープオプティカル』に一定のダメージを与える事に成功した。

当面、主砲を使えなくなった『ディープオプティカル』はその事を必死に隠蔽しながら、オセアニア方面にある多国籍軍の『資本企業』ブロックへ向かって、正式な修理を受ける予定だ

という事を、武装集団は無線を傍受して確認した。

つまり、このロワイヨーテ方面から追い払う事には成功したのである。

「素晴らしい!!　噂には聞いていたが、まさか本当にあのオブジェクトを撃退するとは!!」

武装集団のリーダーは誇らしげな表情でクウェンサー達を出迎えた。

「これでロワイヨーテ方面が『ディープオプティカル』に蹂躙される事もなくなるだろう！　あなた達が見てきた悲劇も、見る事もできなくなった悲劇も、もう起こる事はないのだ!!」

その言葉に嘘偽りは何一つなかったが、しかし同時に言い忘れている事もある。

彼は後ろに手を回していて、そこには大型の拳銃が握られていた。

役割を終えたヒーローに用はない。

その役に応じた地位や報酬を求められては面倒だし、そもそも、彼らは武装集団の性質のようなものをあまりにも覗き見しすぎている。

「今日はとことん呑もう!!　我々も苦しいが、『ディープオプティカル』さえ立ち去れば収入の基盤も次第に戻ってくるはずだ！　これはその前祝いのようなものも兼ねているので、遠慮しないでほしい!!」

「……その前に、伝えておく事があるんだ」

クウェンサーは静かな調子で呟いた。

その雰囲気の違いに、リーダーはわずかな緊張を得た。後ろに回した手で握っている拳銃の

グリップに、不自然な力が加わる。
しかし、その言い知れない感覚は淡かった。
それが何であるか分かるより前に、もっと特大の感覚が上から塗り潰してしまった。
森の木々の奥から複数の視線を感じる。
慌ててリーダーが見張り台の方へ目をやってみれば、すでに頭部を撃ち抜かれて手すりに上半身を預けていた。
直後に砦を囲む有刺鉄線の数ヶ所で爆発が起こり、複数の兵士達が飛び込んでくる。
『正統王国』の歩兵達だ。
「俺は言ったよな。ハッピーエンドで終わると思うな、って」
迅速に動く歩兵達は、砦の各所にいる武装勢力の面々を次々と撃ち抜き、また降伏させていく。何人かは地の利を生かして『正統王国』の歩兵達の死角から銃弾を叩き込もうとしたが、そのたびにスナイパーの弾丸や遠方からの迫撃砲がリスクを排除していく。
それでもリーダーは反撃に出ようとした。
だが、直後に彼は動けなくなった。
理由はシンプル。
『正統王国』の歩兵達の持っているアサルトライフル。その先端に取り付けられた、単なる照準補助にしては妙に大きなセンサーだ。

そう。

オブジェクトとリンクし、ライフルで狙った箇所へ正確に砲撃を行わせるための『カーソル』だ。

武装集団のリーダーは知る由もなかったが、クウェンサーはヴァルキリエの女に、ダイエットドリンクの瓶と一緒にこんな注文を出していたのだ。

……長距離無線があるなら、『正統王国』の整備基地ベースゾーンへ、俺の識別番号と一緒にこう伝えてくれ。もうすぐ終わるから、一〇時間後にポイントRNまで迎えに来てくれ、って。

そして、迎えはやってきた。

クウェンサーやヘイヴィアにとっては、誘拐犯から救出してくれる守護の象徴として。

武装集団やそのリーダーにとっては、これまでの罪を清算するための死神として。

……軍規を重んじるフローレイティアなどはクウェンサー達に引導を渡そうとしている可能性も完全には否定できない訳だが、それでも、武装集団やそのリーダーほどのリスクはないだろう。

当然ながら、『ベイビーマグナム』を操るエリートのお姫様、さらに運用の方針を決定するフローレイティアに、武装集団への容赦や加減をする理由はない。

クウェンサーやヘイヴィアがどうのこうの、といった問題ではない。そもそも、彼ら第三七機動整備大隊は、ハイエナのような武装集団の存在を認めておらず、そうした集団の活動に対しては武力によって徹底的に鎮圧する事をすでに示している。

「理由はどうあれ、志願によって編成されたものであれ、アンタ達は自分の目的のために、あの子達の手足を切り刻んだ」

ついには、間接的に火力を提供するオブジェクトそのものの痕跡が戦場へと拡散していく。

静電気による推進機関のものだろう。遠くから響いてくる雷のような低い音は、武装集団やそのリーダーにはどう聞こえただろうか。

彼は後ろに回した手で握っていた大型の拳銃を、そのまま泥の中へ落とした。

破れかぶれでクウェンサー達に発砲する事もできたはずなのに、落とした。

それほどの畏怖。

食物連鎖と同じく、根本的なところで人間の魂を摑み取ってしまうほどの火力。

何度もオブジェクトとぶつかってきたクウェンサーは、リーダーの胸にどんな重圧がのしかかっているかを十分に理解した上で、しかし首を横に振ってこう言った。

「そのツケは、必ず払ってもらう時が来るのを忘れるなよ。……これも前に言ったよな？」

18

終わってしまえば、あっという間だった。
クウェンサーやヘイヴィアが無線で指示した木造家屋だけは、『ベイビーマグナム』はきっちり無傷で残した。例の子供達が収容されていた場所だ。だがそれ以外の全ては例外なく消し飛ばされる。
戦場へ直接顔を覗かせる事すらなく
歩兵達から受け取った照準補正情報を参考に、各ポイントへレーザービームを照射するだけで。
人も、物も、建物も。
黒い炭となって引き千切られ、赤い炎となって消え行くそれらを眺めて、クウェンサーはどうしようもないほど、人間が人間を支えるために必要な力が萎んでいくのを感じた。
おそらく、クウェンサー達がやってきた事も、『ベイビーマグナム』にとっては、取るに足らない、猫とネズミの戦いのようなものに過ぎなかったのだろう。
戦争というものを一手に引き受け、歴史そのものさえ左右するあの怪物兵器を存分に動かせれば、そもそも、あの武装勢力もクウェンサー達に頼る必要もなく、自分の子供達に刃を向ける事もなかったのだろう。

歴史を動かせる。
流れを変えられる。
そういったものを、持っている者と、持っていない者の違い。
「志願した、って言ってたよな」
クウェンサーはポツリと呟く。
「あの子達は、そうまでして信じたかった世界を壊されて、俺達を恨むのかな」
「知るかよ。それを決められるのは俺らじゃねえ。当のあいつらにだけ許された自由だ」
ヘイヴィアはそう言ったが、どこか歯切れが悪かった。
彼は一度息を吐き、それから告げる。
「……なあクウェンサー」
「何だよ」
「もしもさ。もしも、俺がいつか本当に、ウィンチェル家を継げるようになったら、その時は有り余ってる金を使って……」
「俺もオブジェクトの設計士になれたら……って言いたいところだけど、それってちょっと違うよな」
「？」
「……今からでも始められる。どんなにちっぽけでも」

豪雨のようなスコールは止む。

木造家屋の中で震えていた子供の一人が杖をついて外へ出ると、そこに光るものがあった。

ぬかるみの中で輝いていたもの。

たった二枚の硬貨に込められたその意思を、彼が気づく日は来るのだろうか。

第二章　白い砂浜のクリスマス　〉〉オセアニア駐留休暇戦（？）

1

オセアニア方面。
この地で圧政を強いてきた独裁政権が崩壊した事で、多国籍軍主導の国家再興の動きは加速していた。
ここに駐留している、『正統王国』第二七機動整備大隊は一〇〇台以上の大型車両で編成された特殊な車両団だが、その周囲に展開される『街並み』についても例外ではなかった。
「……こういう風に広げられると困るんだけどね」
フローレイティア＝カピストラーノは、細い煙管から甘い香りの煙を漂わせつつ、そんな事を言う。
話し相手は、『ベイビーマグナム』の整備を主導する婆さんだ。
「そうは言っても、金の動くところに商人が集まるのは世の中の基本じゃろう」

「不測の事態に民間人を巻き込まないようにわざわざ都市部から離れているのに、その周りにテントやキャンピングカーをずらっと並べて市場を作られたら対応できない。どさくさに紛れて整備基地へ砲弾を撃ち込もうとする輩の潜伏と接近にも使われそうだし」

「しかし車両団をよそへ移動させても、連中は構わずついてくるぞ。おそらく、そのために『組み立てやすい』店舗を作っているんじゃろうからな。ま、金を落とせば民衆は納得する。オブジェクトの技術関連の機密体制が、秘密主義の陰謀論と勘違いされる事もなくなる。そういうCMじゃと思っておれば問題ないじゃろ」

フローレイティアと婆さんは整備基地内の砂地にパラソルを突き刺し、レジャーシートの上に座ってくつろいでいた。

しかしそんなバカンス気分から二メートル離れたところでは汗と涙の地獄絵図が。

「クウェンサー、生水のろ過装置は一五ボックスでワンセットよ。受け取りのチェックを端末に入力したら、全部倉庫に運んでおくように」

「……はぁ、ひい……」

「クウェンサー、そっちの箱はシャンパンのボトル。台車を使うのは結構だが揺らしたらぶっ殺す。冷蔵室の扉は開けっ放しにしないように」

「……ぜえ、はぁ……」

「クウェーエエエンサァアアー、そっちは私の日本刀でそっちは私の甲冑。そっちは私の雛

人形一式でそっちは私の振袖よ。丁寧に運べ……せっかくの多国籍軍だからね。市場がカオスな内に他勢力の掘り出し物を見繕っておかなければ」

ぼてっ、と砂地の真ん中でクウェンサー＝バーボタージュは崩れ落ちた。

「……む、無理です。無理無理。もうかれこれ二日は肉体労働満喫中ですけど……。これのどこが有給休暇だっていうんですか。やっと合流したっていうのに、話題の水着回はどこへ行ったんだ……」

「あん？　戦争条約無視して勝手に『資本企業』の第二世代と戦っちゃったクウェンサー君が何だって？　『ディープオプティカル』へのダメージを必死に上へ強調し、数々の始末書を書かされ、ジジィどものセクハラ紛いの冗談を愛想笑いで乗り切ってお前達の軍法裁判を何とか回避してやった私に一体何だって？」

「うぎゃー!!　何でもやります一生ついていきます上官サマ!!」

砂まみれの顔を上げて絶叫するクウェンサー。

……なんだかんだで楽しんでいるようじゃの、と婆さんがボソッと呟いたが、それは誰の耳にも入らない。

クウェンサーは体についた砂を払いながら、

「ち、ちなみにヘイヴィアの方は……？」

「便所掃除に浴室の配管掃除に洗濯機のドラム掃除に車両団のエンジンルームの掃除。一〇〇

台以上で構成される整備基地全部だけど？」

「う、嘘だろ!?　ぬるぬるしかない……!!」

別種の地獄へ突き落とされたヘイヴィアには祈りを捧げる他ないが、クウェンサーもクウェンサーの地獄と折り合いをつけなければならない。

フローレイティアの方は全く気にせず、

「それが終わったら、そうだな。もうすぐ昨日買いつけた桐箪笥が整備基地へ届く。民間の配送業者では基地の内部までは入れないから、ゲートで不審物のチェックを終えたら、お前が私の部屋まで運んでおくように」

「パワードスーツが欲しい!!」

「後は……そうか、あれがあったな。重要な件よ」

「死んじゃう。死んじゃいますって!!　ははーん、さては今回のラスボスは爆乳だな!!」

「何だ。そんなにきついの」

フローレイティアは緩く煙を吐きながら、

「お姫様がグレートバリアリーフで海水浴をご所望だから、護衛部隊を編成する必要がある訳なんだけど……お前はやっぱり油と排気の匂いで満たされた車両団の方が好きなのね」

「タノシマセテいただきますっっっ!!」

2

一方、ヘイヴィアの方もようやく地獄から一時解放され、整備基地ベースゾーンの外でくつろいでいた。

「……クソッたれ。爆乳のオモチャにされてんのは周知の事実だから、油断してるとどいつもこいつも無茶ぶりばかり突っ込んできやがる」

キャンピングカーを改造したコーヒーショップで、『貴族』サマが飲むものとは思えないようなアイスコーヒーを受け取るヘイヴィア。真上から降り注ぐ陽光と、砂地で反射される照り返しのダブルパンチを浴び続けるこの環境では、とてもではないがホットの飲み物など頼んでいられない。

どこも同じだろうが、整備基地ベースゾーンの周囲に展開される『街並み』は、『安全国』の標準的な都市風景とも、このオセアニアの都市部とも全く違う。

コンクリートでできた建物なんてない。

そのどれもが、三〇分以内に組み立て・解体のできる作りになっている。オブジェクトやその整備基地ベースゾーンは軍事的な状況に合わせて即時展開・移動するため、金づるを逃さないよう、『街並み』の連中も考えている訳だ

と、氷も入っていないアイスコーヒーをちびちび飲んでいたヘイヴィアの耳に、甲高い少女の声が飛んできた。

『ネットのまえのみなさーん!!　本日はオセアニアンライブ・クラスAへようこそーっ!!　おほほほほ!!』

見れば、店舗に置かれた立体プロジェクターが数日前に開催されていた『情報同盟』のアイドルライブを垂れ流しにしている。開催後一週間は無料配信されるとの事だったが、客寄せに使うのはありだったのだろうか？

（ま、店のオヤジが観てるだけって言っちまえばそれまでっぽいが）

映像はモニターではなく、空間に直接表示される立体映像だった。詳しい方式はクウェンサー辺りなら鼻息荒げて説明しそうだが、ヘイヴィアは知らない。確かに複数の方向から光波を浴びせて、その振幅数の増減で表示させていたとか何とか……だった気がする。

映像が立体に見えるのは正面からだけで、横から見ると『右目用と左目用の映像のブレ』をもろに浴びて目が回るとかいう話だった。

「ブレを作るために回折波を使ってるんだよ　これでも最新式さ」

と、暇なのか店主が声をかけてきた。流行歌を熱唱するアイドルよりも、まずプロジェクターの自慢をしたのが少し世知辛い。

機械自慢は『学生』にしてくれ、と思ったヘイヴィアはさっさと軌道を曲げる。

「おっさんはこういうアイドルとか好きな方なのか？」

「他のエリートに比べりゃね。救国の英雄だの一〇〇万ドルプレイヤーだのより、『情報同盟』のアイドルの方がまだしも親しみはある」

立体映像の中で踊っているのは、長身で縦ロールのGカップだった。もうこれどう考えても乳を揺らすために振り付け考えているよね、といった感じの映像にヘイヴィアは目をやる。

すると店主はこっそり付け足すようにこう言った。

「……胸もデカいしな」

「やっぱりそっちかよ!!　まぁ、うちのお姫様もあれぐらいサービスしてくれりゃあな」

呟くヘイヴィアの目の前で、踊るGカップの特殊スーツの表面に描かれた文字や模様がリアルタイムで変化していく。

普通の縫製では絶対に起こせない現象。

Gカップのアイドルは、空中に現れたリボンのような五線譜を、歌に合わせて妖艶な体へとまとわりつかせていく。

「クラスAは派手だよね」

店主はそんな事を言った。

「拡張現実のA。おそらくホントのアイドルはブルーとかグリーン一色のタイツを着て踊っているんだろうけどさ、こうして映像を観ているだけだとやっぱり見栄えが違う。ま、完全にフ

イクションのクラスVだと一歩離れちゃうんだけど」
「俺はリアルのRの方が良いけどなあ。クラスAのパンチラって最初っから設定されてるものなんだろ？」
「フトモモから目を離さないまま何言ってんだ」
「残念俺はおっぱい派」
真面目な顔でそんな事を言うヘイヴィア。
……が、衣装の文字や模様を自在に調整できるという事は、アイドルの体型などにも直接干渉できる可能性があるのだが、そこまで彼らは想像が働いていないらしい。
と、安物のアイスコーヒーに再び口をつけながら、なんだかんだで立体映像の胸元へ目線を吸い寄せられていたヘイヴィアだったが、
「あら。ヘイヴィア様。ヘイヴィア様じゃーねーですか」
「ぶっ!?」
ヘイヴィアがアイスコーヒーを噴き出しかけたのは、声を掛けてきた少女に見覚えがあったからだ。バンダービルト家のご令嬢にして、ヘイヴィアの『現状では非公式にせざるを得ない』婚約者。本来であれば、『正統王国』の『本国』はおろか、お屋敷の深窓とワンセットでなければおかしいはずの人物である。
雑多でグレーな雰囲気の市場には似合わない、全身宝石だらけのドレスの少女を見て、ヘイ

ヴィアはわなわなと震えながら、
「てっ、てめ……何で……？」
「おかしな事じゃーねーでしょう？　オセアニアの軍事政権は崩壊し、多国籍軍による侵攻作戦も終結したんですから、いわばここは『安全国』。軍人以外の者が足を運んじまっても問題はねーはずです」
「（……軍事国の問題が解決すると、今度は多国籍軍がどこの利権をどう手に入れるかで小競り合いが起こるから、実は今まで以上に緊迫してるんだがな）」
「何か言いまして？」
ヘイヴィアは首を横に振る。
「……それにしても、護衛の連中はどうしたんだ？　まさかこんな所まで一人旅って訳じゃねえんだろ」
「家柄がどうの品格がどうのとグチグチうるせーので、適当に撒いてやりました」
「ますます面倒臭せえ!!　ちょっと会話して軍の仕事に戻る訳にもいかねえ……!!」
「あら。でも、私が連中を撒いたからこそ、こうして今も優雅にお話しできんですのよ？　ロミオのヘイヴィア様？」
「ジュリエットのご令嬢さんよ、テメェの痕跡を追って護衛がここまでやってきたら、俺は問答無用で撃たれるかもしれねえんだがよ」

「あら。せっかくの婚約者との邂逅ですのに、あまり感動してねーみてーですわね」

少女はわずかに眉をひそめ、

「……まさかと思いますけど、私のいねー間に、悪い虫でもつけていねーですわよね？」

「そんなチャンス全くねえよ!!　大体いつも俺の隣でボケッと突っ立ってるヤツがおいしいところはみんな持っていっちまう!!」

「という事は、おいしそうなものがぶら下がっている場面まではあったんですのね？」

「……、」

シンクロ競技のように二つの眼球を泳がせるヘイヴィア。

バンダービルト家のご令嬢はにこやかに微笑むと、

「ヘイヴィア様。私はそこまで器の小さな女ではありません。そりゃー『貴族』の男ですもの。愛人なんぞ作ってなんぼ。それもまたステータスの一つなんでしょーよ」

ただし、と。

きっちり区切って、少女の口調が一気に冷える。

「……もしも一瞬でも、ほんの一瞬でも、『私の上に誰かを置いたら』……その時は分かってんでしょーね？」

「そ、そ、そりゃもーあれですよ決まってんじゃないですかあれですよあれあれ」

「具体的に言うと、『塔』のコレクションを使います☆」

「それテメェんトコの遠戚の暴君が使ってた鞭とか木馬とかじゃねえか!!　『家』を取り潰すほどの過去を決して忘れてはならないとかいう名目で保存しているヤツ!!」

爆乳の上官とは別種の威圧感に背筋の悪寒を止められないヘイヴィア。

婚約者は可愛い子なのだが、残念ながらツンとヤンのパラメータがあるらしい。

3

お姫様と海水浴。

お姫様と清楚水着。

フローレイティアから操縦士エリートの護衛部隊へ加わるように命令された時点で、クウェンサーという人物を動かす原動力はおかしなモードへ突入していた。ガソリンエンジンにロケット燃料を入れて走らせているようなこの感じ。三日間徹夜したのに眠気が一周回って全く寝る気が起きず、逆に不安になるのにも似た状況は、運気がてっぺんまで上がってしまったクウェンサーが、無意識の内にそれを一瞬一秒でも目に焼きつけようとしているのかもしれない。

「……クウェンサーもごえいに加わるの？」

「そんなトコです水着ちゃん!!」

「？」

「さあ行こうさあさあ行こう海へそして分かっているね水着ちゃんあなたに求められているものは!!」

ぐいぐいとお姫様の肩を押して、軍用の4WDの後部座席へ乗せるクウェンサー。

整備基地から海岸まで近いとはいえ、一応は守備範囲の外へ出る。車列はこの4WDを中心に前後二台、さらに側面を守る形で装甲車が一台ずつ。俗にいう『サーベル型』と呼ばれる陣形で移動する事になっていた。

都市部と違って道幅を気にせず走れる砂漠だからこそ使える陣形だが、対戦車ミサイルなどの突発的な襲撃程度ならともかく、あのオブジェクトが出てきたら絶対に心許ない。

「グレートバリアリーフだっけ？　世界最大の珊瑚礁」

「……どこでも良いから、バスタブ以外でおよぎたい……」

お姫様は体に張り付く形の特殊スーツを指で摘んで引っ張りながら、そんな事を言う。内部空調も完璧なはずだが、やはり感覚的な不快感を完璧に取り除く事はできないのだろう。

途中で襲撃などに遭う事もなく、車両団は砂浜に到着した。

砂漠の黄土色の砂とは明らかに違う、白くきめ細かい浜辺が広がっていた。青と緑を溶かしたような海は、その表面を眺めるだけでも絶景だし、潜れば極彩色の熱帯魚が別種の天国を築き上げているのだろう。

そしてクウェンサーはその全てを無視した

「さあ水着様!!　今こそその威容を存分に見せつける時がやってきたのです!!　基本で攻めるなら清楚系ワンピース水着、だが意外性で押すならド派手なビキニあるいは一品モノのカスタムエロ水着か!!　ではお姫様あなたの答えは!?　ギブミーアンサー!!」

そもそも名目では護衛となっているものの、クウェンサーは他の『本職』と比べると明らかに装備も鍛え方も違う。これは華奢な少女の水着姿を眺める係という天が与えたご褒美タイムであり、それ以外の事に割くエナジーなど一％もないし今ならオブジェクトが攻め込んで来ても余裕でシカトするに決まっているのである。

一方、お姫様の方はそんな思惑には全く気づいていないので、

「？」

「おおっとう!!　だが海水浴場として整備されている訳ではない！　モーテルなどもまだ建っていないから安全に着替える事はできないぞう！　これは４ＷＤの陰に隠れて恥じらいながらのお着替えゾーンへ突入か！　何だよもー水着だけでもご褒美なのに水着になる前から始まってんのかよー御馳走さまです!!」

クウェンサーのテンションが果てしない事になっているのは、やはり普段のお姫様の格好もあるだろう。

肌にぴったり吸いつくあの特殊スーツもそれはそれでなかなかのもの……なのだが、いかんせんガードが堅過ぎてじかに柔肌を見る機会なんぞほとんどないのだ。そして軍服なのだから

当たり前なのだが、お姫様は年中あの格好である。パンチラのパの字もねえ超健全鉄壁ガード。

『もうそろそろ、次のステップではないかね少年』と自問自答していたクウェンサーとしては、ここに来て確率変動水着チャンス到来とあっては、脳の調子が少々おかしな事になったとしても、それは仕方がないの範疇に収まってしまう程度のものでしかないのだ。

「さあ水着様!!　アンサーです、アンサーのお時間です!!　こちらの心構えは完了しました。今の俺ならちょっと大きめの絆創膏でも受け入れられる。さあ水着様のアンサーは!?　アンサーの方お願いします!!」

「みずぎってなに？」

……。

その瞬間、クウェンサーはおろか、その近辺で真剣に警護活動をしていた護衛部隊の面々までもが密かに固まった。

この流れはまずい。

とっさにそう考えたクウェンサーは、必死に今のレール切り替えポイントをどうにかしようとする。

「ひ、姫……？　質問に質問で返してはなりませぬ」
「みずぎなんてもって来てない」
すっとぼけた答えを聞いて、クウェンサーはカッ!!!!!!　と両目を見開いた。
もう無理矢理でも良いから肌色方向に持っててやる。
「ならば全裸!!　そうかーそれがお姫様のアンサーかー流石にそこまでは……!!」
「このままおよぐけど？　エリートのとくしゅスーツはあらゆるかんきょうに対応できるように作られているから、スーツをきたままでももんだいないし……」
「あかん!!!!!!」
フローレイティアの士官室で見たマンザイ映像のせいか、妙なイントネーションでクウェンサーは絶叫する。
「それはその……駄目だ!!　その特殊スーツは確かに素晴らしい！　素晴らしいが……ここはそういう場面じゃないっ!!　求められているのは意外性なんだ!!　ここでいきなりオブジェクトが出てきたら本気で激怒するのと同じように、ここで特殊スーツという選択肢は絶対にありえないんだ!!」
「？」
「可愛らしく小首を傾げたって駄目だー!!　ハッ、今からでも遅くはない！　整備基地周辺の市場まで戻れば可愛い水着もエロい水着ももっとエロい水着も取り揃えているはずだ!!　行こ

うお姫様。何なら恥じらいながらの水着選びという段階からの導入でも俺は全く問題ないから……!!」

しかしお姫様の手を摑んで走り出そうとしたところで、周辺の護衛部隊から複数の銃口を向けられて固まるクウェンサー。

どうやら、タイムスケジュールや活動範囲は厳守という方向らしい。

「……でもこの場面ならスク水が出てきたってバチは当たらないと思うんだ」

その意見に関しては護衛部隊にも頷かれた。

4

「おっ。姉ちゃん達は『信心組織』の人達かい？　食事に制約があるなら早めに言ってくんな」

そんな事を言ったのは、今のオセアニアならどこにでもいそうな商店の主人だった。

耐水布のテントで日除けの屋根だけをつけた簡素な店舗には、大きな鉄板と少数の椅子、そしてクーラーボックスに収まった海産物が用意されている。

対して、『客』は愛想笑いとしては完全に失敗している、うっすらとした笑みを浮かべた。

ヴァルキリエのサラサ＝グリームシフターだ。

「いいや、我々の教義にはそのような制約はないよ」

「タコとかイカとかもムシャムシャいけます」
「イノシシとかの方が食い慣れちゃいますがね」
部下のレイチェルやマリアも好き勝手に言う。マリアの方は、『情報同盟』のアイドルエリートの立体映像を眺めながらの生返事だった。
店主は笑って、
「なら遠慮はいらねえな。せっかく南半球までやってきたんだ。多少のゲテモノを選んだ方が思い出になるってもんだぜ」
「支払いも『信心組織』になるが、構わないか？」
「ええと、『信心組織』だと紙幣よりも貴金属を重視しているんだったか？　現金の為替は固定されているから、変動レートに対応するためにプラチナとかダイヤとかを『外』との取引に使っているとか。その辺にいる鑑定士を呼ぶから手間はかかるけど、まぁ何とかなるよ」
「いいや、『信心組織』の紙幣を使わせてもらうよ」
彼女はそう言ってから、
「……生憎、プラチナは信じていないからな」
付け足すような言葉にほんのわずかな間を与えてしまったが、店主の方はその変化に気づかなかったようだ。
「ま、鑑定額で難癖つけられやすいからなあ。信頼性の高い世界的勢力の現ナマがあるならそ

れに越した事はねえ」

見た事もない色合いの小型魚が目の前で捌かれ、熱した鉄板の上へと置かれていく。一体何に使うつもりなのか、内臓も捨てずに、味の濃い調味料と一緒に小鉢に入れると、店主はグチャグチャとかき混ぜ始めた。

鉄板料理は一種のショーだ。

エンターテイメントとして組み上げられた鮮やかな手順で熱帯魚に熱を通していく店主は、やや苦笑いしながらこんな事を言う。

「牛肉があるともっとバリエーションが広がるんだが、値が張ってやがるからな」

「言われてみれば、オセアニアの自然バランスってまだ不安定なんでしたっけ」

鉄板の上で躍る食材に目を奪われながら、レイチェルがそんな事を言う。

「独裁側が過剰な緑地化を進めて、抵抗していた『部族』の方は元の砂漠を求めて……あっちこっちで何度も環境を変えてきたから、土地の質そのものを多国籍軍の方で慎重に調整する必要があるとか何とか。放牧をやりすぎると緑と砂漠のバランスが崩れるから、そっちもかなり制限されていましたよね」

「おかげで国土は広いのに輸入に頼る有り様だ。けど、最近じゃプラチナの採掘が軌道に乗り始めたからな。ドーム型の畜産施設とコンテナ状の飼料工場を『情報同盟』辺りから大量に仕入れるって噂も出てるよ。ま、それができれば砂漠だろうが関係ねえ。外来飼料の繁殖は『部

族』が嫌がるだろうが、コンテナの中で隔離されて栽培される分には問題ねえだろうしな。成功すりゃ、太陽光発電と一緒に、砂漠にデカい無菌牧場が出来上がるぜ。食糧問題は一気に解決だ」

そこまで楽しそうに言ってから、店主ははたと気づいてこう付け足した。

「おっと。『信心組織』の人達だと、こういう人工的に食糧を作ったりする技術は反感が大きいかな？　遺伝子組み換え作物とか」

何しろ進化論やビッグバンは認めるものの、『その科学的な偶然は、やはり人ならざる超自然存在がトリガーとなって引き起こされた』というのが『信心組織』の持論である。

自然の営みに人の手を加えたり、人工的に再現する事にピリピリしているのは事実ではあった。

しかしサラサはあっさりと首を横に振って、

「食糧関連の八九項目については『中央』の宗教会議で結論が出ているから問題は消えているよ。それに、『信心組織』とは周りが考えているほど頑なでもない」

「そんなものなのかね」

店主は鉄板で手を動かしながら、ピンと来ない表情で呟く。

サラサは続けてこう言った。

「例えばの話をしよう。自然界には絶対に存在しない物質を、人の手で作ったとする。『信心

組織』は日くじらを立てると思うかね？」

「……そりゃまあ。神の摂理に反するとか、神が創った世界に不純物を持ち込んだとか、そんな風に言うもんじゃねえの？」

「プラスチックを作ったぐらいで矛を持ち出すほど過敏じゃないさ」

サラサは軽く笑って、

「その辺りは譲歩する訳だ。酸素と水素を使って水を作ったとしたって、元となる物質は『神様が創り上げた』最初の世界から持ち出したものだ。つまり作られた水は『神様が創り上げた』地点からの派生に過ぎず、『神様が創り上げた』世界に不純物を持ち込んだ訳ではない事になる。それはプラスチックやカーボンナノチューブにだって当てはまる」

「へえ」

「我々だって、別に好き好んで争いをしている訳ではないからな。譲歩できる範囲でなら可能な限り譲歩し、争いを回避しようとするんだよ」

そこまで言ったサラサは、ふと表情を消し、口の中だけで呟く。

「（……ただし『あの老人』のように、どうあがいても譲歩のできない領域に足を踏み込んだ者については、何があっても必ず暗殺させてもらうがね）」

「？」

小さな声だったので、店主の耳には入らなかったようだ。

会話が途切れ、しかし店主の注目がこちらに集まっている内に、サラサは話題を切り替えてこう質問した。

「ボートはどうかな？」

それだけでは、意味の分からない問いかけだっただろう。

しかし店主は間を置かず、即座に答えた。

「いいやあ、ダメだな。つい最近までは密漁も見逃されていた感はあったが、今じゃ船は控えているよ。……まぁ、団体のお客様がやってきてくれたんだから、こっちとしては文句は言わねえがな」

「……空は？」

「漁じゃなくて、人や物でも運ぶ方かい？　だが難しいな。ここはオセアニアだぜお客さん。いろんな勢力のオブジェクトが警戒してる。所属不明のヘリなんか下手に飛ばしたら、対空レーザーで落とされちまう。『ある勢力』へ働きかける事はできても、『それとは別の勢力』には通用しない、なんて問題もあるからな」

前菜は薄く切って焼いた魚の切り身の上に、血の味の強いソースをかけたものだった。サラサは切り身にフォークを突き立てながら、なおも質問する。

「最近、と言ったな。何があった？」

「『正統王国』さ」

店主はクーラーボックスから取り出したナマコを包丁で切りながら答える。
「『ベイビーマグナム』様だったかな。あれがビーチの近くに駐留した事で、監視網の布陣が大きく変わった訳だ。近隣の島々とオセアニアを繋ぐルートも、今は寸断されているって話だぜ。ただ、さっきも言ったが軍人ってのは団体のお客様だ。概ねは歓迎されていると思うよ」
「……となると、ロワイヨーテ方面からの荷物も届かない訳だ」
「そうなるな。まったくオブジェクトってのはあっという間に展開するから怖いよな。昨日までの安全地帯が、明日には最前線になってるかもしれねえんだ」
「……」
サラサは目の前で躍る金属製のヘラを眺めながら、わずかに目を細める。
あの島では、結局取り逃がした。
となると、彼女のターゲットは今……。

5

さんざんな一日だったのだ。
クウェンサーとヘイヴィアはもうすぐ夕暮れという時間帯に、整備基地ベースゾーンの近くで合流した。

「……そっちどうだった」
「……テメェの方は？」
そのやり取りだけで、何か大きな魚を取り逃がしたのは明白だった。
クウェンサーはため息をついて、
「……何かどこかで間違えたんだ。セッティングは完璧だったはずなのに、一体、一体何がどうして……」
「……俺はあれだぜ、世間知らずのお嬢様を護衛の元まで送り届けたら、その護衛から拳銃片手に三時間も追い掛け回されたんだぜ……」
と、ぼろぼろになった二人の携帯端末に、メール受信の振動が伝わった。
「見たくない……!!　これ絶対フローレイティアさんの無茶ぶり再開の合図だぞ!!」
「クウェンサー、ちょっとこの拳銃をテメェに渡すから俺の足を撃ってくれねえか？」
そうまでしてもサボりたい二人だったが、実際に画面へメール本文を表示させると、こんな感じの内容が記述されていた。
『息抜きのためにクリスマスパーティをやりたいんだけど、民間のバーテンダーを整備基地の内部へ入れる訳にはいかない。よって、必要最低限のシフトメンバー以外は基地の外にあるポイントＹＩへ集合。今夜は浴びるほど呑め』
「……、」

「……、」

クウェンサーとヘイヴィアは無言で互いの顔を見合わせた。

そして彼らは、静かに、しかし力強く拳を握り締める。

「チャンスはまだ残っている……!!」

「おいおい!!　お姫様や爆乳が集まるクリスマスだぜ。そしてオーストラリアの二月は夏!!　これでまともなサンタクロースになる訳がねえ!!　肌色ミニスカ太股おっぱいたゆんたゆんじゃー!!」

ポイントＹＩはここから近い。

どう考えても、大渋滞その他諸々で間に合わないなんて事はない。

水着チャンスは逃したが、まだサンタチャンスが残っていた。

クウェンサーとヘイヴィアの馬鹿二人は一刻も早く確率変動の天国へ向かうため、行動を開始する。

彼らの前には、真っ赤なバスと青い色のタクシーがあった。

クウェンサーは言う。

「俺は赤い方のバスに!!」

「じゃあせっかくだから、俺は青い方のタクシーにするぜ!!」

……そして二人の運命が分かれた

6

ポイントＹＩ、つまりパーティ会場に辿り着いたクウェンサーは、軽く周囲を見回した。

どこかの店舗の中、という訳ではない。

そもそもテントやキャンピングカーが主流となっている『街並み』では、ゆっくり座ってくつろぐような店はないのだ。

市場の一角は広場のように開放され、そこに多くのテーブルや料理などが運ばれていた。

元々『街並み』の店舗は自由に移動できるのが強みなのだ。最大級の顧客に気を遣って、場所を開けたのだろう。

（……ヘイヴィアはまだ来ていないみたいだな）

クウェンサーと同じ軍服を着た兵士達がそれぞれ料理やら酒やらに手を伸ばし始めているが、ヘイヴィアを発見する事はできなかった。

「おっ。ばあさん発見」

「何じゃ。こんな時ぐらい、もっと若い連中に声をかけられんのか」

「ばあさんはスクランブル対策として整備場で待機せずに済んだんですね」

「お姫様さえ自由時間を与えられているんじゃからほとんど意味ないじゃろ。ここは多国籍軍

じゃからな。警備については、今の時間帯は他のオブジェクトがやっとる。……しかしそっちはそっちで、今ならオブジェクトを観察する絶好のチャンスじゃないかね？」

「作業してる人がいないと学べるもんって少ないんですよね。それかガチで戦ってる時。上っ面を眺めるだけなら、ミリタリー雑誌のサイトでも見てりゃ良いですし」

「つまらんヤツじゃな。発想に洒落が利いていない。海外土産などを頼まれないタイプの人間じゃろ」

「オセアニアのお土産ならプラチナとか欲しいですよね。最近ザクザク採れているらしいですし」

「……相変わらず『豪商』のような寝言を言う男じゃな。しかも話題も占い。プラチナが安定している時代はそろそろ終わるぞ。工業用のプラチナを量産する方法の研究が進められているからのう」

「え、プラチナって工業目的で使うんですか？」

「オブジェクトにも使われておるよ。しっかり勉強しろ、『学生』」

そんな事を言い合っていると、早くもカクテルグラスを手にしたフローレイティアが、クウエンサー達の背後から近づいてきた。

「何だ二人とも。まだ食べていないの　味もそっけもないレーション以外の食事なんて、次はいつ出るか分からないぞ　口にできる時に口にしておけ」

「だったら根本的にレーションをどうにかしましょ……ぶふっ!?」

振り返ったクウェンサーがその場で動きを止めたのには理由がある。

フローレイティア＝カピストラーノ少佐がミニスカサンタになっていたからだ。しかも上半身なんぞ面積の少ないビキニ型の衣装しか身につけていない。谷間もおへそもフルオープンな感じなのである。

お姫様の水着フェイントから、ずっとおあずけを食らっていたクウェンサーは、その肌色を見て危うく感情の制御に失敗するところだった。

「ここに来て飛び道具かーっ!!」

「言っている意味は分からないが、ずっと軍服というのもあれだしね。……正直、あれは砂漠に適応した服装とは言い難い」

「まったく、日が暮れると急速に冷えるぞ。その歳で腹を出して風邪を引くというのでは格好もつかないじゃろうに」

婆さんは呆れたように言ったが、その表情はどこか楽しそうだった。

フローレイティアはやや怪訝な調子で、

「そう言えば、ヘイヴィアのヤツは？　まだ来ていないの？」

「いや、それが……」

クウェンサーが答えようとしたところで、無線機から小さな電子音が鳴った。

（一体誰だ？　整備基地の連中？）

わずかに上官達から離れ、無線機のスイッチを入れたクウェンサーだったが、

『俺だよ俺俺!!　ヘイヴィアなんだけどさー!!』

「お前どこ行ってる訳？　こっちはもうパーティ会場に着いてるよ。だから赤いバスの方が……」

『絶賛事件に巻き込まれ中だよちくしょう!!　今夜は俺がヒーローだぜ!!　そこでテメェに一つ頼みがあるんだけどよ！』

「協力してくれなら絶対ヤダ!!　俺はもうパーティ会場から一歩も外へ出ないって決めたんだ!!　何故ならたわわな感じのサンタさんが俺の目の前に立っているから!!」

『そうだよそれで良い!!』

「？」

『どう考えたって街中でドンパチやるのは避けられねえ。でも今は戦時中じゃねえから、街の治安は警察系の部隊に任されてる。……平たく言えば、爆乳の耳に入ったらまた俺らの立場が危うくなる訳だ!!』

「俺らって言うなよ今回こっち関係ないからね!!」

『この前のロワイヨーテ方面のアレも合わせて、もうイエローカードは三枚目なんだっつの!!』

「いやイエローカードってそんなストックできたっけ？」
『だからこれ以上抱えたら破裂するっつってんだ!!　とにかくこっちの問題はこっちで片づける！　テメェはひたすら時間を稼ぎやがれ!!』
「……ん？　お前のやる気ってレアだよなあ。それがプラスに働くとは限らないのが問題だけど……」
　すると、長時間の無線通信を不審に思ったのか、淫夢に招待してくれそうなサンタさんがわずかに眉をひそめて、
「……クウェンサー、誰と連絡を取っている？　そもそも、大半はこの場にいるはずだけど」
「えっ？　そ、それは……」
『とにかく爆乳の気を逸らせ!!　俺がそこに居ねえ事を絶対に怪しませるな!!　じゃねえとホントにヤバいんだ。これ、ここで解決しておかねえと巻き込まれるのはオセアニアの民間人だぜ!!』
（……おいおい、あのヘイヴィアがパーティ会場にも来ないで熱心にお仕事しようだなんて、こりゃ前代未聞クラスの大事なんじゃないの？　やだよ。俺今回はオブジェクト出てきてもマジでシカトするからね）
　さて面倒臭い事になってきた。
　そもそもにおいて、フローレイティア＝カピストラーノという人物とまともに戦っても勝ち

目などあるはずがないのだ。

「おいクウェンサー、上官の質問に答えろ。お前さっきから誰と、ゲホッ」

風で舞い上がった砂のせいか、フローレイティアが喉を押さえた。

（チャンス!!）

と見たクウェンサー、近くでトレイを運んでいた民間のウェイターから透明な液体の入ったグラスを受け取ると、

「大丈夫ですかフローレイティアさん。ほらお水です」

「ん。悪いねクウェン……ばぶう!!!?」

一気にグラスの中身をあおったミニスカビキニサンタが、普段絶対に出さない音を口から発した。

理由は単純で、

「クウェ、お前っ!!　これ、ウォッカの、しかも何にも割ってないヤツじゃ……!?」

「すみませんフローレイティアさん!!　グラスを間違えたみたいで！　こっちのは烏龍茶です!!」

「まったくお前は……うげばっ!?　こ、今度はモルトウィスキーか……!!」

「しまったっ!!　フローレイティアさん、もう間違えません！　今度こそミネラルウォーターです!!」

と言ってテキーラをなみなみと注いだコップを手渡すクウェンサー。

（酔え酔え!!　さっさと泥酔してしまえ!!　普段と違うペースで度数の高いドリンクを立て続けにあおらせれば、流石にあの酒豪だって……!!）

「……ひっく」

何杯かの攻防の末、フローレイティアは俯いたまま何も言わなくなってしまった。ビキニの胸元に汗の玉が流れていき、肌もかなり赤みが増している。体の芯がぐにゃぐにゃになっていて、ただ立っているだけで体が左右に揺れている。

ひとまず作戦は成功か!?　とクウェンサーはダメージの感触を摑んだのだが、

（あれ？　この人本気で酔っ払うとどうなるんだろう？）

ふと頭に浮かんだ疑問が、そのまま少年の心を蝕んでいく。

（ヤバくないか？　これすごくヤバくないか!?　シラフでもあれだけの暴君であるフローレイティアさんが、さらに酔っ払ってリミッターが外れちゃったらどこまで行くんだ!?）

「……くーうぇんさぁー……」

低く、伸びるように、呼ばれる名前がただ怖い。

全身から嫌な汗を噴き出すクウェンサーは、思わず直立不動になった。

「は、はい!!　何でありますか上官サマ!!」

しばらくフローレイティアは何も言わなかった。

ゆらり、と。

ただでさえ『近づく』の範囲内にいるはずなのに、フローレイティアはさらに音もなく、クウェンサーとの距離を不安定に近づけてくる。

襟首でも掴まれるかと、本気で思った。

そして。

至近距離で。

改めて、フローレイティア＝カピストラーノは口を開く。

「ぐしゅっ。何でクウェンサーは、そんな風にいじわるばっかりするの？」

??? ??? と、クウェンサーは一瞬本気で思考が止まりかけた。

その役割は鬼上官フローレイティアのものではない。それはいつもぬいぐるみを抱えている気弱系幼馴染みなどの領分のはずだ。

しかし直後に気づく。

「こ、この人……泣き上戸タイプか!?」

「クウェンサー怒ってる？　怒ってるよね？　ダメな指揮官でごめんなさい。なんだかんだでいっつもクウェンサーに助けてもらってごめんなさい。悪いとは思っているの。私がもっとしっかりしていれば、お姫様の性能を十分に発揮して……」

「待って待って!!　これ人前で出ちゃダメなモードでしょ!!　ほら、普通なら面白半分で写メ撮るヤツだって出てくるはずなのに、今は自粛しましょうみたいな感じになってる!!」

「……クウェンサー怒ってる？」

「ぎゃあ!!　しなだれかかってこないでください!!　首に両手を回すな!!　アンタ、今自分がとんでもない格好をしている事を忘れているのか!?」

「……怒ってる……」

「怒ってません!!　怒ってませんって!!　くそう、衆人環視なのでこれ以外の選択肢がない……！　二人きりなら嘘八百でイロイロできそうな感じなのに!!」

「ホントに怒ってなーい？」

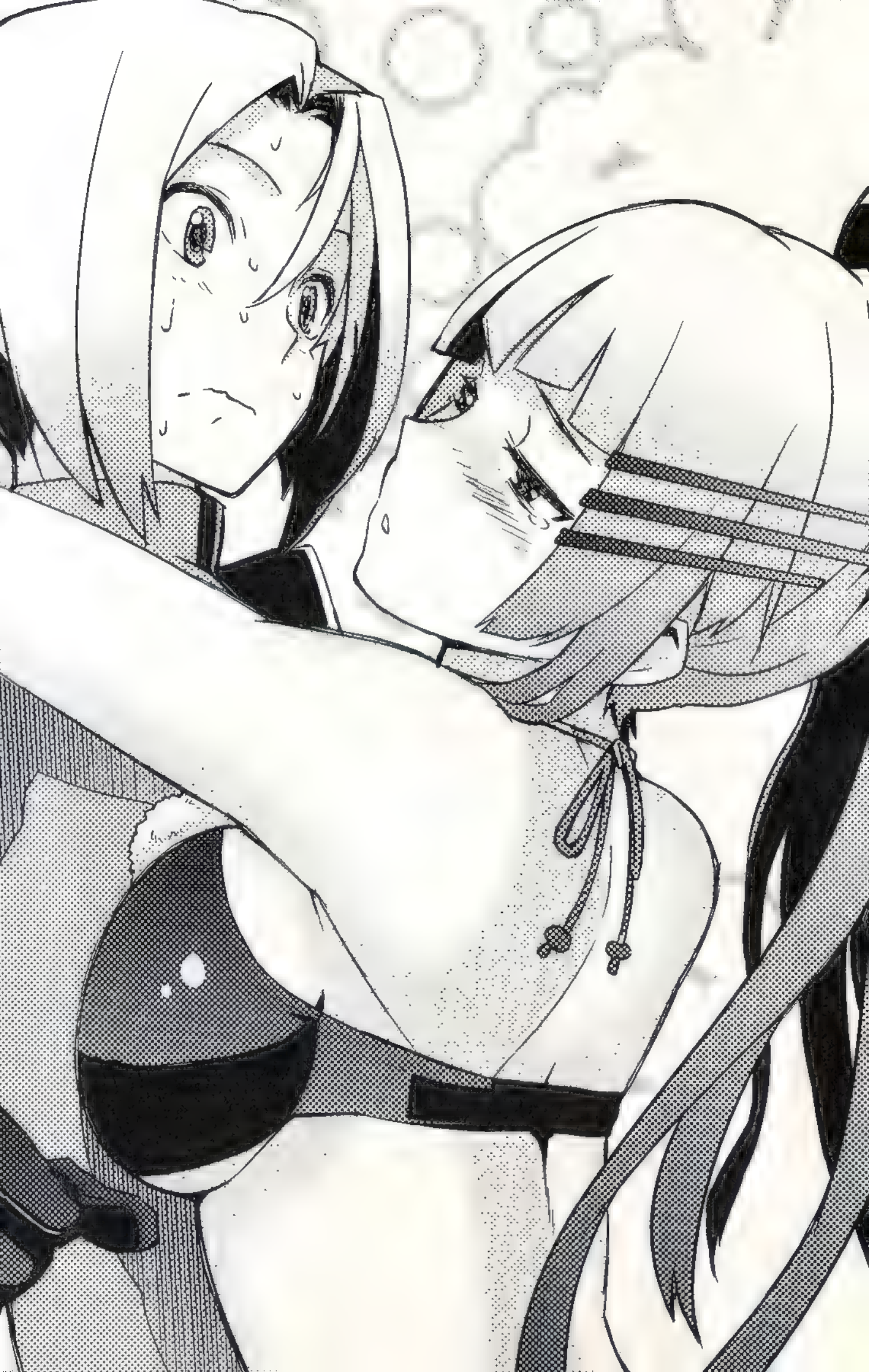
「ません!!　決定！　アンサーです!!」

「……」

ものすごい勢いで爆乳が押し付けられたまま、ちょっと唇をすぼめればキスできてしまいそうな距離にフローレイティアの顔がある訳だが、彼女はそこから黙ってしまい、一切のアクションがない。

とんでもない精神的重圧にさらされるクウェンサーだったが、そこでフローレイティアは頭の中で何かを整理したのか、ふとこんな事を言った。

「……クウェンサー、お前……私のお兄ちゃんみたいな人だな」



「まさかの妹キャラ説浮上!?」

7

一方。

ヘイヴィア＝ウィンチェルは日が暮れた『街並み』を走っていた。

経緯は以下の通り。

工事現場用の簡易信号が切り替わるのを待っていた青い色のタクシーへ、横から窓を突き破るような格好で中年の男が乱入してきた。

「何だよもー何この展開バッカじゃねえの!!」

強盗の可能性を考え、思わず腰のホルスターから大型拳銃を抜いたヘイヴィアだったが、顔から血を流す男はこんな事を言う。

「アンタ、『正統王国』の兵士さんだろ!!」

「あん？」

「通報したい。通報だ！　とんでもない事件が起こるって情報を知ってしまった。早く何とか

してくれ!!」

「待て待て待て。やだよ!!　オセアニアの治安維持は軍隊系じゃなくて警察系の特殊部隊の仕事なんだ。俺の仕事じゃねえ！　何より俺は今から爆乳サンタを拝みに行くんだ!!　そんな泥臭い事やってる場合じゃ……!!」

「狙われているのはアンタら『正統王国』なんだぞ!!」

「まじかよだがやっぱり俺の仕事じゃ……」

「あと私を追ってる連中がそろそろここへやってくる」

「それを先に言え!!」

慌てて中年男をタクシーから引きずり降ろし、雑踏の中へ逃げ込んだところで、複数のサブマシンガンが火を噴いて青い色のタクシーを蜂の巣にしてしまった。運転手は中年男が飛び込んできた時点でさっさと逃げ出していたので心配ないが、何か納得いかないのも事実だった。

走りながら、中年男はこんな事を言う。

「私の事はロイスと呼んでくれ。『情報同盟』系のジャーナリストだ」

「自己紹介とかしたくねえ……!!　深みにはまる事請け合いだぜ!!　しかも初対面の野郎相手にファーストネームだと!?」

「私としては、さっさとバトンタッチして元の生活に戻りたいんだがね」
「俺一人に押しつけやがったら戦争条約無視してでも背中を撃つぞ!!」
追っ手は自動車を使ってロイスを追跡していたらしい。速度は出るが、雑多に人や物が溢れる『街並み』の中では小回りが利かない。向こうもデメリットに気づいて車を降りている頃だろうが、すでに距離は稼いでいる。
ひとまず敵は撒いたと判断した二人は、情報の交換を行う。
「その『情報同盟』のジャーナリスト様が何しに来やがった」
「仕事とプライベートでそれぞれ理由があった」
言いながら、ロイスはネックストラップで首から提げた携帯電話に軽く触れた。
「……娘がここに派遣されてきているんだ。どんな場所か、自分の目で確かめてみたかった」
「あん？　派遣って、まさか軍関係か？」
怪訝な顔をしたヘイヴィアだったが、冷静に考えれば彼自身も『貴族』の家の都合で戦場へ飛び込んだ未成年である。低年齢化が進む現代なら、そう珍しい事でもない。
ロイスが携帯電話を無意識にいじっているのは、待ち受け画面か何かに娘の写真を登録しているからかもしれない。
「まだジュニアハイスクールに上がる前なんだがね、少々『適性』がありすぎた」
自称ジャーナリストはそんな事を言う。

「未だに『正統王国』のプリンセスに憧れるような歳なのに……。高飛車な口調も笑い方もそうした事なんだろうが、周りの大人達が面白がってプロモーションを始めてしまってね。今では舞台の上ではずっとあの調子で高笑いを続けているな。部隊の方ではどうかまでは分からないが」

「そっちが今追われているのと関係あんのか？」

「いいや、本命は仕事の方だ」

「内容は？」

「元々は同じ『情報同盟』軍の活動が適正に行われているかどうか、民間レベルで調査するのが目的だった。って言っても、できるのは無線を傍受するぐらいだけどね」

そこまで聞いたヘイヴィアは、苦い顔になった。

「……で、副産物を拾っちまった訳か？」

「世界的勢力じゃない。反体制ってヤツさ。あれだけ完璧なオブジェクトという火力に対抗するつもりのようだが、興味を持ったのは失敗したな。無線の内容を分析し、彼らの拠点の一つを遠方から観察していたところで気づかれた。後はご覧の通りさ」

「反オブジェクト、ねえ」

うんざりしたように、ヘイヴィアは言った。

世界中には潜在的にそういった思想の人間がいる事を知っていたし、オセアニア軍事国崩壊

の過程で、そうした人間を増大させたのも否定できない。そしてクウェンサーとヘイヴィアの存在……というより、彼らの起こしてきたオブジェクト破壊の功績も、二人の望む望まざるに拘わらず反オブジェクト側へ活力を注いでしまっているのは事実なのだ。

「で、『何でも良いからとにかくどこかのオブジェクトをぶっ壊したい』連中は、俺ら『正統王国』に的を絞ったって訳なのか？」

「傍受した情報が正しければね」

「……どうやって？」

ヘイヴィアは質問した。

「言うのは簡単だが、あのオブジェクトだぜ。整備場にデンと鎮座しているものを攻撃したって、そうそう壊れやしねえ。何しろ、大型の水爆を最大殺傷範囲で直撃させても完全に装甲を貫く事はできねえんだぜ。どんな方法を使えばあの怪物兵器を破壊できるっていうんだ」

「方法ならある」

ロイスは遮るように言った。

「そうでなけりゃ、私だってここまでやらないし……連中も私の命を狙ったりしないだろう」

8

いつもの特殊スーツをまとったお姫様は、パーティ会場からほんの少しだけ離れたところにある、即席のゲームセンターに足を運んでいた。テントでひとまず屋根だけ作って、その下にゲーム用の筐体を並べているだけの店舗である。

本当は、パーティが始まるまでの暇潰しとして、何十分かだけ遊ぶつもりだった。

しかし偶然遊んだゲームがオブジェクトをテーマにした対戦型アクションゲームだった事、各国のオブジェクトの中で何故か『ベイビーマグナム』のパラメータが不当に（と彼女が勝手に判断する程度には）低く設定されていた事、そして向かい合わせの対戦台の向こう側に座った何者かが気に食わなかった事などが加わり、お姫様は台から離れられなくなっていた。

向かい合わせの台が邪魔で、相手の顔は見えない。

それは相手も同じだろう。

ただし、

「おほほ!!　おほほほほほ!!　やはりこの『ガトリング０３３』にかなうてきはいないようですわね!!　元となったモデルのスペック、そして何よりみんしゅうがいだくイメージというのがちがうのですわ!!」

「……『情報同盟』せいのテレビゲームなんだからパラメータがちょうせいされてとうぜんだし……!!　むしろそんなハンデをつけないとリングに上がれないことをはじるべきだとおもうけど!!」

「あらあ。どこのどなたが存じませんが、『正統王国』のどろくさいエリートをおうえんする方はやっぱりどろくさいようですわね！　おほほ!!」

「どこのだれだかしらないけど、『情報同盟』のエリートをほめるようなヤツはやっぱりまともなヤツじゃないようね!!」

互いのゲーム機を防衛ラインとした上で、様々な所に潜伏している『正統王国』と『情報同盟』の防衛部隊の面々は、いつ銃を抜くか分からない状況で、しかし奇妙にシンクロした事を考えていた。

……何でも良いから、さっさと決着つけて仕事から解放してくんないかな、と。

そして『情報同盟』所属のレンディ＝ファロリート中佐はビデオカメラ片手に、テレビゲームに奮闘する自軍のエリートの背中を撮影していた。

銀髪に褐色の肌の女性は、普段の恐るべき策士の顔を完全に捨てて、

「……おおっと、現在の勝率は五〇勝五二敗、そろそろ集中力が切れてきた頃か、んっ、ゲームに飽きて立ち去るみたい、だめっ、可愛らしいお尻をそんなアヒルの赤ちゃんみたいに振って、転ぶ、転ぶ、転んじゃう、わーっ……」

そんなレンディ中佐の部下の女性兵士は、横合いから、万に一つも撮影範囲に入らないよう

に気をつけながら（それをやると世にも悲惨な目に遭う事を彼女は知っていた）、的確に助言を施す。

「あのー……親バカの心境なんでしょうが、いくら指揮官だからって、勝手に撮影していると怒られますよ。エリート様自体が軍にとっては『価値ある情報』なんですから」

何を言っているの操縦士エリートの精神的なケアも我々の任務内容に含まれるわ。人の心は覗けないから普段の何気ない仕草から情報を集めるしかないのよ」

レンディはすらすらと淀みなく言い訳をしつつ、

「……ところで、あなたは何でメイド服なんて着ているの？」

「『資本企業』の傭兵でっす。メンドクサイ事する時はカンバン背負いたくありませんしねー」

金髪に褐色の肌の『傭兵』の女性は、頭に猫耳までつけていた。

だがビデオ撮影に夢中なレンディは、『傭兵』の方など見ない。

撮影対象が遠くに離れ、物陰に隠れてしまったのを確認すると、ようやくビデオの録画を止めた。

「あれ？　どちらに向かわれるんです？」

「メイドや傭兵の出番のない所よ」

レンディ＝ファロリートは唇を尖らせ、しかし『情報同盟』らしく、事前に収集してあったデータを元に行動する。

「……あの子を振り回しっ放しの『正統王国』の連中に、少し腹が立ってきたわ」

9

五ミリ強のサブマシンガンを手にした二人の男達は、『街並み』の一角へとやってきた。逃走したヘイヴィアやロイスを始末するためだ。

基本的に『街並み』はテントやキャンピングカーなどの集合で、銃撃戦の盾に使えるような強度の物品は少ない。

しかし、そんな『街並み』にもいくつかの例外がある。

例えば、ゴミの集積。

『街並み』の外れには鋼鉄でできた採掘用のダンプカーが何台も停められており、周囲一帯のゴミは有料でここへ集められる。後は都市部にある本格的な焼却場へ運んで処理する訳だ。

ダンプカーと言っても採掘用になると、その高さは三階建ての建物に匹敵する。タイヤの直径だけでも人間の身長を越え、運転席に乗るために曲がりくねった階段を上る必要があるほどのサイズだ。そんな物がいくつも並んでいるのだから、鋼でできた風景ができあがってしまっていると言っても過言ではないほどだった。

そんな中に、短い銃声が連続する。

清掃作業員達は逃げ惑うが、男達に気にする様子はない。

「（……キッカー、ネクサ。逃走も考慮すれば五分が限度だ。さっさと仕留めるぞ!!）」

「（……だが相手の得物はライフルだ。射程が違うぞ！）」

「（……俺が撃ちまくって動きを止める。二人はダンプの裏に回ってヤツらをぶち抜け!!）」

と、その時だった。

ダンプの陰から放たれる銃声の質が変化した。今までより高く、安っぽい音になったのだ。

（ライフルから予備の拳銃へ切り替えた？）

判断した直後、彼らは攻勢に転じるため、一気に前へ出る。

「（……弾切れだ！　今なら俺達が一方的にやれ……）」

パン!!　という強く太い銃声と共に、ネクサの頭部が砕け散った。

「な……？」

驚いたキッカーの腹と胸へ立て続けに弾丸が突き刺さり、真後ろへと薙ぎ倒された。

今のは拳銃の銃声ではない。

先ほど弾切れになったはずの、ライフルの大きな銃声だ。

（くそ、俺達の油断を誘うために、ライフルの弾が残っているのに一度わざと拳銃に切り替えたのか!?）

慌てて後退するが、もう遅い

数の優位は失われ、アサルトライフルとサブマシンガンでは射程も威力も違う。
万に一つの逆転も許さぬよう、ヘイヴィア＝ウィンチェルは音もなく迫り来る。

「……テメェの言った通りだぜ」
ヘイヴィアは武装集団の男の荷物を漁って入手した携帯端末を操作しながら、ロイスに向かって呟いた。
「連中が用意してんのは化学燃焼型弾頭だ。ナフサや複数の燃料、後は薬品なんかを混ぜて、『水では消えない炎』を二から五キロ四方に広げていく爆弾だな」
「ようは、大きな火焔瓶だろう。動画共有サイトで見た事がある」
「弾頭は手製のようだが、そいつを積む巡航ミサイルや移動式のランチャーはオセアニア製みてえだな。元々、軍事政権は〇・五世代を除けば戦車や戦闘機なんかを国中に配備してた。そういうアイテムにも事欠かねえだろ」
「……クラフトサラマンダーⅢ……？」
「コンビニのクリームパスタみてえな大味だろう？　ま、兵器のネーミングなんて馬鹿でも分かるレベルに落とすのが定番なんだ。分かりやすく戦意を高揚させるのが狙いだからな」
ヘイヴィアは底意地の悪い笑みを浮かべてそう言った。

「最大射程は一五〇〇キロってトコか。地形回避処理型の誘導方式を採用していたはずだ」

ただ、これでどうやってオブジェクトを破壊する？　という疑問は消えない。

オブジェクトは大型の水爆を最高殺傷範囲内で起爆されても、完全に装甲が破壊される事はない。まして、化学燃焼型弾頭は、本来なら対人用の兵器だ。あのオブジェクトの破壊に繋がるとは思えない。

そんな疑問に、ロイスはこう答える。

「……おそらく、ターゲットはオブジェクトそのものじゃないんだ」

「なに？」

「ようは、オブジェクトが運用できない状況を作ってしまえば良い。それなら分厚い装甲で守られたオブジェクトそのものを襲う必要はない。もっと柔らかい、人間を狙うだけでも目的は達成できる」

「……エリート狙いか？」

可能性としてはゼロではないが、しかしヘイヴィアは懐疑的だった。

外を歩くエリートを狙われるのが危険な事ぐらい、誰だって分かっている。彼女達には特別な護衛部隊が配備されているし、一般的な銃撃、爆発物の他、化学・生物兵器が使用された時のため、内部が完全密閉された装甲車を常に随伴している。

たとえ化学燃焼型弾頭を積んだ巡航ミサイルがエリートの頭上に向かっても、ミサイルの

接近に勘付いた時点で装甲車に乗り込んでしまえば、熱や煙のダメージはほぼ無効化できる。

「違うね」

しかし、ロイスはそう答えた。

「連中の狙いは整備兵さ。別に重要な役職や情報を持っていなくたって良い。化学燃焼型弾頭は、一度に数キロ四方を炎で包むだろ。整備兵が一ヶ所に集まっていれば、大多数の数を奪える。一気に何百人って整備兵が失われてしまえば、オブジェクトは動かせない。……操る人間がいても、指示する人間がいても、その下で動く人間がいなければオブジェクトは運用できないんだからな」

「オブジェクトじゃなくて、その周りの環境を破壊する事で運用を止める、か」

ヘイヴィアは呟いてから、しかし引っ掛かるものを感じた。

（……ロワイヨーテ方面で大型コンピュータを破壊した俺らと同じ発想じゃねえか）

何か嫌なものを感じつつも、ヘイヴィアは話を先に進める。

「確かに、重要なエリートや指揮官ならともかく、一般の整備兵一人一人に護衛をつける訳にはいかねえからな。本当に一気に潰せるなら、狙い目かもしれねえが」

少し考え、ヘイヴィアは話題を変える。

「移動式のランチャーや巡航ミサイルの用意をしてやがんだから、やっぱ空中で爆発させるつもりだろうな」

「そのはずだ。あれは空中で起爆しないと十分な効果を発揮しない。……ミリタリー系サイトの受け売りだがね」

「クラフトサラマンダーⅢか」

ヘイヴィアは呻くように呟き、

「ミサイルの射程と都市部・整備基地の分布から考えれば、やっぱ狙いはうちの整備基地ベースゾーンと、その周りに広がる街並みってのが一番怪しいだろうな。……ハッ、おたくの『情報同盟』が直接狙われる事はないみてえだぜ」

「だったらどうした。私のやる事は変わらない」

「どうしてテメェに『正統王国』の軍事施設を庇う必要がある？」

「理由は仕事とプライベートに双方ある」

ロイスは顔の汗を拭いながら、

「まずは報道人として、オセアニアの人々にこのような危機が迫っているにも拘わらず、指を咥えて見ているなど耐えられない。情報を公開する事で危機が増大する場合なら一時的な統制にも協力するのがマナーだろうが、今回の場合は当てはまらない。今から情報を公開しても避難に役立てられない、というのであれば、私は私が手に入れた情報を、別の方法で活用して危機を回避すべきだと思う」

「プライベートは？」

「娘がオセアニアに派遣されていると言っただろう？　クリーンな戦争を維持する事は、娘の身の安全を保障する担保にも繋がる。こんなテロ活動で勝手に担保を奪われても困る」

なるほど、とヘイヴィアは呟いた。

少なくとも、完全無菌状態の奇麗ごとで取り繕われるよりは信用できそうだ。

「……どうにかして、ランチャーの設置場所の座標を突き止めるぞ」

ヘイヴィアは低い声で言う。

「ポイントが分かれば発射前に強襲する事も、仮に発射されても迎撃の算段がつく」

「何でも良いが、時間はないぞ」

ロイスの方も、確認を取るように言った。

「無線の断片的な情報だと、そろそろヤツらも『攻撃』に移る。私達の追っ手の数が少ないのも、みんな本命の準備に駆り出されているからだろう」

10

ゲームセンターで思わぬ時間の無駄遣いをしてしまったお姫様は、多くのテントが並ぶ夜の『街並み』を歩いていた。『正統王国』のパーティ会場へ向かう途中である。

こうしている今も彼女の周囲には『正統王国』の護衛が複数展開され、耐爆仕様の装甲車ま

で随伴しているのだが、彼女は徒歩での移動を続けていた。
無秩序にテントが乱立し、人々の流れも無茶苦茶なこの『街並み』では、装甲車があっても常に徐行を迫られる。かえって普通に歩いた方が早く進めそうなぐらいなのだ。
お姫様は先ほどのゲームセンターでのやり取りを思い出していた。
結局、あのアーケードゲームの対戦相手の顔は最後まで分からずじまいだったのだが、
（……まったく、どうせ『情報同盟』からやってきたかんこうきゃくか何かだったんだろうけど、エリートをアイドル扱いするれんちゅうのじょうほうとうせいはきもちがわるいせんのうみたいね）
『正統王国』も『正統王国』でエリートを救国の英傑扱いしたり『何百年も前から続く伝説の血筋で～』などと胡散臭い喧伝を行って民衆の支持を煽っているのだからどっちもどっちなのだが、異常な環境というのは、そこに浸っている人間の方こそ違和感に気づきにくいものなのだ。自分の家の匂いみたいなものだろうか。
と、そんな風に考えながら『街並み』を進むお姫様の足が、ふと止まった。
『まだ何かあんのかよ!?』と護衛達は心の中で思ったが、基本的に行動の主導権は護衛対象の方にある。
お姫様はジョークグッズの並ぶ店舗へ目をやっていた。
季節が季節だからか、クリスマス関係のツリーやリース、赤く染まった長靴などが多い。そ

んな中に、サンタクロースの衣装も並べられていた。

（……）

昼間の海水浴では、何故かクウェンサーにガッカリされたばかりのお姫様である。

少年が何を求めていたかは今でもサッパリ不明だが、どうやら休暇中にも仕事着であるのはよろしくないらしい。

ＴＰＯを弁えろ、という事だろうか。

「サンタクロース……。サンタクロースか」

お姫様は呟き、テントでできた店舗スペースへ足を踏み入れる。日に焼けた店主の愛想が異様に良いのは、お姫様の着ている格好がエリートの特殊スーツだから＝つまり国家の代表だから＝どう考えたって金を持っているに決まっているから、という予測をしているからだろう。

その予測は間違っていないが、金銭に興味のないお姫様は自分の口座にいくら入っているか知らなかった。

密かに護衛達は『おっ、うちのお姫様もついに色気づいたか？』とお姫様の行動に興味を示し始めていたのだが、

「サンタクロースのいしょうをワンセット、てきとうにみつくろってもらえる？」

というオーダーに対して出てきたのは、真っ赤なだぶだぶの上着に同色のズボン、白い付けヒゲまでセットになったスタンダード過ぎるサンタクロースだった。

『少しはアレンジなさい!!』と護衛達は心の中で念じたが、この無表情ガールがそう簡単にジャパニーズモエーとか吸収するはずがないのである。

ところが。

テント状の店舗の隅にある、回折を利用した三次元モニターをぼんやりと眺めたお姫様の目の色が変わった。

そこでは、数日前に行われていた『情報同盟』のアイドルエリートのライブ映像が流されていたのだ。

『いえーい!!　ちょっと早くなってしまいますが、今日はみなさんにセクシーミニスカサンタが1やのゆめをプレゼントしてしまいますわー!!　おほほ!!』

どこまでが実像でどこからがVFXなのかも良く分からない映像がきらびやかに変化していく。その映像の中では、金髪縦ロールのGカップが、エリートの特殊スーツを改造したと思しき赤と白のサンタ衣装でふりふりと体を揺すっていた。

しばし。

いつも以上に無表情になったお姫様は、やがて画面を指差して店主に言う。

「あれよりドはでなのをおねがい」

そして南半球トロピカル仕様のミニスカサンタと化したお姫様は、『正統王国』のパーティ会場へとやってきた。

（……ひつぜんせいのあるかっこうとはおもえないけど）

お姫様は自分の衣服へ目をやりながら、

（まぁ、こんなのでクウェンサーがよろこぶなら。でも、こんなのでホントによろこぶものなの？？？）

すでにパーティ自体は始まっているようで、『正統王国』の兵士達は思い思いのグループに分かれて、酒や食事を貪りながら談笑していた。そうした彼らの視線がお姫様に向けられ、そこからさらに凝視される。信じられないようなものを見るようなその目が果たしてプラスの印象なのかマイナスの印象なのか、それすらお姫様には判断がつかない。

（クウェンサーはどこかな？）

あちこちをキョロキョロと見回すお姫様は、やがて会場の一角で目的の人物を見つける。

ただし、

「違うんだよ!!　実際の兄妹？　そんなもん口では私を気遣いながら、結局『家』のやり方には口を挟めないような連中ばっかりなんだって!!　だからクウェンサーだけ!!　クウェンサーが一番お兄ちゃんみたいだなーって言ってるの!!」

ぐでんぐでんになっているフローレイティアと、そんな爆乳上官にガッチリとホールドされているクウェンサーを目撃し、お姫様の動きが固まる。

そこへさらに……。

そしてレンディ＝ファロリートはパーティ会場に襲来した。

多数の『情報同盟』軍の兵士を引き連れてやってきた敵軍の将校を見て、当然ながら『正統王国』のパーティ気分は吹き飛んだ。一触即発の状況ではあるのだが、しかし一方で、彼らはあくまでも協力関係のある『多国籍軍』扱いであり、パーティ会場そのものも『正統王国』の基地の敷地内ではない。

突っぱねるだけの正当な理由はない。

相手もそれが分かっているからこそ、遠慮なくここまで足を踏み入れてきたのだろう。

『情報同盟』の指揮官はやってきた。

『正統王国』の指揮官はどう動く？　と全員の注目がフローレイティアに集まるのだが、

「渡さねえぞー!!　クウェンサーは、私の、私だけのっ、お兄ちゃんなんだーっ!!」

「まずは自分のポジションをおもいだして。しょうどうぶつけいならまにあっています」

と、何やら一人の少年を奪い合っている爆乳ミニスカビキニサンタと無表情ミニスカサンタが。

手がつけられない事になっている『正統王国』の少佐を見て、しばしレンディ＝ファロリートは固まってしまった。

さらにそこへ、

「邪魔邪魔!!」

「やべえなオイ。このキャットファイトは良いギャンブルになりそうだぜ!!」

「……ぶっちゃけあの二人は美人なんだが階級やら役職やら高すぎて手が付けられないからなあ」

これで小遣い稼ぎができると踏んだ一部の『正統王国』兵達があっという間に騒動の中心点へ駆けつけ、取り囲んでしまったため、レンディはそこへ向かう道筋を失ってしまった。

（できるだけ注目を浴びる方法で、多少のリスクを覚悟してでも接触したというのに、こいつら私の事なんかちっとも見てない……!!）

情報の真偽や拡散・収束の手順に価値を見出す『情報同盟』としては、痛恨の展開である。

しかもフローレイティアが（両腕を使って物理的に）絡んでいる相手が、『情報同盟』のエリートが密かに注目している『あの』工兵の少年である事に気づいたところで、レンディの心

の許容量が一気に振り切れた。
「こっ、このスケコマシ!!」
「誰だか良く分からない人にすごい称号を与えられた!!　名刺作る事があったら絶対記入します!!」
　すると、クウェンサーの意識が自分の他に向けられている事には気づいたらしいフローレイティアが、
「誰だてめぇー……クウェンサーは渡さないぞ！　私のお兄ちゃんだ!!」
「いりませんそんなもの!!」
　かろうじて対外用の敬語を維持しつつ、だがレンディは叫ぶ。
「うちのエリートを振り回しまくる輩がいるから、スカウトのふりをして多少そっちの人間関係を揺さぶって遊んでやろうかなと思っていましたが、こんなに危険な人物だったとは……。これは報告させていただきます。今夜はあの子と家族会議だ……っ、げほげほ!!」
　叫びすぎて軽くむせたレンディは適当に飲み物を手に取ろうとしたようだが、近くに民間のウェイターは歩いていない。
　すると、フローレイティアは透明な液体に満たされたグラスを掴み、
「ほれ、水だ。ったく、自分で取りに行けっての……ぶつぶつ……」
「んっ？　そのグラスは……!?」

フローレイティアに抱きつかれている工兵の少年が何かに気づいたようだが、すでにレンディはグラスをあおった後だった。

そして、

「がばっ!?　ごほごほ……!!　こ、これ、水じゃなくてウォッカじゃ……!?」

「何だー!!　お兄ちゃんが入れた水が飲めねーってのかー!?」

「くそ、情報の真偽が善悪に直結する『情報同盟』の将校にこんな真似をするとはよほどの……」

そこで無表情ミニスカサンタがグラスをさらに受け渡す。

「まぁまぁ。くちなおしにもう1ぱい」

「そうですか、そうですね。そちらのあなたなら多少は信用できブベア!!　こ、こ、こっちも、こっちも焼酎……!?　ひっく」

文句がいきなり途切れてしまった。

すごく嫌な予感がする……とクウェンサーが考えたところで、

「大体ですねえ!!」

「うわっ!?」

「アンタあの子についてはどう考えてんですか!?　『情報同盟』とか『正統王国』とかの枠組みに引き裂かれて、あの子ちょう可哀想!!　スーパー悲劇ですよ分かってんですか!?」

ずんずんずん、と大股で接近してくるレンディーファロリートに、フローレイティアが何か

しらの危機感を覚えたらしい。

彼女は今まで以上にぎゅっとクウェンサーを強く抱き寄せると、

「お兄ちゃんは渡さないぞ!!」

「アンタにゃ何にも言ってねーっつーの!!　私はそっちのスケコマシと話をしてんだってのが分からないんですか!?」

「クウェンサーそっち見んな！　私の方だけ見てろ!!」

「どけ酔っ払い!!　私がスケコマシに説教してやる!!」

と、口ではクウェンサーの名が出ているものの、実際には二人の酔っ払いは互いの事しか視界に入れていない。『……、』とお姫様が無表情ながら不気味な威圧感を増している事もお構いなしだ。

嵐に巻き込まれる。

その予感をひしひしと受け取ったクウェンサーは、何とか事態の収拾を図ろうとする。微妙に不機嫌そうではありつつも、密かに危険圏外へと移動しているお姫様はやはり既存のジャパニーズモエーの範疇に収まるキャラクターではないと彼は思うが、今はとにかく目の前の危機をどうにかしなくてはならない。

「ちょ、ちょ、二人とも、一度冷静になりま……」

「やんのかてめぇー!!」

「おうおうやってやろうじゃねーかー!!」

喧嘩の前段階というかほとんど挨拶に近いのか、フローレイティア＝カピストラーノとレンディ＝ファロリートの二人は超至近距離での睨み合いを開始しようとした。

そこで。

『正統王国』と『情報同盟』の兵士達は、怪奇現象を目撃した。

常識では説明のできない現象。

オブジェクトの設計を学ぶために戦場へ来ていた少年の頭部が消失した。

より正確に言えば、

摑みかかる二人の爆乳に挟まれ、完全に埋もれた。

11

状況が状況だけに独断で行動しているヘイヴィア達だが、しかし情報を独占する理由は特にない。

彼らは移動を続けながら、警察系の特殊部隊や、休暇中の『ベイビーマグナム』とは違う『正統王国』系のオブジェクトや機動整備大隊へ、対空レーザーの準備を申請する旨の連絡を

取っていた。ぶっちゃけフローレイティアを介するより色々話はスムーズに進むはずだ。

そして。

その無線通信が、状況に大きな変化をもたらす。

『「スピードキラー」の準備は完了した。対空レーザーはいつでも使える。仮に巡航ミサイルが都市部へ向けて発射されたとしても、九七％以上の精度で迎撃できるだろう』

「待て、待てよ!!」

『衛星からの情報で、移動式ランチャーが第二七機動整備大隊の駐留地点から北西二〇キロの位置に設置されているのも掴めている。始点と終点さえ分かれば飛行ルートも割り出せる。ほぼすり抜けられる事はありえないだろう』

「それよりこの情報は正しいのか!?　連中の巡航ミサイルの標的が、『街並み』に散らばってるうちの整備兵達じゃなくて、南東二〇キロの位置を移動しているお偉方の車両団だっつーのは!?」

『ヤツらは通常の無線の他に、民間衛星を使った携帯電話でもやり取りを行っているらしい。だが、そちらはそちらで専用の傍受機器がある。そこから得た情報だ。間違いはない』

「じゃあ……」

ヘイヴィアは慎重に尋ねる。

「オブジェクトの対空レーザーの第一防衛ラインは、巡航ミサイルの飛距離の半分辺りに設定

されているってのも『間違いない』か？」

「半分って……それじゃあ『街並み』の真上で撃墜される事になるじゃないか!?」

民間人のロイスは叫ぶが、しかし質問をしたヘイヴィアは、そろそろ『狙い』が読めてきた。

『スピードキラー』を配備している指揮官はこう答える。

『ターゲットにされている車両団には、中将殿と准将殿も乗車されている。何としても化学燃焼型弾頭は撃墜しなければならない』

「……、」

『化学燃焼型弾頭は最適の高度で複数の材料を混合させ、それを空気に巻き込ませる形で起爆しなければ有効な爆発は起こせない。仮に対空レーザーで撃ち落としたとしても、半径数キロに及ぶ巨大な爆発が起こる可能性は低い』

「それでも、爆発する可能性もゼロじゃねえ」

『そうだとしても』

指揮官は即座に答える。

『エリートや指揮官の近辺には、生物・化学兵器にも耐えられる密閉型の装甲車が随伴しているはずだ。最低限の要が守られればそれで良い。無論、オブジェクトもその程度では破壊されないだろう。これ以降、君達には混乱防止のため緘口令が適用される。余計な通信は……』

舌打ちし、ヘイヴィアは無線機のスイッチを切った

そんな彼に、ロイスは摑みかかりそうな勢いで叫ぶ。
「どういう事だ!?　あいつらはこの街を丸ごと見殺しにするつもりか。そもそも、密閉型の装甲車で熱や炎に耐えられるというのなら、ターゲットの車両団は直撃しても問題ないんじゃ……!!」
「俺に言うなよ。あいつだってその『お偉方』から突っつかれてんだろ。……それに、どうやらこれが化学燃焼型弾頭を使おうとしている連中の思惑っぽいしな」
「？」
「衛星携帯電話を使ったのは、わざと軍部に傍受させるためだ。予想通りヤツらは食いつき、飛行距離の半分の距離を第一防衛ラインに設定した。……テメェが予想した通り、ちょうどうちの部隊の整備兵達を丸焼きにするゾーンでな」
「まさか……でも、だって……」
「馬鹿正直に巡航ミサイルなんて撃ったって、オブジェクトがウジャウジャいるこのオセアニアじゃ、まずターゲットまで届かねえ。だったら、最初っから落とされる事を前提に計画を組んじまえば良いって訳さ」
「だが、あの憎たらしい指揮官はこう言っていただろう！　対空レーザーで巡航ミサイルを落とした場合、本来起こるであろう大爆発が発生する確率は低くなるって」
「落とされる事が前提なら、そっちについても対策を練ってるはずだぜ」

ヘイヴィアは射殺した武装集団の端末を軽く振り、
「弾頭の図面だが、よくよく見てみりゃこいつもおかしい。複数の薬品は各々がパッケージされていて、普通にターゲットへ到達したって、このままじゃ不発に終わっちまうんだ」
「……まさか、撃ち落とされる事で、初めて空中で薬品が混ざり合うように……？」
「そういう設計なら、『撃ち落とされて正解』だ。高圧で保存してんのも、破裂時に拡散させるためだろ。あのままオブジェクトの対空レーザーに任せていたら、この街は炎の海に呑み込まれちまうぜ!!」
敵の移動式ランチャーの位置は分かっている。
ヘイヴィアは路上に鍵を掛けたまま停車してあった『正統王国』軍のオフロードカーを勝手に拝借する。
ロイスは叫んだ。
「どうするつもりだ!?」
「決まってんだろ。ここまで来たら俺らだけでやるしかねえ!! ロイス、協力する気があるならそっちのドラム缶を積み込め。そのガソリンだ!!」
ひとまずヘイヴィアの指示に従いながら、しかしロイスの頭には疑問があった。
彼がオフロードカーの助手席に乗り込むと、『街並み』の外へ向けて一気に加速する。
「止めなければならないのは承知しているが、本気で今から移動式ランチャーを破壊できると

思うか!?　追っ手の三人だけでも手こずった。敵の主力はランチャーに集中しているはずだぞ!!」

「黙ってろ！　時間がねえんだろ!!」

砂煙を上げて、オフロードカーは『街並み』から乾いた荒野へと飛び出していく。

移動式ランチャーまでは、ここからまだ二〇キロもある。

ただでさえランチャーの周囲は武装集団が火器を集中させているはずだ。その上、彼らの方には待つ理由はない。一刻も早く巡航ミサイルを発射しようとするのが当然だ。

「くそ、光が……!!」

ロイスが叫んだ。

地平線の向こうが眩く輝き、さらに信号弾のような光点が夜空に打ち上げられた。だが距離のスケールが違う。信号弾どころの光量ではない。

「発射されたぞ!!　化学燃焼型弾頭を積んだ巡航ミサイルだ!!」

「チッ、間に合うか!!」

ヘイヴィアは急ブレーキを掛け、タイヤをスリップさせてS字のように蛇行しながら、何とかオフロードカーを停める。

そのまま彼は砂地へ飛び降りる。

「武装集団を攻撃してランチャーを破壊するんじゃなかったのか!?」

「ハナからそれで間に合うなんて思っちゃいねえよ!!」

ヘイヴィアの叫びに、ロイスはギョッとした。

こいつ、まさか爆発前に自分だけ逃げて助かろうとしているんじゃないだろうな……そんな事まで考えたロイスだったが、そこでヘイヴィアはオフロードカーの後部へと向かった。

「ようは飛んでるミサイルの狙いを妨害しちまえば、『街並み』やうちの整備兵達に犠牲が出る事はなくなる！　見当違いの方向へ飛んじまえば、対空レーザーを考慮した連中の計画は台無しになるはずなんだからな!!」

「ジャミングでも仕掛けるつもりか……？」

「クラフトサラマンダーⅢの誘導方式は地形凹凸処理型だ。文字通り、地形の凹凸を計測して、自分が正しい方向へ進んでいるかを判断して微修正を行う。発射地点から到達地点までの間の『資料』が二から五枚もあれば、かなり正確に狙いを定められるはずだぜ」

「その『資料』というのは、衛星写真の事か？」

「基本スペックではな。だが普通の航空写真でも構わねえはずだ。その場合、リアルタイムで『資料』を用意する事はできねえから、発射前にリサーチするしかねえし、発射するまでランチャーの位置を移動させる事もできねえ」

当然、とヘイヴィアは付け加え、

「判断基準となる『資料』の航空写真さえインプットしていれば、発射後にデータのやり取り

を行う必要はねえ。常に衛星と情報をやり取りするGPSと違って、ジャミングの影響を受ける心配はねえんだ」

「だったらどうする!?　超音速で飛ぶ巡航ミサイルにどうやって立ち向かう!?　まさか、ライフルを空に向けて撃ち落とすなんて言うんじゃないだろうな!!」

「それよりゃド派手に決めてやるさ」

ヘイヴィアが両手で摑んだのは、オフロードカーに積んでいた、ガソリンで満杯になったドラム缶だ。

栓を開けると、一抱えもある金属製の容器を倒し、荒野にガソリンをばら撒いていく。

「風向きに気をつけろ。気化したガソリンは風に乗るからな」

「……それでどうするつもりだ？　もう巡航ミサイルは飛んで来ているぞ!!　あと何十秒かで真上を通り過ぎてしまう!!」

「さっきも言ったように、クラフトサラマンダーⅢは地形凹凸処理型の誘導方式を使ってる。チップの中に入ってる『資料』用のデータと、実際の地形の凹凸とを定期的に見比べて、標的までの飛行コースを微修正していく訳だ」

ヘイヴィアはドラム缶の中身を全て吐き出すと、空になった容器を適当に放り捨て、

「だったら二つのデータを『見比べられないように』しちまえば良い」

言って、彼はオフロードカーの運転席から、シガーライターを引き抜いた。

赤く熱せられた平面へわずかに視線をやると、
「例えば、こうするとかな!!」
ヘイヴィアがシガーライターを放り投げた直後、荒野一面に巨大な爆発が巻き起こった。
それは一瞬で莫大な光と熱、そして衝撃波を生み出した。
直後に後を追うような形で、黒々とした煙が夜空へ立ち昇っていく。爆発した範囲に比例する形で、その黒煙は一面を埋め尽くしていく。
二人の頭上を、凄まじい勢いで白い光点が突き抜けていった。
「……何だ、あっちは『街並み』じゃないぞ」
「閃光と煙で地形凹凸を走査する事ができなかったのさ」
ヘイヴィアはオレンジ色の光から目を守るように片手を顔にかざしながら、そんな事を言う。
「方角の微修正ができなければ怖くはねえ。……後は『スピードキラー』に任せようぜ。無人の砂漠で化学燃焼型弾頭が対空レーザーに落とされる分には、何の問題もねえんだからな」
その場に尻餅をつき、額の汗を拭いながら、彼は言う。
「……俺だって、あの怪物兵器さえなけりゃあ、できる男なんだっての」

12

こうして、オセアニアの民衆や機動整備大隊の面々を救ったヘイヴィア＝ウィンチェル上等兵は、ようやくクリスマスパーティの会場へとやってきた。

「ついた……やっと俺はユートピアに辿り着いたんだ!!　さんきゅー俺!!　ヘイヴィア様超強すぎ!!　さあ食うぜ飲むぜ爆乳サンタを拝むぜあわよくば今夜は無礼講的ハプニングで思い出イロイロ作っちゃうぜー!!」

だが。

たくさんの料理が並べられているはずの大きなテーブルには、空っぽになった大皿しかない。わずかに赤いソースのついたその皿も、ウェイター達の手で片づけられている最中だった。

食べ物も飲み物もない。

それが示す事実をヘイヴィアは認めたくなくて、思わず首を横に振った。

「……まさか、もう、終わっ……いやいやまだだ!!　まだ大事なのが残ってる！　サンタさんは良い子が眠ってからが本番!!　あるはずだ。あれだけの危機を乗り越えてきたんだ。必ずご褒美的な何かがあるはずだッッッ!!」

目を皿のようにしてパーティ会場を走査するヘイヴィアだったが、やはりそこにはすでに終わったパーティの後片づけをしているウェイターしかいない。ここで大はしゃぎしていたであ

ろう兵士達は一人も残さず退散していたし、爆乳サンタなんて夢のまた夢だし、そもそもウェイトレスさんすら存在しない。

一瞬、ヘイヴィアの表情が無になった。

そして直後に、血の涙でも流しそうに顔を歪めてこう叫ぶ。

「……砂漠だ……!!　ここには枯れ果てた砂漠しかねえ……!!」

その時だった。

ヘイヴィアに負けず劣らずふらふらした足取りで、クウェンサー＝バーボタージュがこちらへ歩いてくるのが見えた。その相棒の顔を見て、だがヘイヴィアは警戒する。

「まさか、テメェもテメェで何かしらの修羅場を潜り抜けて……？　いいや!!　今回の主役はヘイヴィア様だもんね！　一番疲れたのは俺！　だから一番ご褒美をもらうべきも俺!!　いくらテメェでも譲らねえぞコラァ!!」

だがクウェンサーの方はそれどころではないらしい。

ヘイヴィアの傍まで辿り着く事ができず、砂を固めたような硬い地面に崩れ落ちるクウェンサー。怪訝に思ったヘイヴィアが近づいてみると、クウェンサーは口をパクパクさせながらこう言った。

「お」

「何だよクウェンサー？　お？　お、がどうしたってんだ!?」

「……おっぱい、村……」

ガクウ!!　と全身から力を失い真っ白になっていくクウェンサーに、ヘイヴィアは嘆きの声を発する。

「何だそのダイイングメッセージ!?　意味深過ぎる!!　どういう事だ、おい、クウェンサー、クウェンサーァァあああああああああああああああ!!」

第三章　真っ赤に染まる海の宝〉〉ソロモン方面防衛戦

1

『信心組織』所属、ロイベルツ＝オールドニック枢機卿。

「……こいつか、例の問題発言バカは」

フローレイティアは二日酔いで痛む頭を気にしながら、ノートパソコンの画面に表示された人物の写真を眺めて呟く。

誰もいない上官室で独り言を呟いているのではなく、ノートパソコンは音声チャットのアプリケーションも立ち上げられていた。

話し相手は軍関係ではなく、『本国』で外交関係を取り扱っている政治屋の側近……『という事になっている』。つまり、そちらが介入してくる程度には、今回の問題はややこしくなっているという事を意味している。

音声チャットの相手は、老いた声で言う。

『元々、ありとあらゆる宗教を肯定する「信心組織」で、一番割を食うのはあの十字教系勢力だ。何しろ、「古い時代の宗教の復古」をされてしまえば、その分だけ実効支配してきた土地や人口が割かれていく訳だからな。弱体化を懸念する声も自然と上がる』

それは『自分達の力が奪われる』のではなく、『元あった体制に戻る』というのが正しいのだが、二〇〇〇年以上の時間を経た彼らにもはやその概念はないだろう。

フローレイティアは細長い煙管を咥え、

「……それで、『弱体化』に怯える枢機卿サマの一人が軍を率いて暴走。ギリシア系勢力との内戦を起こした上、返り討ちでこてんぱんにやられた訳だ」

『言葉にすれば簡単だが、実際にそれで五〇〇〇人以上が死亡している。クリーンな戦争の範疇から外れた戦いだったからな。挙げ句、ヤツの「失言」に踊らされる形で、勢い込んで戦場へ突撃してしまった「安全国」の一般人も多かった』

「対するオールドニックの声明は『私は私の言葉を放っただけだ。それをどう受け取るかは自己責任である』か。ふざけやがって」

権威を持つ者の言葉には相応の拡大性と責任が生じる。

それが分からない馬鹿が戦時下で不用意な発言を連発すれば、何が起こるかは明白である。

オールドニックはその場のインスピレーションに直結した失言の連発で軍・民をさんざん振り回して大量の死者を出した上、その事を追及されるたびに言い逃れようと新しい失言を乱発

する、いわば雪だるま式に音量を増幅させていく有害スピーカーなのだった。

権限さえなければ野球のテレビ中継を観て選手にダメ出ししているおっさんと同じなのだが、国家を動かすほどの力があるとなると話が変わってくる。

『十字教系勢力は、今回の件は全てロイベルツ＝オールドニック枢機卿の独断と暴走だ……』

「という事にして」、これ以上「信心組織」の「中央」から追及されるのを回避する狙いのようだ。すでに十字教系勢力から除名され、「中央」が提案したヴァルキリエの派兵も認めている』

「で、窮地に立たされた老人がさらに世迷言を叫び始めた」

『とにかくヴァルキリエの刺客をかわしたいんだろうな。ロワイヨーテ方面から、ずっとそんな調子だ』

「それにしても……『正統王国』の王と騎士の儀式には十字教系様式が利用されているはずだから、『正統王国』はことごとく十字教系勢力の味方である……なんて寝言、聞く耳を持つヤツなんているの？」

『そのまま受け取る馬鹿がいるなら速やかに病院へ運ぶべきだろうが、状況を利用したい連中が多いのも確かだ。小競り合いのきっかけを作って、オブジェクト同士をぶつけ合いたいと思っている連中だな』

当然ながら、いくらクリーンな戦争と言っても、オブジェクトとオブジェクトの戦いにはやっぱり金がかかる。

収入と支出のバランスが取れてこその戦争だ。それができないようであれば、クリーンな状況は崩れかねない。

老いた声は言う。

『我々としても、メリットなしに枢機卿の世迷言に振り回されるのは望んでいない。「信心組織」とぶつかるのは避けられないにしても、それはもっと有意義な目的のために行われるべきだろうからな』

「では」

『はた迷惑な騒音発生装置を速やかに黙らせてくれ。期限は二日。ＤＮＡで身元さえ鑑定できる状態なら、どれだけ破損していても構わん』

2

「結局、この前のクリスマス休暇も、『上』の連中の作戦通りだった訳だ」

『ベイビーマグナム』の整備場で、クウェンサーとヘイヴィアはそんな事を言い合っている。

彼らの話を聞いているのは、相変わらず表情の乏しいお姫様である。

「問題のオールドニック枢機卿ってヤツは、ロワイヨーテ方面のハイエナと接触していた。俺らが吹っ飛ばした連中の隠れ家からいくつかデータが出てきているから、これはハッキリして

いる」

「でも何でまた？　枢機卿サマって潔癖症なイメージなんだけど。再興中のオセアニアに横槍入れて強盗を働くような連中と接触したがるかね」

「狙いまでは分かっちゃいねえ。そもそも、お騒がせなオールドニックが最終的にどういう決着を目指して逃げ続けているのかも摑めねえんだから。……命が惜しくて逃げ回っているだけって線もありえる訳だし」

ヘイヴィアは適当な調子で、

「ただ、ひょっとすると『信心組織』のヴァルキリエとぶつけるつもりだったのかもしれねえな。あの死神どもも相当おっかねえが、それでもオブジェクトと違って生身の戦力だ。ヴァルキリエをかわすためにハイエナを利用しようとする可能性はゼロじゃねえだろ」

実際にはヴァルキリエとハイエナが激突する前にクウェンサー達『正統王国』がハイエナの排除に当たってしまった。

そこでオールドニックが消し炭にならなかったところを見ると、どうやら件の枢機卿は襲撃前に予兆を察知して逃走していたようだった。

「……ロワイヨーテ方面じゃヴァルキリエがうろついていたけど、結局取り逃がしたって事なのか」

「そういう事になるだろうな　おそらく島を離れたオールドニックは、再興中で混沌としたオ

セアニアへと逃げようとしたはずだぜ。多国籍軍の入り乱れるオセアニアは、他の地域と違って『一つの組織』の動きにくい場所だ。……そこで一度足跡を消してから、改めてお好きな所へ逃げようとしたんだろうさ」

大型機材の側面に背中を預けて、クウェンサーは言う。

「でも、その前に俺達の部隊がオセアニア北東端……つまり、オールドニックの上陸予定地点に居座ってしまった。これじゃ足跡を消すどころか、上陸前に真正面から吹き飛ばされてしまう。オールドニックが直前まで接触していたハイエナは残らず潰されたんだから、向こうも相当警戒しているはずだ。慌てたターゲットは、上層部の思惑通り、海上を北上するしかなくなったって事か」

そのロイベルツ＝オールドニックは、現在、民間のチャーター船を使ってオセアニアやロワイヨーテのさらに北、ソロモン方面の海へ向かっている。

「……飛行機を使わないのはおそらく対空レーザーを恐れたんだろうが、どっちにしたって辿る道は同じだ。オブジェクトは海上を時速五〇〇キロ以上で突き進む　チャーター船が高速の水中翼船だろうが、まず逃げ切れない」

そこでお姫様が口を挟んだ。

「ところでクウェンサー」

「何だよ」

お姫様は整備場の一角を指差して、表情を変えずに質問した。
「……何でヘイヴィアははなしながらかべーめんにのろいのことばをびっしりかいてるの？」
「いや、それは俺にも良く……」
「分からんとは言わせんぞ!!」
ヘイヴィアはクウェンサーを睨みつけ、摑みかかるような勢いで叫んだ。
「話は聞いているんだ!!　テメェ、俺がオセアニアや部隊を危機から救うために悪戦苦闘している間に何してやがった!?　また一人だけ羨ましい目に遭いやがって!!　何だよ爆乳ミニスカビキニサンタってよーもー!!」
しかしクウェンサーは当日の事を思い出して、わずかに遠い目になった。
「……あれはあれで、一つの地獄であった」
「パンがなければお菓子を食べる人かテメェは!!　曲者じゃー!!　であえであえー!!」
ヘイヴィアは一通り叫んだが、やがて根本的な虚しさを払拭できない事に気づいたのか、テンションを三倍ぐらい落とす。
ちなみにお姫様も何故か微妙にイラッとしているのだが、そんな事に気づく馬鹿一人ではない。
「……正直さ、今回の俺はヒーローだって思ったんだぜ？　完璧に輝いているって思ったんだ。ほら、ロワイヨーテ方面で大型コンピュータをぶっ壊してオブジェクトの運用にダメージを与

えたのと似たような手口だったじゃん、整備兵狙いの巡航ミサイルって。だから絶対『資本企業』の『ディープオプティカル』の連中が裏で噛んでて、壮大な物語の一ページが開いた気がしてたんだ!!　ただ冷静に考えたらおかしかった！　何故なら美少女が一人も出て来ねえ!!　ロイスとか中年のオヤジだぜ！　オイこの配役ミスを君はどう思う!?」

その時、無線機が電子音を発した。

クウェンサーやヘイヴィアのものではない。

お姫様がスクランブル用に使っている、相当小さく高価なものだ。

「何？」

『状況が変わった。ソロモン方面海域を北上するはた迷惑なオールドニックへ追撃する予定だったが、そのルートを妨害する形で「資本企業」のオブジェクトが現れた』

クウェンサーとヘイヴィアは顔を見合わせた。

『「クライアントセキュリティ社」の第二世代、「ディープオプティカル」よ。……近い内にやり合うとは思っていたが、このタイミングは妙ね。下手すると、ロイベルツ＝オールドニックとの間にパイプが築かれている可能性がある』

「へんこうてんは？」

『ターゲットのオールドニックを追ってもらう予定だったけど、それを変更してお姫様には「ディープオプティカル」と真っ向からやり合ってもらう。オールドニックは別動隊に噛ませ

る予定だけど……その辺はこの後の作戦前会議ブリーフィングで話す』

クウェンサーは疑問に思ったので、ついでに質問しておく事にした。

「やっぱり、フローレイティアさんも『ディープオプティカル』は単なる私怨以外の目的があって俺達を妨害しているんだと思います？」

すると、無線機の向こうからガタタン!!　と奇妙な音が聞こえた。

座ったまま後ろへ下がろうとして失敗し、ひっくり返ったような物音だった。

『……くっ、くうぇんさー……いたの？』

「あのフローレイティアさん？　一体どうし」

『いや良い!!　言うな!!』

何故かフローレイティアは先手を封じるように叫んだ。

『昨日の事は忘れろ!!　正直、私の方は完全に記憶が飛んでいて何を言ったかサッパリ分からないんだが、周囲の反応から察するに相当ひどい事になっていたのは推測できる!!　だから何も言うな一言も!!』

嬉し恥ずかし赤面トーク。それを聞いたヘイヴィアがついに我慢の限界量を突破し、クウェンサーにグーで殴りかかった。

3

クウェンサーは作戦前会議ブリーフィングが始まるまでの短い時間で、科学雑誌を流し読みしていた。

整備兵の婆さんは面倒臭そうな調子で、

「そんなもん読んでる暇があるなら、本物のオブジェクトから学んだらどうじゃ」

「最近ちょっと浮気性でして」

「？」

怪訝な顔をする婆さんに、クウェンサーは科学雑誌のページをひらひらと見せる。

「『資本企業』の液化プリズム技術ですって。『正統王国』じゃまだ兵器としては実用化できていないんですよね、これ。開発できればレーザービーム系の出力が大幅に向上するって話でしたけど」

「研究自体は『正統王国』でも進められておるよ。レーザー式軌道エレベーターなんかでは普通に組み込まれておる。複数の発振器から放たれたレーザーを一方向にまとめるためにな」

「へ？　技術自体はあるんですか？」

「オブジェクトのような高速戦闘が必要ではない分野ではな」

婆さんは適当な調子で、

「液化プリズムというのは、透明な容器の中に特殊な溶液を詰めたもんじゃ。容器の内側には

電極がびっしり取り付けられていて、界面電気化学的にコントロールする事で溶液の濃度を人為的に歪ませる。その濃淡の違いで光を屈折させる訳じゃな」

「はぁ。それと高速戦闘がどう関係しているんですか？」

「急旋回で高いGが発生すると、液化プリズムの溶液がかき回されてしまう。せっかく人工的に容器内の濃度を片寄らせていても、これでは再び均一化されてしまうという訳じゃ。だから高速戦闘をしたり、砲撃の衝撃で容器が揺さぶられるようなオブジェクトには搭載しづらい面がある」

他にもレーザー光通過時の高温で溶液が攪拌される問題もあるし、と婆さんは簡単に言った。

「『資本企業』のテクノロジーの肝は液化プリズム技術そのものではなく、液化プリズムに外的干渉を与えない衝撃対応技術や、高温対策の方じゃな」

例えばレーザー振動検知とか急速冷却とかカートリッジ系とか、と婆さんは呟き、

「……とはいえ、液化プリズム搭載型のオブジェクトは、それらの技術を存分に使っても、戦闘のパターンはかなり限られる。うちのお姫様のような高速戦闘は避けるじゃろう。つまり、使いどころは限られる。少なくとも、この部隊には不要な技術じゃな」

「……なかなか綺麗にまとまらないものなんですねえ」

「何のリスクもなければとっくに世界中に広まっておるさ。というか、科学雑誌に載っている事なんて『全面公開しても問題ないレベルの情報』に過ぎんじゃろう。そこを調べるぐらいな

ら、整備場を見学した方がまだ有意義だと思うが？」
「近道を探すのが性分なもので」
やれやれ、と言いながらもクウェンサーは腰を上げる。
結局、今日も地道に勉強するしかなさそうだ。

4

作戦前会議ブリーフィングが始まった。
プロジェクターでソロモン方面の海図を表示させ、いくつかの矢印を追加させながら、フローレイティアは言葉を発する。
「今回の一番のターゲットは、ソロモン方面海域を北上中のロイベルツ＝オールドニックの撃破となる。作戦中の全ての行動は、この目的のために集約される事を忘れるな」
と、オセアニア北東端とオールドニックの船の間のラインに、巨大な影が割り込んだ。
「その上で、最も厄介（やっかい）なのは我々の行動を阻（はば）む形で展開される、『資本企業』軍の『ディープオプティカル』よ。これをどうにかしない限り、我々は逃げるオールドニックにとどめを刺す事はできない。よって、主力である『ベイビーマグナム』は『ディープオプティカル』にぶつけるしかないの」

ヘイヴィアが質問した。

「俺らはお姫様が『ディープオプティカル』を海の藻屑にするまで待機ですか？　それとも、引きつけさせておいて、その間に俺らは大きく迂回してオールドニックを追い駆ける、とか？」

「そうしたい所だが、時間がない」

フローレイティアはさらに、オールドニックの船の西側へ、印を一つ追加する。

「所属不明の潜水艦が浮上しているの。『ディープオプティカル』の部隊のものか、あるいはオールドニック勢力の残党が残っていたか、それは分からないけど……オールドニックの船がこの潜水艦に合流すると、面倒臭い事になりかねない」

「その前に潰せ。……でも、どうやって？」

クウェンサーが呟くと、フローレイティアはわずかに肩を強張らせたが、自制心が上回ったようだ。

「先ほども言った通り、お姫様と『ディープオプティカル』には戦ってもらう」

フローレイティアは最短ルートの矢印に沿う形で、もう一本の矢印を追加し、

「……ただ、海は決して平面じゃないの。別動隊を編成し、海中深くを潜行する形で、最短ルートを直進してもらう。現状、これ以外にオールドニックを捕らえる術はないでしょうね」

また……と呟き、フローレイティアはオールドニックからさらに北に位置する海域へ大きな丸を描き、

「作戦区域のすぐ北は、我々『正統王国』が出資している海洋貴金属採掘プラントが広がっている。平たく言えば、きめ細かいフィルターを使って、海水に溶けている金属をこし取って凝縮させるための施設ね。『上』は今回の戦闘で貴重なタングステン鉱床が失われるのを懸念している。各自、その事も頭に叩き込んでおくように」

5

海戦用フロートに換装した『ベイビーマグナム』は、オセアニア方面北東端から珊瑚海を北上した。

オールドニックの逃げたソロモン方面への道を阻むように待ち構えるのは、『資本企業』の『ディープオプティカル』。

正真正銘の戦争、命と命の奪い合い……しかし過去の多くの戦争がそうであったように、オブジェクトを操る彼女達は、互いに一言も言葉を交わさない。そもそも、敵機の中にいるのが彼なのか彼女なのかさえ知りもしない。

ある意味においてクリーンで、ある意味において空虚な戦い。

およそ一〇キロの距離を開けて両者は対峙する。

『「ディープオプティカル」に対しては諜報部が非公式の偵察活動を行っていたが、情報が十

分に集まっていないの。深追いはするな。常に回避優先よ』

「りょうかい」

と、お姫様が呟いた直後だった。

『ディープオプティカル』が動く。

一〇キロ圏。

オブジェクト同士の戦闘としてはギリギリの距離から、純白の凄まじいレーザービーム砲が放たれる。

「……っ!?」

かろうじて、照準用のレンズなどの微細な動きから、発射前動作を読み取って回避行動に移るお姫様。

閃光の直後に、爆音が炸裂した。

レーザービームが空気中の塵や水分を焼き尽くし、そこで生まれた莫大な熱が空気を爆発的に膨張させているのだ。

『ディープオプティカル』は球体状本体の真下に八本の脚を広げた、特殊な形のオブジェクトだった。その八本全てがエアクッション機関として機能しており、波間であっても正確な水平を保っている。

主砲については、『ディープオプティカル』の右手側上部に巨大なレーザービーム砲が取り

付けられていた。しかも、球体状本体には八本もの太い円筒が主砲の台座を中心に時計の文字盤のように設置されている。おそらくその八本で生み出したエネルギーを集約する機能でもあるのだろう。

作戦前会議ブリーフィングで見た映像によると、後部には何やら巨大なパーツが二つもついているが、あれは冷却装置か何かだろうか。

他には、ミステリーサークルのように球体前面へ不自然に配置された無数のレンズ群が、不気味な印象を与えてくる。

『怯むな。相手の主砲はレーザービームよ！　距離による威力の減衰はあっても速度に変化はない。近づかなければ不利になるのはこっち!!』

「分かってる……!!」

第一射を何とか回避し、お姫様はそのままねじ込むように『ベイビーマグナム』を前へ進ませる。

同時に主砲アームを動かした。

『ベイビーマグナム』は状況に合わせて主砲の発射方式を変えられる。リボルバーのように砲身後部を回転させたお姫様は、やはり『ディープオプティカル』同様にレーザービームを選択した。

迷わず発射する。

『ディープオプティカル』も即座に反応した
だが回避速度は遅い。『ベイビーマグナム』の半分ほどしかない。あれでは避ける事はできないはずだが、
『何だ……!?』
「……、」
衆人環視の中、お姫様の放ったレーザービームの軌道がいきなり歪んだ。それは『ディープオプティカル』ではなく、何もない大空へ向かっていく。
「……レーザーの生み出したねつが、空気中のくっせつりつをかえているんだ……!!」
『まずいな。向こうはそれもスパコンで計算しているのか……?』
砲身後部を回転させ、次に選択したのはコイルガン。
こちらは金属製の砲弾を直接発射するので、空気中の熱の状況などの影響は少ない。
七門の主砲を同時に発射。
やはり『ディープオプティカル』の回避速度は遅く、それだけでは半身を抉り取られるような軌道でしかない。
しかし。
ズバヂィ!!!!　という真っ白な閃光が炸裂した。
「また!?　ほうだんが『ディープオプティカル』のちょくぜんで曲がった!?」

【ディープオプティカル】
DEEP OPTICAL

全長… 100メートル（主砲最大展開時）

最高速度… 時速250キロ

装甲… 2センチ×33層（溶接など不純物含む）＋
レーザー振動検知式相殺装置

用途… 対オブジェクト用駆逐兵器

分類… 海上戦闘特化型（第二世代）

運用者… 資本企業「クライアントセキュリティ社」

仕様… エアクッション＋レーザー式推進システム

主砲… 主砲八本の収束レーザービーム

副砲… レーザービーム、レーザーバリー、ブラインド兵器など

コードネーム… ディープオプティカル（様々な光学技術の塊である事から）

メインカラーリング… アッシュブルー

DEEP OPTICAL

『主砲以外の小さなレーザービーム砲を集中させたか。砲弾の側面に傷をつける事で空気抵抗に悪影響を及ぼし、砲弾の軌道を曲げたのよ!!』

差し詰め、レーザーパリーといったところか。

光の速さで進む兵器を数十も集めたからこそできる芸当だろう。

さらに続けて何度もコイルガンを放つが、やはりレーザーパリーの精度は高い。一～二キロ圏内という距離的にギリギリの制約はあるが、金属製の砲弾ではダメージを与えるのは難しいようだ。

向こうからも凄まじいレーザービーム砲が飛んでくる。

超ド級の砲撃戦を繰り広げながら、お姫様は冷静な分析を続けていく。

その時だった。

レーザーパリーによって弾かれたコイルガンの巨大な砲弾が、『ディープオプティカル』のすぐ近くの海へと落ちた。

(はじかれる方向まではせいかくにコントロールできていない……?)

爆風のような飛沫と共に『ディープオプティカル』がひっくり返りそうになるが、そこで異変が生じる。

まるで起き上がりこぼしのように、本来の重心とは明らかに違う不自然な挙動でバランスを取り戻したのだ。

『浮かび上がった方の球体状本体側面から、高出力のレーザーが確認された。空気を爆発的に膨張させて、その勢いで強引に傾く機体を抑えつけている仕組みね。多分七～八〇度ほど傾けたって平気で起き上がるはずよ』

こうして見ると、『ディープオプティカル』は安定性を重視した機体のように思える。一ヶ所に留まって、正確かつ強力なレーザービーム砲を発射する。速度を犠牲にしてでも主砲が誤作動を起こす確率を引き下げ、『機体の動き』よりも『レーザーの速さ』で戦場に速度的優位を持ち込むように設計されているものと推測される。

（……クウェンサー辺りが見たら、またこうふんしそうだけど）

「となると、『ディープオプティカル』そのもののしゅんぱつりょくはそれほどでもない」

『最高速度は出るはずだが、滑らかな加速しかできないのかもしれないな。レーザー関係はデリケートだ。自分の動きや発生するGで機材を破壊しないように気を配っている可能性もある』

つまり、

「近づいてれんぞくで叩き込んでやればおしきれる!!」

叫び、一気に『ベイビーマグナム』を前進させるお姫様。

主砲はレーザービームもコイルガンも敵側の干渉にさらされる事が分かっているが、『ベイビーマグナム』には切り札がもう一つある。

下位安定式プラズマ砲。

『ディープオプティカル』からの主砲は、発射前動作を読み取って回避できる。後はこちらがやられる前に、立て続けに七門の主砲を発射し続ければ『ディープオプティカル』を沈められる。

そう思っていたお姫様だったが、

（あれは……？）

疑問が生じた。

お姫様は、相手のセンサー、レンズ、砲身などの微細な動きから発射前動作を先読みして回避行動を取っている。特に今回の『ディープオプティカル』が使うようなレーザービーム砲が相手だと、発射を確認してから回避するのは不可能だからだ。それをやるには相対性理論を覆す必要がある。

しかしだからこそ、お姫様は違和感を覚えていた。

レーザービームの主砲などは的確に回避できている。レンズやセンサーなどの微細な動きも読み取っている。

にも拘わらず。

『ディープオプティカル』の機体前面にある、ミステリーサークルのように並べられたレンズ群が全く動いていないのだ。

単なる故障やこけ威しでない限り、まだ何か切り札が残っている

ギュイ!!　と『ディープオプティカル』前面のレンズが一斉に微動したのはその時だった。

（来る……!!）

全神経を集中させるお姫様。

彼女はそれを、『極端に命中精度を上げる何らかのシステム』であると推測していた。よって、攻撃よりも回避行動を優先させるために意識を割いたのである。

だが、その予測は間違っていた。

音もなく。

いきなり、『ディープオプティカル』が増殖したのだ。

（は……？）

都合一〇機。

唐突に、横並びに出現した大量の『ディープオプティカル』を見て、お姫様の思考がわずかに停止する。

（ちがう、『ディープオプティカル』がふえたんじゃない）

「3次元のえいぞうをつかわれた!?」

ただの偽の映像であれば問題はない。複数の方式でロックを行う『ベイビーマグナム』なら、

赤外線や紫外線などのセンサーで真偽を見極める事もできる。

だが、

（……10き全てにロックのカーソルが反応している……？　そうか、『せきがいせん』や『しがいせん』もどうじにあやつって、こちらのコンピュータをごまかしているんだ!!）

そう思った直後、映像が大きくブレた。

やはり『ディープオプティカル』は一機。

律儀に移動し、本来の位置に『ディープオプティカル』の虚像を生み出しているところが相当に陰湿だ。

高度な三次元映像に、他のセンサーをも攪乱させる光学干渉。モニターからの情報で外の状況を判断しているお姫様にとって、それは得体のしれない幻術と同等の効果を生む。

そして、

（まずい、でおくれた……!?）

ごまかしだろうが何だろうが、判断材料が失われたのは痛い。

体にかかる強いGも気にせず慌てて真横へ緊急回避したが、『ディープオプティカル』から放たれた、主砲八本分の収束レーザービームが、『ベイビーマグナム』の主砲アームの一つを飴細工のように吹き飛ばした。

6

『くそっ、回折波を利用した二次元映像技術の応用か!!　原理自体は市販の立体映像プロジェクターにも使われているが、その裸眼3D映像をオブジェクトのレンズに合わせて調整してくるとはね!!　……オブジェクトのレンズの数に合わせて回折波の映像データを作っているだろうからレンズの機能を一部カットすれば「映像の違和感」は得られるかもしれないが……向こうもレンズの微細な動きから機能の有無を確認し、すぐさま対応した映像を作り直すはずよ!!』

事態の深刻さは、錯綜する軍用無線を聞いているだけでも伝わってきた。

『「せきがいせん」や「しがいせん」のロックもまとめてだまされてる!!』

『電波でロックしろ!　光学情報に頼るな!!　レーダーを参考に真偽を確認するのよ!』

『レーダーの方もおかしい……!!　こうてんがふえてる!!』

『ちくしょう、光も電波も広義じゃ電磁波だから、全部まとめて対応できているとでも言うの!?　索敵マイクやソナーでは、向こうの主砲が発射されるごとに爆発的に膨張する空気の壁に阻まれるでしょうし……!!』

作戦区域の南にある海域に停まっている小型船舶の上でそれらの通信を耳にしていたヘイヴィアは、思わず『ベイビーマグナム』の戦っている方へ目をやり……そして眩暈のようなもの

を受けた。

手すりに手をついたヘイヴィアは、

「うえっ、くそ……。ホントにあんなもんがリアルな3D映像に見えんのかよ？　ここから見るとクトゥルーじみた捻じれたオーロラをまとってるようにしか映らねえぞ」

「回折波を利用して、わざと右目用と左目用の映像を強引に重ねて『ブレ』を作っているのと同じ方式だろう。お姫様のいる正面以外から眺めても『ブレ』は有効に機能しない。……そもそも、あれは肉眼用ではなく、オブジェクトの大量のレンズに対応するような『ブレ』を作っているから、俺達人間が見ても混乱するだけだろうけどな」

「ちくしょう、これならオセアニアで観た『情報同盟』のアイドルエリートの方がまだマシだぜ」

「どうせならあのサイズのストリップ映像とか観てみたいよね」

だがクウェンサーもヘイヴィアもブツブツ言い合っている場合ではない。

普段の軍服からダイバー用の黒いスーツに着替えた『別動隊』は、小型船舶から次々に海中へと飛び込んでいく。

ここから二機のオブジェクトの激戦区の下を潜り抜け、その先へ逃げるオールドニックを追う訳だ。

『……ちくしょう。あんまりデカい潜水艇で近づくと「ディープオプティカル」に勘付かれる

っていうのは分かるんだけどさ、オールドニックの乗ってる船ってここから二〇キロ以上先にあるんだろ。生身で向かうような距離じゃないんじゃないか？』

『そもそも、むさ苦しい野郎どもがいくら泳いだって全く絵にならねえしな』

クウェンサー達は酸素ボンベを背負い、足には樹脂製のフィンをつけていた。しかし、いくら何でもこれだけでオールドニックの元へ向かう訳ではない。推進力として、アクアスクーターを摑んでいた。平たく言えば、巨大なモーターのついたビート板のようなものである。

電動の力に支えられ、クウェンサーやヘイヴィアを含む、一〇名ほどの別動隊は海中を進んでいく。

平時であれば青く透き通った海水に、珊瑚の隙間から顔を覗かせる熱帯魚などを見て感動しそうなものだが、今はそんな事をしている余裕はない。

電動の補助を受けているとはいえ、長時間海中を進んでいくと時間の感覚が失われていくような気がした。

ターゲットが直接見える事もなく、進んでいる方角さえ磁石の補助がなければ分からなくなる。

ゆったりとした揺り籠とはまた違う。明確な死のリスクが常に背中へ張り付いているのを自覚する。あまり続くと精神が変調をきたしかねないような沈黙があった。

その時だった。

頭上の太陽光を遮るように、時折巨大な影が通り過ぎていく。

言うまでもなく、それらはオブジェクトの巨体だ。『ディープオプティカル』はエアクッション中心の推進機関でシャークアンカーも装備していないため、海中への干渉能力は低いのだろうが、それでもビリビリとした鋭い震えがクウェンサー達の全身を包む。海上の砲撃の余波で、海水全体が微振動しているのだ。

そして、

『くそっ!!　お姫様の海戦用フロートにはシャークアンカーついてんじゃねえか!?　思いっきり海水が攪拌されてやがるぞ!!』

『進め進め！　一度ひっくり返ったら、後は排水口に流れていくゴム人形と同じ末路を辿らされるぞ!!』

敵というより味方に殺されそうになりながらも、クウェンサー達は必死でターゲットのオールドニックを追う。

『ディープオプティカル』が海中の人間を捕捉できないのは、対オブジェクトに特化した第二世代であるからか。

『頼むぜ。この辺に流れ弾落ちたりするんじゃねえぞ。いきなり一帯の海水が沸騰なんかしやがったら逃げられねえ』

『この海水の微振動、酸素ボンベの弁とかアクアスクーターのモーター壊したりしないよね？』

その時だった。

頭上の海面を高速で移動する『ディーノオフティカル』の主砲が発射された。

本来のレーザー光は側面から肉眼で観察できるものではない。だが空気中の塵や水分が焼けるため、やはり直視して良いものとは呼べなかった。

よって、クウェンサー達は競泳のようにうつ伏せの格好で、海底の方へ目を向けながら泳いでいたのだが、

ジィワァ!!!!!!　という真っ白な閃光は、構わず彼らの日を突き刺した。

『……ぐわあああああああ

ほとんどしがみつくような格好でアクアスクーターを摑み直すと、ようやく麻痺しかかった頭が重力を再認識した。

『ちくしょう、直線距離は一〇〇メートルないもんな。レーザー系を積んでる怪物と相対して良い間合いじゃないぞ』

『両目が無事なら他の味方を運ぶぞ。運の悪い馬鹿が海面をもろに見上げていたらしい。ボンベがあるからすぐに溺死する事はねえだろうが、サポートしねえとまずいだろ』

ヘイヴィアに促され、クウェンサーは海の底に沈みかけていた中年の女性の腕を摑む。激痛のせいか彼女は何かしらの絶叫を上げていたが、すでに無線の個人チャンネルを切っていた。聞くだけ無駄だ。

こうしている今も、海上では『ベイビーマグナム』と『ディープオプティカル』の戦闘が続いている。

『これ以上無意味な余波で踏み潰されるなんてごめんだぜ。距離さえ離しちまえば光学兵器の悪影響はかなり緩和できる。さっさと戦域の外に出ちまった方が良い』

戦々恐々としながらも、何とか激戦区を潜り抜けるクウェンサー達別動隊。

しかしその後もしばらくは海上に顔を出す事はなかった。オブジェクトのセンサー群を甘く見てはいけない。最低でも、『お姫様に夢中で対処していられない』ぐらいの距離は離しておいた方が良い。

『見ろヘイヴィア、オールドニックの船じゃないか！』

『チッ、潜水艦も大分近づいてやがる!!』

十分な距離を取ったと判断した二人は、海面へ上昇していく。

ゴーグルを外し、酸素ボンベ用のホースを口から吐き出した二人だったが、すでに浮上した潜水艦のハッチが開き、乗組員が顔を覗かせているところだった。高そうなチャーター船からは白人の老人が飛び降り、着地に失敗し、波にさらわれそうになりながらも、潜水艦の船体へ身を乗り上げている。

「やっと最終ホールだ！」

「ホールインワンで決めてえな」

だが距離がある。

およそ一五〇〇メートルほどだ。

「ちくしょう、ライフルで撃つにはまだ遠いな!!」

「ヘイヴィア、対戦車ミサイルは!?」

「そう来ると思ったぜ。ホールインワンは難しくてもアルバトロスなら狙えそうだ」

「アルバトロスの方が難しくない？」

「だが感動されんのはホールインワンなんだよなあ」

などと言い合いつつ、ヘイヴィアは透明なビニール袋をダクトテープで密閉した大きな筒を

取り出し、梱包を破いて取り去る。基本的にこの手の兵器は多少の水なら影響は受けないが、補正用のコンピュータや火薬の燃焼ガスの通り道などに水が入るとその限りではなくなる。水の対策は講じておいて損はないのだ。

立ち泳ぎの状態でミサイルの発射筒を肩に担ぐヘイヴィアだったが、

「くそっ、波のせいで狙いにくいな!!　クウェンサー、ちょっと俺の腰を支えてくれ!!」

「やだよ!!　こんな青い海で野郎と抱き合うなんて!!」

「俺だって好きでやってんじゃねえよ!!　あのお騒がせ枢機卿が潜水艦の壁を登ってハッチに辿り着いたら、アルバトロスどころかボギーだぜ!　また爆乳からの説教タイムになっちまう!　それが嫌なら協力しやがれ!!」

……まだ美人のブーツで踏まれる方が良いかも、とほとんど真剣に考えていたクウェンサーだが、背に腹は代えられない。真後ろから張り付くとミサイルの噴射煙をまともに浴びる危険があるため、横から近づいてヘイヴィアの体を支える。

「行くぞ!　ひっくり返らねえようにちゃんと支えてろよ!!」

「一秒でも早くやっちゃって!!　……駄目だ、後で何としてもお姫様を海水浴に誘ってこの思い出を塗り潰そう」

ヴァシュ!!!!!　という圧縮された空気が逃げ道を求めて暴れ回るような轟音と共に、爆発物が潜水艦へと突き進んだ。

元々莫大な水圧に耐えるように設計されている潜水艦は、この程度で沈没する事はない。

だがオールドニックを迎えるため、ハッチを開けていたのは間違いだっただろう。

飛来物を見て、慌ててハッチを閉めようとした乗組員だったが、その前にミサイルがハッチの真下の壁に突き刺さった。轟音と衝撃波の炸裂に対し、それでも金属製のハッチは壊れずに耐えた。ただし力に押されて急激に閉じたハッチは、上半身を出していた乗組員の都合など一切考えていなかったようだ。

人体が『喰われる』瞬間を照準越しに目の当たりにしたヘイヴィアは、わずかに顔をしかめる。だが後悔するほどの良心はない

「ラッキー!!　発で当たりやがった！　やっぱ天才美形富豪貴族ヘイヴィア様は偉大だぜ!!　オールドニックの野郎は引き剝がせたみてえだな。海に落ちた」

「潜水艦が離れていくぞ」

「これ以上深入りしても得はねえって判断したんだろ。……くそ、あのジジィ!!　運の良い野郎だ、まだ動いてやがる!!　天才美形富豪貴族ヘイヴィア様にケチつけてんじゃねえ!!」

「アルバトロスも駄目かあ……。せめてパーで終わってくれると良いんだけど」

オールドニックは潜水艦に助けを求めるように手を振っているが、黒い船影に応じる気配はない。

しばしサインを送り続け、やがて諦めた枢機卿は、手足を必死に動かして別の方向を目指し

ていく。

「何だ、自棄になったか？」

「いいや、作戦区域のすぐ北は、『正統王国』が出資している海洋貴金属採掘プラントじゃなかったっけ？　海水の中に溶けているタングステンを、多数のフィルターでこし取って凝縮させるっていう」

「ヤベえな……。ヤベえぞ！　そいつはバンカーじゃねえか!!　あれ戦闘に巻き込んだら絶対爆乳が大噴火しちまうぜ!!」

「ヘイヴィア、ミサイルであのじいさん直接狙えないの？」

「こんな中で装填作業はできねえよ」

ヘイヴィアはゴーグルと酸素ボンベを装着し直し、アクアスクーターを摑んで、

「世の中、楽はできねえな。近づいて鉛弾をブチ込むしかなさそうだぜ」

「オブジェクトがこっちに来ない分だけまだマシじゃないの？　バンカー抜けるのは難しそうだけど、そこからイーグルぐらいは狙えそうだしさ」

7

上官室のフローレイティアは歯噛みしていた。

上層部はロイベルツ＝オールドニックの掃討をハイエナと戦った時と同じ感覚で扱っているようだが、実際には全く質が違う。どんな手を使ったか知らないが、『資本企業』の『ディープオプティカル』を取り込んだ時点で、今回の問題は事件から戦争へと切り替わった。

その上、『ディープオプティカル』にはこちらの回避行動を阻害するための特殊なブラインド兵器が備えられている。

大量の分身。

回折波を利用した立体映像に、各種ロック用のセンサーを攪乱させる光学干渉。

お姫様のモニターに凄まじい異常が出ているのは、情報を共有している彼女達も理解していた。

フローレイティアは電子シミュレート部門と回線を開き、即座に対応を考える。

「例のブラインド兵器の特徴は分かったか!?」

『同時に七〇種の光波を自在に照射可能で、しかも波長は随時変更可能なところまでは!!　それら複数の波長を空間の一点でぶつける事で、通常の光波と回折波を組み合わせた「ブレ」のある映像を作ってリアルな二次元映像を認識させると同時に、赤外線から紫外線までの光学機器を利用したロック情報、レーダー等の電波情報へ一括で干渉されています!!』

シミュレート部門のオペレーターは続ける。

『照射角度、距離は不明！　ですが距離を取れば拡散する光波同士が干渉を起こしてしまうた

め、数キロ圏というのは間違いなさそうです!!』

オペレーターはほとんど悲鳴に近い形で質問に答えていく。

『また、通常の二次元映像は右目と左目の二つの映像を組み合わせるものですが、こちらは「ベイビーマグナム」のレンズ数に合わせて回折波を調整しているようです。多数あるレンズの一部分を意図的にカットすれば「正しい映像」は乱れ、真偽を判断する事はできるのですが』

「向こうも向こうで、レンズの微細な動きから、どのレンズが生きているかを即座に判断して映像を作り直すという話だろう？」

『その感覚が次第に短くなっています！　このまま続けば連続的に二次元映像のパラメータを変更され、いくらレンズの機能を調整してもわずかな違和感に気づく事すらできなくなるかもしれません!!』

今のところは、完全にお姫様が騙される事はない。一機しかいないはずのオブジェクトが一〇機に増えている、というありえない状況でもあるからなのだが……とにかくお姫様は映像の真偽を見極め、戦闘行動を続行できている。

しかし、

「一%でも欺瞞が混じっていれば、残りの九九%も信用できなくなる」

『今は分かりやすい欺瞞映像ですが、そちらに感覚を慣らした上で、「本物と見分けのつかない程度の」欺瞞映像を紛れ込まされた場合、お姫様が虚を突かれるリスクは増大します!!』

その欺瞞の時間も徐々に増え続けてきている。

欺瞞を見抜くかどうかも重要だが、それ以前に、欺瞞を見せられ続ける事そのものも問題だ。

「……今は各種センサーの障害を承知で、事前行動を取る事でかろうじて対応しているが、それすら間に合わなくなればまともに撃ち抜かれる……」

ブラインド兵器は数キロ圏で最大の効果を発揮する。ならばそれより下がって砲撃を行えば脅威から脱する事もできるだろう。

だが、

（……駄目だ。第一射は、〇キロ圏のギリギリから放ったが、簡単に曲げられていた。やはりあの五キロ圏がお姫様にとっても最も相手を仕留めやすい距離だし、何より『ディープオプティカル』がこの利点を見逃すとは思えない。逃げようとすれば何としても喰らいついてくる）

『歩兵のカメラや衛星とオブジェクトをリンクさせ、「別の視点」を与えては!?』

「わずかなラグにノイズもある。あの高速戦闘の速度にはついていけない!!」

打つ手がない。

攻撃のための砲でも、防御のための装甲でもない。もっと別のものによって、第二七機動整備大隊は窮地に立たされている。

その時だった。

「……？」

フローレイティアは眉をひそめた。

今こそ距離を詰めて連撃を仕掛けるべきであるはずの『ディープオプティカル』が、その場に留まって散発的な砲撃を始めたのだ。明らかにチャンスを逃している。それどころか、むしろお姫様と距離を取るため、積極的に後退を始めている。

無意味な行為とは思えない。

（何だ。ここでわざわざ主導権を放棄してでも後退を行うメリットは……）

『ディープオプティカル』の後方。

北。

戦闘区域の先にあるものは……。

8

『正統王国』の出資とはいえ、ソロモン方面そのものはオセアニア軍事国の独裁政権の混乱で、長らく『空白地帯』という扱いになっていた。つまり専用のオブジェクトで防衛されている訳ではない。海洋貴金属採掘プラントについても、政情が不安定な時にはオブジェクトが派遣されるものの、この施設を防衛するための専門の部隊は配備されていなかった。

そこへ、ロイベルツ＝オールドニックは泳ぎ着いた。

プラント自体は、養殖用の施設にも近い。施設の全ては海に浮かんでいる。その八割以上は、一〇メートル四方の正方形で区分けされた、『枠』のようなものだった。強化プラスチック製の枠は複数のドラム缶を結びつける事で浮力を増加させてある。そして枠の内側には、シーツのようなフィルターが何百枚も海中へ垂らされていた。これで海水に溶けたタングステンをこし取る訳である。

「ばっ……げばっ……!!　がはげほ!!」

オールドニックが辿り着いたのは、施設の一番外側にある『枠』だ。

プラントで作業をしていた男性は近づいて介抱するべきか今すぐ通報するべきか一瞬悩んだようだが、オールドニックが拳銃を突きつけると、悲鳴を上げる事すらできなくなった。

「……ヘリはあるか？」

血走った目で、老人は言う。

「モーターボートでも何でも良い。とにかく乗り物は!?　今すぐここを離れなければならない。周囲は『空白地帯』だ。そうとも、一度紛れて足跡を消してしまえば……」

その時、甲高い銃声がオールドニックの思考を遮った。

すぐ近くの枠を浮かばせているドラム缶に風穴が空く。

五〇〇メートルほど離れた海の上で、クウェンサーは思わず叫んだ。

「ヘイヴィア、このヘタクソ!!」

「波に揺られるし立ち泳ぎで踏ん張れねえしで狙いをつけられねえんだよクソッたれ!!」

標的は行動の邪魔になりそうな作業員を射殺する腹を決めたらしい。

クウェンサーは背負ったバッグからプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出しつつ、大声で呼びかける。

「飛び込め!!」

作業員は弾かれたように『枠』の内側へと頭から突っ込んでいったが、オールドニックは構わず海面へ鉛弾を放とうとした。

そこへ、クウェンサーは電気信管を取り付けた『ハンドアックス』を投げつける。

ヘイヴィアの言う通り、立ち泳ぎの状態では足を踏ん張る事はできない。思い切り遠投したつもりだったが、実際には五〇メートルも飛んでいなかった。

構わず無線機のスイッチを押す。

パガッ!!　という派手な爆発音が鳴り響き、爆風が届かないはずのオールドニックが身を伏せた。

元々、殺傷能力ではなく心理効果を狙った攻撃だ。

オールドニックは戦場を走るようなタイプの人間ではなさそうだ。爆風の危険域を摑めない彼は、衝撃波によって肌と耳に一定の痛みを感じ取った事などから判断し、慌てて退避する選択肢を選んだようだった。

彼はこちらを睨み、（この距離では当たらないのを承知で）拳銃で散発的に射撃をしながら『枠』から『枠』へと飛び移っていく。今のままでは遮蔽となるものがないため、本格的な銃撃戦になる前に準備を整える必要があると思ったのだろう

プラントの八割は『枠』だが、残る二割は別である。

「上陸時が一番ヤバいぜ。いかに拳銃だろうが、無防備な所を狙い撃ちにされたらおしまいだ」

「酸素ボンベもアクアスクーターもあるんだ。目一杯潜って、海水を盾にしよう」

クウェンサー達は海中を密やかに進む　四角い『枠』の内側にあるのは、幅二メートル、長さ数十メートルもの長さの薄い布だ　それが縦と横の枠の容積いっぱいに、それこそ四角い柱と錯覚するほどに垂らされている。多少は波に揺られているとはいえ、ピンとほぼ垂直を保っているのは、おそらく下端におもりがつけられているからだろう。

『（……すごいな。このアルミホイルみたいにギラギラ光っているの、全部タングステンか？フィルター一枚で中規模自動車工場の工作機械を丸ごと用意できそうだぞ）』

『（……へっ。色男へイヴィア様の横顔に自分で目が眩みそうだぜ）』

『（……ちえ。お土産に欲しいぐらいあるよな）』

一方、オールドニックはその『枠』の外側の通路を走り、鋼鉄でできた施設へ足を踏み入れていた。厳密にはここも海上空港などに使われる巨大なフロートの上である。

（……まともにやり合えば勝てる見込みはない）

元枢機卿は率直にそう思う。

何しろ相手は世界的勢力の支援を全面に受けた、プロの軍隊なのだ。使っている装備も持っている弾数も桁が違う。ずぶ濡れの老人一人が拳銃だけで太刀打ちできる連中ではない。

潜水艦にも見捨てられた。

そもそもが、逃げ道へ必死に手を伸ばそうとする事自体、神聖かつ正義の象徴である『枢機卿』という単語にはあまりに不釣り合いだった。

（……私は、常に正しかった。正しい側にいた）

その正しい彼は、民間の輸送団や積荷の積み替えを行う施設を平気で襲うハイエナと握手を交わしていた。

（拡大するギリシア勢力を放置すれば、十字教の領土・資金・人員・文化、そうしたものが次々と奪われてしまう。私はそれを守るために立ち上がった）

ヴァルキリエをかわすために『正統王国』は味方だと喚き散らし、『資本企業』とも繋がり、南海に本物の戦争を勃発させた。

（私の行いは『信心組織』の歴史に燦然と輝く名誉であるはずなのだ！　皆が私を賛美し、皆が私に畏敬の念を送る！　それがあって当然なのだ。そうでなければおかしいのだ！　そうだ、おかしい、不当だ！　何もかも何もかも!!）

そして今。

味方の潜水艦にも見放され、プラントで働く民間人に銃を突きつけ、ただ自分の命惜しさに海上の袋小路を走り回るだけとなったオールドニック。

だが、そんな惨めな現実から老人は全力で目を逸らす。

彼の希望は、まだ完全に潰えた訳ではない。

こちらにはまだ切り札がある。それがある限り、『資本企業』のオブジェクトは彼の味方だ。

オールドニックは、おそらくヘリか何かの管制を行うための設備なのだろう、大型の無線機に手を伸ばすと、『資本企業』軍へと周波数を合わせる。

当然、民間用の『暗号技術の使えない』無線装置から流されている電波なら、海中を進むクウェンサー達にも簡単に傍受できる。

聞き覚えのある声だった。

わずかに老いの感じられる、しかし規律という芯の通った声色。

ロワイヨーテ方面でぶつかった、あの指揮官のものだ。

『オールドニック枢機卿。その機器はまずい。通信をするために、我々も暗号の手順を切る必要がある。連絡用には我々が貸与した無線機があるはずだろう』

『それが正常に使える状態なら、私もわざわざこんな回りくどい方法は使わない！』

すでにクウェンサー達はプラントの真下に到着していた。後はどこから身を乗り上げれば安全に上陸できるか、そのポイントを探している最中だ。

『オブジェクトを回してくれ、一刻も早く!!　予定では「正統王国」からの追っ手は全てそちらが引き受けるはずだっただろう！　あいつらは一体何なんだ。それに……』

『枢機卿が今いるプラントも、未だに破壊できていない、と？　全ての作戦行動が机上の通りに進行する訳ではない。こちらも今、順を追ってノルマを消化しているところだ』

クウェンサーとヘイヴィアは、海中で顔を見合わせた。

今の話は、彼らが最初からこのプラントを巻き込む形で戦闘を行い、施設を破壊する事を計画していたように聞こえる。

「良いか」

ずぶ濡れの格好も気にせず、感電の恐れを想像するほどの余裕すらなく、ロイベルツ＝オールドニックはヒステリー寸前の声色で無線機のマイクに言葉を叩きつける。

「ここで私が死ねば、お前達は目的のものを入手する事はできなくなる。それを忘れるなよ！」

『そちらこそ。方法だけあっても生産はできない。我々の条件には優劣などない事を覚えておくと良い』

上陸ポイントを決定し、海上の監視がないかどうか、銃から取り外したスコープを潜望鏡のように海面から出して周囲を確認するヘイヴィア。

クウェンサーは無線の内容を聞きながら、ポツリと呟いた。

『……プラチナだ』

『どういう事だよ？』

『最初にオールドニックが接触したのは、オセアニア産のプラチナを横取りするハイエナだった。そして今度はタングステン採掘のためのプラントを狙ってきた。だとすれば、考えられるのは……』

クウェンサーはわずかに言い淀み、

『炭素とタングステンの原子を人工的に組み合わせて、プラチナの原子を作ろうってプロジェクトがあるんだ。「電子数学の財宝」なんて呼ばれている。不安定な数の電子しか持たない原子に、別の原子をくっつける事で安定させる技術だよ。……ばあさんが工業用のプラチナを量産するための研究があるなんて事言うから、軍用のデータベースをあれこれ検索して調べたんだ』

ようは、本来ならとてつもなく高価なプラチナを、全く違う二種類の原子を組み合わせて合成してしまう技術だ。

『タングステンもレアアースに含まれるけど、プラチナほどの高値じゃない』

『ヤツらはその合成法で好きなだけプラチナを作ると同時に、よその産出地を妨害して値を釣り上げようとしてやがる訳か。タングステンのプラントも一緒に潰しにかかっているのは、似たような事を考える同業者を事前に排除するって感じだな』

制御施設で通信を行っているオールドニックも歯噛みしていた。ギリギリギリと音を鳴らしながら、最後に残った細い命綱へ必死にすがりつく。

純粋な金による繋がり。

老人は、そのリスクを承知している。

しかし『資本企業』軍との取引にこれほど有効なカードはないのである。

「プラチナの生産体制さえ確保できれば、私は再び表舞台に立つ事ができる。オブジェクトは一機五〇億ドルを超えるが、ようはそれだけの資金が集まれば戦争は起こせるという事だ。私は私の領土を取り返す。あのギリシア勢力の手から必ずだ」

『そうまでして返り咲きを望むか。枢機卿の言う製造法は、宗教会議上で「摂理」とやらに抵触していないかどうか、答えはまだ出ていないのではなかったか？「神様の創った世界」に似合わない不純物を持ち込む危険性があると』

大抵の宗教では世界は神が作ったか、その成り立ちに大きく関わったとされ、ありとあらゆる物質も神の力がなければ生み出される事はなかったとされる事が多い。

自然界に存在しない物質を、人間が作ってしまって良いか。

それは神が創った世界に余計な不純物を持ち込むのではないか。

こうした問題がささやかれるが、しかしビニールやプラスチックを作った程度で『信心組織』の『中央』が目くじらを立てる事はない。

酸素と水素を使って水を作ったところで、それは『神が創った世界の一部』を組み合わせた結果に過ぎない。だからそれは『神が創った世界の延長』であって、摂理には反していないと

するのが『中央』の考え方なのだ。

『……だが、「電子数学の財宝」にその回答は使えない。原子と原子を組み合わせて分子を作るのではなく、二原子間の電子の数を利用する事で、原子と原子を組み合わせて原子を作ってしまう「電子数学の財宝」は、単純な積み重ねから外れてしまっている』

問題はそこだけではない。

生み出されるのが完全な新物質ではなく、すでに存在するプラチナであるという事も重要な点なのだ。

『厳密に言えばタングステンと炭素の二個の原子がくっついている物質にも拘わらず、プラチナ原子一個と完全に同じように振る舞う。誰にも見分けのつかない異物。これは「神様が作った世界」の一部分に人工物を埋め込んだ上、その人工物に「神様が作った世界」が何の違和感も持たずに受け入れる事を意味してしまう。それは有害な新物質が作られるより、よほど宗教的な反発を招くかもしれないな』

あくまでも自然環境を人工的に再現し、炭素を加工する人工ダイヤとは違う。

原子の質も数も違うはずなのに、同じプラチナ原子として振る舞ってしまうという事実。

単にプラチナ一種が作られる事が冒瀆なのではない。

プラチナが作られてしまう事で、原子分子の組み合わせでできるこの世界全体のシステムの脆弱性を露呈させてしまうのが冒瀆なのである。

しかしオールドニックは即座に答える。
それは確固たる信念があるというより、都合の良い部分しか見ていないような瞬発力だった。
「野蛮な輩に奪われた土地を、財産を、人々を、もう一度集約させるのだ。責められるいわれはない」
『たとえ金を集めたとしても、オブジェクトを製造するには様々な壁があるというのに』
「最悪、オブジェクトに届かなくても構わない。『信心組織』の為替は固定されているのは知っているか？　それでも変動レートの世界市場に対応するため、現金よりもダイヤやプラチナの取引を優先している事を」
『回りくどいやり方だと経済アナリストは評価しているがね』
「……ギリシアの主要変動レートはプラチナに依存している。その値が暴落すればヤツらの文化圏に多大な混乱が訪れる。欲を言えばそこへオブジェクトをぶつけてやりたいが、その役は私でなくても構わない」
ロイベルツ＝オールドニックは狡猾に笑う。
「あれだけ強引な方法で勢力を拡大させているのだ。方々で恨みも買っている。プラチナの混乱で勢いが弱まれば、他が一気に食い潰すさ」
そんな老人の死角。海中からクウェンサー達は施設へ近づいていく。
上陸ポイントを見定め、巨大なフロートの縁を両手で摑んだ二人だったが、そこで甲高い銃

声が鳴り響いた。

フロートの側面が、わずかに弾ける。

二人は慌てて両手を離し、再び海中へ身を隠した

『何だっ、ちくしょう!!　今のはオールドニックじゃねえぞ！　方角が違う!!』

揺らぐ海面を通しては、遠くを確認する事はできない。しかし水面から顔を出せば、狙い撃ちにされる恐れがある

海水を切り裂き、気泡でできた槍のようなものを従える弾丸が、クウェンサー達のすぐ横を突き抜ける。

『向こうもこっちの位置を摑んでる訳じゃなさそうだな』

クウェンサー達はひとまずその場を離れるように泳ぎながら、今の状況について考える。

『オールドニックの仲間でもやってきたのか？』

『「資本企業」の地上警備の連中でも回されてきたとかじゃねえだろうな』

ヘイヴィアは海面近くまで体を浮上させ、ライフルのスコープだけを海水から外へと出した。潜望鏡のように、周囲の状況を確認する。

『……ヤベえな、くそ。「資本企業」の兵隊じゃなさそうだぜ』

『どういう事？』

『ヴァルキリエだ　「信心組織」の精鋭がフラントの「枠」に張り付いてやがる!!』

クウェンサーがヘイヴィアの隣に並ぶと、彼はライフルから取り外したスコープをこちらへ渡してきた。

自分の目で確かめる。

確かに、見覚えのある軍服を着た女達がいた。ヴァルキリエは、『枠』の上へ完全に乗り上げて走っているのではない。両肘を『枠』に押し付けて体を固定し、短距離狙撃ライフルを構えている。

『身を隠す事ができないリスクは向こうも承知している訳だ』

彼女達から少し離れた所に、小型の潜水艇が顔を覗かせていた。

クウェンサーはスコープをヘイヴィアに返しながら、

『でも何でヴァルキリエがこんな所に？　やっぱり同じ「信心組織」だから、オールドニックと繋がっていたのか!?』

『だとすりゃ「資本企業」の兵隊とぶつかるより面倒臭い事になりそうだが……』

ヘイヴィアが言いかけたその時、再び銃声が連続的に響き渡った。

思わず身を竦める二人だが、銃弾はこちらに向かって飛んできている訳ではないらしい。

『何だ……？　他の仲間達を狙っているのか』

『違う。違うぜ……。あいつら、オールドニックが駆け込んだ巨大フロートに向けて発砲してやがる!!』

『何で!?』

『本来の業務ってヤツだろ。ヴァルキリエは宗教上の規約に反した「神敵」ってのを処刑するためのグローバルな天罰集団だ。だから「信心組織」としてオールドニックを狙ってきた!!』

ヘイヴィアはライフルに取り付け直したスコープの調子を確認しつつ、

『だが、敵の敵は味方なんて甘っちょろい事にはならねえぜ。俺らとヴァルキリエは、同じ首を狙ってんだ。このままじゃ激突は避けられねえ!!』

本来なら同じターゲットを狙っているはずなのに、そのいがみ合いがロイベルツ＝オールドニックへチャンスを与えてしまう。下手に時間を稼がせると、今度は『資本企業』の兵隊達がオールドニックの防衛に回される可能性だってある。

『……』

クウェンサーは少し考え、

『ヘイヴィア、そのライフルをちょっと貸せ』

『何だよ。狙撃の訓練も受けた事ねえヤツがこんな状況で役立つ訳ねえだろ！　相手が短距離狙撃ライフルだからこの距離じゃ当たらねえとでも思ったか？　ヤツらの腕なら十分俺らを狙えるぜ!!』

『そうじゃない。』

クウェンサーは首を横に振って言う。

『鉛弾よりも、もっと効果的な方法がある』

その『方法』を語ると、案の定ヘイヴィアは難色を示した。

『無茶だぜ。さっきも言っただろ、敵の敵は味方にはならねえ!!　俺らは同じターゲットを狙ってんだ。だから……』

『任せろよ』

使い物にならなくなるのを承知で、クウェンサーは海中でサバイバルキットを開封する。

『何事にもやり方ってものがある。良いからそのライフルをこっちに貸せよ、ヘイヴィア』

9

タングステン用のプラントに張り付き、少数の部下を率いながら、ヴァルキリエのサラサ＝グリームシフターは小さく舌打ちした。

（……まさかこの局面で『正統王国』とぶつかるとはな）

ロイベルツ＝オールドニックの失言はいつもの通りだが、『正統王国』を巻き込んだ今回の事態に関しては、ヴァルキリエをかわす狙いがあったのではないか……と彼女は考えている。

チェックメイトへ繋がる盤面の流れを意図的にかき乱し、『正統王国』と『信心組織』をかち合わせる事で、その隙をついて安全圏まで逃げ延びようとしている。

あのオブジェクトを直接敵に回すような贅沢は普通なら自殺行為だが、『資本企業』の力を借りて排除できるのであれば、ギリギリのところで利用できない事もない。

（その小癪な考えが宗教上の規約に反するレベルに達したからこそ我々が派遣された訳だが……『正統王国』にそんな事情など通用しない。潰し合いは必須か）

「マリア、レイチェル」

サラサは無線で部下に指示を出す

「短期で仕留める。五〇ミリの追撃砲の準備をしろ。私が意図的に『的の外れた』狙撃を行う。短距離狙撃ライフルを使っている事が分かれば向こうは距離の関係で油断する。顔を出した所へデカいのをぶち込んでやれ」

『了解。「片手持ち」なら、パパッと準備できます』

『早いトコ済ませて逃げないと、最悪、あのオブジェクトに追われる展開も想定しなくちゃいけなくなりますしね』

マリアやレイチェルが水面に潜るのを確認してから、サラサは改めてスコープを覗き込む。

すると、海面におかしなものが立っていた。

『正統王国』で正式採用されているアサルトライフルだ。

銃身だけが覗いているのなら理解できるのだが、何故か肩に当てるストックの方が顔を出していた　しかも、そのストックには何か白い布のようなものが結びつけてある。彼女は知る

由もなかったが、それはサバイバルキットの中にある、止血布だった。包帯のように巻く事もできるし、折れた腕を吊ったり、捻挫した足首を固めたりするためにも使える物である。

（白旗のつもりか……？）

意図が読めず、眉をひそめるサラサ。

改めて海面から出てきたライフルを観察する彼女だが、そこで、白い布に油性のマジックで何かが書かれている事に気づいた。

数ケタの番号だ。

彼女は少し考え、無線機を取り出す。

「……何の真似だ。電波の発信位置から私の位置情報を補正するつもりか？」

『好奇心が旺盛なタイプで助かった』

周波数を合わせると、部隊の人間とは明らかに違う、そもそも男の声が聞こえてきた。

おそらくは『正統王国』だろう。

『俺達は共にロイベルツ＝オールドニックを狙っている、だが、ターゲットの首は一つしかない。そのせいでやる必要もない面倒な銃撃戦の必要に迫られ、それが結果としてオールドニックにチャンスをなえてしまっている。……ここまでは共通の見解って考えて良いか？』

「馬鹿ではないようだな」

サラサはうっすらと笑い、

「だが、敵の敵は味方なんて甘い事は考えていないだろうな。ヴァルキリエは宗教上の規約に反した『神敵』を、何があっても必ず仕留める　お前達にその首を渡すつもりはない。ヤツのセッティングだというのは気に入らないが、銃撃戦は避けられんよ」

『首ならくれてやる』

しかし、『正統王国』の兵隊は即答した

『こっちはDNAで鑑定できればそれで問題ない。だからオールドニックを射殺した後、お前達に時間をやる。首を切り取ったら、残りはそのまま置いておけ。後はこっちで回収するよ』

「……」

サラサはしばし考え、

「今のは正式な発言とみなすぞ。仮に我々の不利益に結びついた場合、お前達とその部隊は『神敵』として正式に登録される。意図の有無は関係ない。たとえ流れ弾でも、私や私の部下に一発でも当たれば、『信心組織』は永劫にお前達を追い続ける」

『それで良い』

ヴァルキリエという組織と『約束』する事の意味を理解しているのかいないのか、『正統王国』の兵隊も迷わなかった。

『こっちが命令されているのはオールドニックの死亡確認だけだ。そっちと違って、誰が殺したかは重要じゃない　大体、こんなクリーンな時代に敵の掌の上で無意味なドンパチなんてご

めんだね。死体の数は少ないに越した事はないよ』

10

『信心組織』のヴァルキリエが、巨大フロートを狙って短距離狙撃ライフルで次々と発砲していく。敢えてフルオートを使わないのは、命中精度を上げるためではなく、『常に撃ち続ける』状況を作るため、弾丸の消費速度を落としているのだ。

命中精度を気にしていないところからも分かる通り、ヴァルキリエは遠方からターゲットの急所を撃ち抜こうとしている訳ではない

海面から巨大フロートへ乗り上げるクウェンサー達の支援である。

危険な上陸時にオールドニックに撃たれないよう、彼が遮蔽物から顔を覗かせられない状況を作っている訳だ。

「くそっ!!　すげえ勢いで撃ってきやがる!!　ありゃホントに援護射撃なのか。どさくさに紛れて俺らまで殺そうとしてんじゃねえだろうな!?」

「短距離だから正確な狙いがつけられないっていうのが怖いよね」

巨大フロートのプラント施設へ上陸したクウェンサーとヘイヴィアは、身を低くしたまま大きな制御施設へ向かう　粘土のような爆弾を取り出し、鋼鉄の扉の中央へ貼り付け、電気信管

を突き刺す。

そこでオールドニックが勘付いた。

扉に向けて、立て続けに拳銃を連射していく。

慌てて地面へ転がったのはクウェンサー達だ。

「くそっ！　さっさと離れろクウェンサー!!　邪魔なドアは吹き飛ばしちまえ!!」

「そのまま死んじまえ!!」

身を伏せたまま、クウェンサーは無線機のスイッチを押す。

爆発が起こり、鋼鉄の扉がまとめて室内へ突っ込んでいった。オールドニックには直撃しなかったようだが、衝撃波をまともに浴びたらしい。大型の通信装置へ体をしたたかに叩きつけられるのが見えた。

扉のなくなった出入り口からヘイヴィアがライフルを撃ち込むと、いくつもの機材が火花を散らした。だがオールドニックはふらつく体を動かし、さらに施設の奥にある階段へと飛び込んでしまう。

「しつけえ野郎だ!!」

ヘイヴィアは叫びながら、オールドニックの後を追って階段を駆け上がっていく。

パパンパン!!　と立て続けに銃声が鳴り響く。

ヘイヴィアのライフルではない。オールドニックの拳銃のものだ。

二階に着いたヘイヴィアは、通路の角の壁に身を寄せていた。オールドニックは散発的に拳銃を撃ってきているため、安易に顔を出す訳にはいかない。しかも危険を承知でわずかに通路の奥を観察したところ、相手は通路の壁に並べられていた戸棚を片っ端から薙ぎ倒し、簡単なバリケードを築いているようだった。

「面倒臭せえな、ちくしょう」

ヘイヴィアは無線機のマイクを口に近づけ、

「クウェンサー。おいクウェンサー!!　テメェの持ってる電気信管を一本こっちに回せ！　今すぐ投げろ!!」

『何で？　爆薬は？』

「良いから階段から投げろって!!」

ヘイヴィアがそう叫ぶと、素直に階下からボールペンのような信管が飛んできた。身を低くし、床に転がった信管を摑んだヘイヴィアは、携行型対戦車ミサイルの予備の弾体を取り出すと、側面のコネクタに電気信管の先端をはめ込んでいく。

これで、無線信号で爆破できるようになった。

「死にやがれクソが!!」

オールドニックの放つ銃声に身を竦めそうになりながら、ヘイヴィアは通路の角から腕だけ出してミサイルの弾体を投げつける。

即座に壁に背を預け、ヘイヴィアは無線機のパネルを親指で操作する。
これで吹き飛べば問題なし。
仮に相手が生き残ったとしても、オールドニックとの間を遮っているバリケードはまとめて失われる。後は衝撃で動きの鈍くなった敵を一気に仕留めれば良い。
そう考えていたヘイヴィアだったが、
「待て、待った!!」
不意に、通路の奥から老人の声が飛んできた。
ヘイヴィアは安易に通路の角から顔を覗かせない。額の真ん中を撃ち抜かれるのはごめんだ。
「『資本企業』のオブジェクトの情報を渡す!!」
しかしオールドニックはこんな事を言う。
「……お前達はヴァルキリエではないな!?　となると『正統王国』か？　今戦っている『資本企業』のオブジェクトの情報は欲しいだろう!?」
「なるほど失言さん。だが俺らの第一目標は『ディープオプティカル』じゃなくてテメェの首だ。そんな調子で余計な事をしゃべりすぎたんだよ。そもそもテメェがいなけりゃ、『正統王国』も『資本企業』も戦う必要はねえんだ」
「今回に限ってはな。だがいずれ、どこかの戦場で激突する。あの第二世代の構造は今の内から知っておいた方が良いんじゃないのか？」

（……チッ、手の内はお見通しって訳かよ。『取引相手』について内偵していた情報でも握ってやがんのか）

「それに、オブジェクト開発の上でも有用な情報じゃないかね。複数のレーザービームを安全に集約させるための液化プリズム、衝撃吸収などに用いるレーザー振動検知。『正統王国』の独自技術だけでは得られないものもあるかもしれないぞ」

確かにオブジェクト関連の技術情報は莫大な金に直結する。設計志望のクウェンサー辺りなら涎が出るかもしれない。

ヘイヴィアが無言でいる間も、オールドニックはまくし立てる。

「今回は手を退こう。私はここで鎮静化する。『正統王国』と対立する事を私も望んでいない。ギリシアさえ滅ぼせれば何だって構わない。それは『信心組織』全体と対立しているお前達の利害とも一致するかもしれないぞ？」

「……そうかい」

オブジェクトの技術情報を渡してくれる上、敵対する『信心組織』の一大勢力を吹き飛ばしてくれるらしい。

それを吟味した上で、ヘイヴィアは決断した。

「じゃあ死にやがれ」

「くそ!?」

ヘイヴィアが迷わず無線機のボタンを押す直前、オールドニックは身を翻し、投げ込まれた対戦車ミサイルの弾体から少しでも距離を取ろうとした。走るのではなく、ヘッドスライディングのようにうつ伏せの格好で床へ身を投げる。

バム!!　という爆音と粉塵が吹き荒れた。

「がァあああああああああっ!?」

「チッ、まだ叫ぶ程度の余裕はあるかよ!!」

もちろん爆薬の種類や距離などにもよるが、立った状態と伏せた状態では、同じ爆風でも殺傷率が七〇%以上も変わるという報告もある。

痛む体を引きずろうとするが、オールドニックは思うように動けない。床の上でただ荒い呼吸を繰り返し、顔を引きつらせて老人が言う。

「馬鹿、が。取引という言葉を知らんのか……!?」

「まぁ確かに内輪揉めで『信心組織』が弱体化してくれりゃあ、それに越した事はねえが」

ヘイヴィアは通路の角から慎重に出て、ライフルの銃口をピタリと据える。

「テメェの言うギリシア勢力ってのは、どうせ戦場も『安全国』も区別してねえんだろうが。そんな野郎に協力するつもりはねえなあ」

「……っ!?」

一方。

クウェンサーは制御施設の一階……大型の通信設備のある部屋に留まっていた。

（……オールドニックのヤツ、死にたくないのは分かるけど、あいつはどこをゴール地点に定めているんだ？）

施設の屋上にヘリポートでもないかどうか、クウェンサーは見取り図のようなものを探そうとする。

操作パネルの上には、携帯端末が置いてあった。プラスチック製の外殻はひび割れていたが、まだモニターは光っている。

（オールドニックの……？）

クウェンサーは携帯端末を摑む。

（あいつらに関する情報があるかもしれない。敵の規模や利害関係なんかが分かれば、今後の策に繋がるはずだ!!）

外部へのリンクや暗証コード群などが見つかったが、無線用の機能が壊れているため外部サーバーに溜め込まれているであろう情報を入手する事はできなかった。ただ、携帯端末内にはいくつかの一時ファイルが残っている。クウェンサーは携帯端末を操作し、何とかしてそれら一時ファイルを読み込んでいく。

『プラチナの価値の変動』

『タングステンの利用法』

『電子数学の財宝』

断片的な見出しはあるのだが、それらのリンクの先がない。クウェンサーは舌打ちし、さらに情報を呼び出していく。

『オセアニア』

『ドーム状の人工牧場＝「情報同盟」製』

『食糧事情』

『自給率と輸入率』

「なん、だ……？」

クウェンサーは眉をひそめた。

オセアニアの農業関係のデータがいくつか出てきている。だが、『資本企業』とオールドニックの繋がりはタングステンを利用した人工プラチナ製造法『電子数学の財宝』を軸にしていたはずだ。農業や食糧事情などが関係しているとは思えない。

（いいや……）

『自然環境のバランスが不安定なオセアニア』

『放牧を利用した従来の酪農は不可能』

『「資本企業」からの食肉輸入率七〇％』

『「情報同盟」から提供される人工牧場に及ぼされる影響』

クウェンサーはごくりと喉を鳴らした。

「……緑と砂漠のバランスが不安定なオセアニア国内で放牧が禁じられている関係で、食肉関係はほぼ『資本企業』からの輸入に頼っている。でも、オセアニアは採掘したプラチナで得た資金を基に、『情報同盟』からドーム状の人工牧場施設を購入しようとしているんだ。だとすると……」

オセアニアに人工牧場ができると困る勢力がある。

ヤツらは、そういった大規模酪農施設の設置費用を紙屑に変えたい。

そのためのプラチナ潰し。

タングステンを利用した『電子数学の財宝』を用いて、プラチナの値を暴落させたいと考える、『資本企業』側の利害。

だが。

不安定な食糧事情を改善するための、『情報同盟』製の人工牧場だ。

それが奪われるという事は、

『サイクロンなどによる悪影響』

『輸送ルートが封じられた際の懸念』

『深刻な食糧難』

『推定飢餓者＝五〇万人強と算出』

『死亡者許容上限数七五万人以内で解決』

「くそ、あの野郎ども……ッッッ!!!!!」

クウェンサーが思わず携帯端末を握り潰そうとした時だった。

銃撃を受けて壊れかけていた大型の通信装置から、ひび割れた声が飛んできた。

『そうそう』

通信相手は、まだここにオールドニックがいると思って話しているのだろう。

『枢機卿。確認を取りたいんだが、あなたの言う人工プラチナ製造法「電子数学の財宝」なのだがね……実を言うと、我々はそれ自体を必要とはしていないんだ』

「……、」

『ようは、我々としてはオセアニア産のプラチナさえ暴落すればそれで良い。そして、市場とは実際に脅威がなかったとしても、「これから暴落する」とさえ思わせられれば、それでパニックは十分に引き起こせるのだよ』

何を言いたいのかが分かってきた。

顔を青ざめさせるクウェンサーに、無線の声はこう告げる。

『だから、枢機卿から正確な製造法を教えてもらう必要はない。曖昧に、枢機卿と手を取り合っているという関係さえ提示できれば良い。……逆に、だ。ここであなたが「正統王国」や「信心組織」の手で捕まるか殺されるかして、「資本企業」は「電子数学の財宝」の技術情報を

持っていないと判断されてしまう方がはるかに面倒臭いのだよ』

「っ!!　ヘイヴィア!!」

クウェンサーは自分の小型無線機に口を寄せる。

「急いでそこから離れろ！　『資本企業』の狙いは、あいつらは、このまま追い詰められたオールドニックを……!!」

『ならいっそ、ここで消し炭にしてしまった方が、今後も有用な「疑惑」を維持できるとは思わないかね？』

ヘイヴィアの返事を待っている暇はなかった。

クウェンサーは全力で施設から外へ飛び出し、そのまま海へ飛び込む。海水が口の中に入ったが、気にしていられなかった。右腕の下腕を両目に押し付ける。

直後だった。

バヂィ!!!!!　と。

溶接の光を何十倍も膨らませたような閃光が炸裂した。

腕を使って両目を保護していても、無視して閃光は両目に突き刺さった。それが莫大なレーザービームが建材を焼き切ったものだと冷静に判断する事はできなかった。

洒落や冗談抜きに、クウェンサーの視界は束の間失われた。
その暴力的な光こそ、あの超大型兵器からの攻撃を裏付けるものだった。
第二世代。
ディープオプティカル。
（うう……!?）
「がは!!　げほげほ!!」
眼球のすぐ前に幕でも垂らされたかのように、残像の残る視界が取り戻される。
パニックを起こしかけたクウェンサーは、目のすぐ近くにあるボンベのチューブではなく、とっさに海面へ酸素を求めた。
顔だけを水面から出すと、異変は鮮明になった。
淡い色の巨大フロートが、銀色の鏡のように磨き上げられていた。
だが違う。
（……鋼鉄でできた、制御施設の建物の一部が、蒸発した……!?）
熱した霧のように変化した金属が、スプレーのように巨大フロートへ吹き付けられてから冷えて固まったのだ。おかげで、フロートの表面にメッキを施されたかのような輝きが生まれたのである。
（ふざけ、やがって……）

やはりオブジェクトの砲はまともではない。
回避できたと分かっていても、後から恐怖心が手足の先から体の中心へと襲いかかってくる。
とてもではないが、素直に安堵できない　今は頭脳をフルに活かして生き残るための策を練らなくてはならないはずなのに、その思考が感情によって散り散りにされていくのが自覚できる。
そこへ、半ばの階を焼き切られ、薙ぎ倒される運命を背負わされた上層階がまともに海面へと落ちてきた。
突発的に生まれた海水の流れに翻弄されるクウェンサーだったが、酸素ボンベがあったおかげで溺死は回避できた。
海面に顔を出すと、近くでは同じようにヘイヴィアが顔を覗かせていた。
おそらくレーザービームが撃たれる直前、窓から飛んだのだろう。
「死ぬ！　ちくしょう、死ぬ!!　頭が熱くなって痛みの感覚が飛んでやがる!!　俺の手足は全部揃ってんだろうな!!」
ほとんどパニック寸前で、ヘイヴィアは叫ぶ。
クウェンサーの耳に、無線を通して女の声が飛んできた。
『信心組織』のヴァルキリエのものだ。
『おい、今のはこちらでも確認していたぞ！　ロイベルツ＝オールドニックはどうなった!?』
答えたのは寸前まで彼を追っていたヘイヴィアだ

「知るかよクソッたれ!!　あのジジィ、液化プリズムだのレーザー振動検知だの意味深な事言ってた割に、あっさり二階部分と一緒に吹き飛ばされやがった!!　あの調子じゃ魚の餌が残ってるかどうかも分かんねえぜ!!」

『チッ……!!』

舌打ちが聞こえた。

直後に無線通信が途絶える。クウェンサーの方からいくら信号を送っても、返答は一切なかった。

「逃げたか……」

「俺も逃げてえよ!!　あの爆乳にプラント傷つけさせるなって言われてたのにこれだぜ!!　イエローカード何枚目だ!?　レッドカードってストックできるもんなのか!?」

クウェンサーは無視して、自分の意見をまとめるために一人で呟く。

「……元々、ヴァルキリエの目的はオールドニックだけだ。『資本企業』だの『ディープオプティカル』だのに付き合う義理はないからな」

しかしクウェンサーやヘイヴィアは違う。

『ディープオプティカル』は『ベイビーマグナム』と戦っている。仮にお姫様が負ける事があれば、機動整備大隊はともかく、クウェンサーとヘイヴィアは執拗に狙われる事になるだろう。

何しろ。

彼らは、ロワイヨーテ方面の一件で、『ディープオプティカル』側から集中砲火を浴びるだけの理由は作っている。

タングステン高騰を狙う目的でプラントを破壊する『ついで』として、いつ主砲を撃ち込まれるか分からない状態だ。

「……結局、生き残るためにはいつも通り、地獄の真ん中を突っ切るしかない訳だ」

「ふざけやがって、やっぱりラストはオブジェクトかよ……！　ちょっと天国が近すぎるんじゃねえのか!?」

悪態をつきながら、彼らは再びゴーグルとボンベのマウスピースを装着し、潜行する。

狙うは『資本企業』の第二世代。

『ディープオプティカル』を粉砕しない限り、ここから生きて帰る事はできない。

11

アクアスクーターを掴むクウェンサー達が海中を進む中も、『ディープオプティカル』による砲撃は続いていた。もちろんそれは、タングステンのプラントを破壊するためのものだ。

『ヤベエ!!　爆乳の絶叫が止まらねえんだけど！　オールドニックの死体は回収できねえしプラントには攻撃されるしで倍率鰻上りじゃねえの!?』

『魚の餌になるか美人に踏まれるかなら俺はそれでも後者を選ぶよ！　だからひとまず生き残ろうヘイヴィア!!』

元々、高速移動が不得手で『巨大なレーザーで確実に決める』戦術を取る『ディープオプティカル』が、お姫様の操る『ベイビーマグナム』を片手間に扱いながらプラントへ攻撃を仕掛けているのだ。

これまでの二機の戦闘、どちらが優勢だったかは明らかだ。

主砲の直撃こそ受けていないものの、間一髪のところを避け続ける『ベイビーマグナム』は余波のようなものにさらされて少しずつ損傷を蓄積させていっているのだろう。それが、『ディープオプティカル』にあそこまでの余裕を与えるほどに達している。

しかし、

『……おかしいぜ。連中、制御施設のある巨大フロートばかりを攻撃して、大多数を占める「枠」の方には一切砲を向けやしねえ』

『施設が運用できなくなればそれで良いと考えているんだろ。ついでにフィルターを回収してタングステンもいただいていく。いかにも「資本企業」らしいやり方じゃないか』

何にしても、民間の作業員や、彼らを海上の船舶へと誘導しようとしている別動隊の他メンバーが標的にされないのは、不幸中の幸いだったかもしれない。

とはいえ、悠長にはしていられない。

『どっちみち、この状況でお姫様をやられれば俺達の辿る道は一つだ。部隊の他の連中ならともかく、俺とヘイヴィアについては「殺される理由」がある訳だしな』

当然、それはロワイヨーテ方面での一戦の事である。

ヘイヴィアはうんざりした調子で、

『やるしかねえのは分かるんだけどよ、あの怪物相手にどう立ち向かう？』

『海上戦闘特化型で、エアクッション式の推進装置。レーザービーム主体の兵装。……だったら、いくつかの「起点」はある』

クウェンサーはプログラム制御で潜水スーツ内の酸素を調整して維持される浮力に身を預けながら、

『空気の力で機体を浮かばせるエアクッション系の推進装置は、機体のフロートと海面の状況でバランスが大きく左右される』

『そりゃ、広い平面と平面で空気を挟んだ方が安定するだろうしな』

『そいつを崩せばバランスは失われる』

クウェンサーは言う。

『幸い、ここは硬い地面じゃなくて海面だ。やりようはある。どうにかして「ディープオプティカル」の足元にある海水をごっそり奪えれば、機体はひっくり返って沈んでくれるさ。……数年前に、海戦特化型の第二世代がフリークウェーブで海の藻屑になったって事件があったろ』

『そりゃ難しいぜ……』

ヘイヴィアは難色を示した。

『フリークウェーブは突発的に起こる、タンカーを沈めるほどの大波だ。詳しい発生条件が分からねえから予測不能。確かに船舶にとっちゃ死神みてえなもんだが……「詳しい発生条件」が把握できてねえもんを、どうやって俺らで再現する？』

『もののたとえだよ。……大体、「ディープオプティカル」は機体側面のレーザービーム照射装置で空気を爆発させて、起き上がりこぼしみたいにリカバリーするって話だろ』

『……他の「起点」は？』

『あの高出力のレーザービーム。ロワイヨーテ方面でも間接的にお世話になった主砲だよ。都合八門分ものエネルギーを一ヶ所にまとめて発射しているんだ。エネルギーの制御を誤れば、勝手に吹き飛んでくれるんじゃないか？』

『あの主砲に張り付くのか？』

ヘイヴィアは海中で肩をすくめた。

『オブジェクトの中では比較的遅い方だって言ったって、それでも時速二〇〇キロは超えているんだぜ。あんなもんに掴まろうとしたら、俺らの両腕の方がなくなっちまうよ』

『遠くから干渉する事は？』

『主砲の砲口に対戦車ミサイルをホールインワンさせたって無理だろうな』

『プログラム的な干渉』

『できてりゃ電子シミュレート部門の連中は勲章だらけだぜ』

クウェンサーはわずかに黙った。

基本的に消極的意見の多いヘイヴィアだが、彼の長所は（自分が助かるために）状況を冷静に観察している事だ。クウェンサーは積極的意見が多いが、反面、勝算を求めるあまりリスクが見えなくなる短所がある。

クウェンサーはそういった戦友の特徴に、素直に感謝していた。性格の特徴というのは、自覚していても直せないから特徴と言うのである。

一度思考にブレーキをかけた上で、改めてクウェンサーは言う。

『……なら、最後の一つに頼るしかないか』

『あん？』

『その前に確認したいんだけど、オールドニックは死ぬ直前に液化プリズムとかレーザー振動検知なんて名前を出していたんだな』

『そうだよ。何だったか。八本のレーザーを束ねるために使うのが液化プリズムで、レーザー振動検知は防御用の何かだったっけ？』

『……そうか』

クウェンサーは少し考え、

『だったら勝機はあるかもしれない。どうにかして、あれに張り付く方法を考える』

『張り付いてどうすんだ!?』

ヘイヴィアは目を剝いた。

『仮にオブジェクトの球体状本体をよじ登ったって、操縦士エリートの入ってるコックピットのハッチが開く訳じゃねえ。俺らの持ってるチンケな銃や爆薬じゃ、主砲に傷をつける事だってできやしねえ!!　そういう風に設計されてんだよ、あのオブジェクトって怪物は!!』

『……レーザー系に特化した「ディープオプティカル」は、多分単純な装甲の厚さだけじゃ実戦レベルの防御水準を維持できない。ただでさえデリケートなレーザービームを、八本も束ねているんだからな。それだけ繊細さも山積みになる。トランプのピラミッドの高さを増していくようなものか』

『だったら何だよ!?』

『そこを利用する』

クウェンサーは水中で携帯端末を取り出した。

『「ディープオプティカル」関連の情報はロワイヨーテ方面の整備基地を襲う時にさんざん盗聴しただろ。あの時のデータにいくつか使えそうなのが混じってるんだ。それを利用するためには、まず「ディープオプティカル」に張り付かないと』

言いながら、クウェンサーはヘイヴィアに片手を差し出した。

『ナイフを貸せよ、ヘイヴィア。俺の持っているサバイバルキットのチャチな調理ナイフじゃ駄目だ。お前の持ってる、無駄にデカい戦闘用のナイフがいる』

『こんな刃物で何をするってんだ!?』

『ロープの代わりになる物を手に入れる……タングステン採取用のフィルターさ。長さは数十メートル、よじって使えば強度も問題ない』

『マジかよ……。あの時速二〇〇キロオーバーで海上を走り回るオブジェクトにロープを引っ掛けてよじ登ろうなんて本気で考えてんのか？　水上スキーの失敗シーンより無様な事になるのがオチだぜ!!　仮に張り付けたとしても、「ディープオプティカル」が大きく旋回しただけで振り落とされちまう!!　とてもじゃねえが、ロッククライミングなんてできる状況じゃねえぞ!!』

『誰もそんな事は言ってない』

クウェンサーは情報確認を終えた携帯端末をしまい、代わりに無線機を取り出した。

『エレベーターで楽をしよう』

12

高速で動き回る『ベイビーマグナム』と、低速ながら各種砲撃をいなし、ブラインド兵器で

時間差を稼ぐ『ディープオプティカル』は今も互いに凄まじい砲撃を繰り広げていた。

と、そこで『ベイビーマグナム』の動きに変化があった。

七本の主砲アームは全て下位安定式プラズマ砲を選択していたが、その内の一本だけをリボルバーのように回転させ、コイルガンに変更したのだ。

多くの下位安定式プラズマ砲に紛れるように、コイルガンの巨大な金属砲弾を発射する。

狙いは『ディープオプティカル』そのものではない。どうせレーザーパリーに弾かれるのがオチだ。

よって、お姫様は『ディープオプティカル』の足元の海面を狙った。数十メートル規模のクレーターが生じ、並というより爆風に近い莫大な飛沫が空中を白く染める。

エアクッションの空気の力で浮いているとはいえ、『ディープオプティカル』は海面の状況に大きく姿勢を左右される。

立て続けに放たれた金属砲弾によって、『ディープオプティカル』は危うく倒れかけた。

しかし持ち直す。

機体側面から大量のレーザーを発射し、球体状本体の浮かび上がった側の空気を爆発的に膨張させて、上から押さえつける。その勢いを利用し、ほぼ八〇度まで傾いていた機体を半ば強引に起き上がらせる。

『ディープオプティカル』側はどう判断しただろうか

姿勢を崩す事で、回避速度をさらに鈍らせようという狙い。
オブジェクトそのものを大きく揺らがせる事で、精密機器の塊である『ディープオプティカル』内部に悪影響を及ぼそうという狙い
向こうも色々考えているだろう。
だがいずれも外れ。
お姫様が無線によって指示されたのは……。

13

クウェンサーとヘイヴィアの二人は、『ディープオプティカル』の球体状本体のほぼ頂点に立っていた。U字に曲げたフィルターの布を、比較的小さな砲身に引っ掛け、それをロープ代わりに使って体を支えているのだ。
「くそっ!!　表面が濡れているせいで滑りやがる！　この距離で落ちたら、下が海でも危ねえぞ!!」
「滑るだけの海水があっただけでも幸運に感謝するべきだよ！　レーザーの輻射熱が残っていたら、今頃人間松明になっていたかもしれないんだし!!」
二人は、馬鹿正直に球体状本体をよじ登ったのではない

そんな時間はなかっただろうし、仮に慎重に上ったとしても、磁気系のセンサーなどで察知されれば即座に振り落とされていたはずだ。

一気にショートカットした方法は単純。

「しかしまぁ、『ディープオプティカル』がバランスを崩した瞬間に頂点近辺の砲にフィルターを巻きつけようとするとはな。相変わらず、テメェの発想は人命を担保にしやがるな!!」

「おかげで『ディープオプティカル』が起き上がる動作を利用して、一気によじ登れただろ」

お姫様に揺さぶられた『ディープオプティカル』は八〇度……ほぼ海面に横転しかかっていた。海面から球体状本体までの距離は二〇メートル強。フィルターにおもりをつければ投げて届かせられる。

「それより主砲へ急ごう！　これまで、『ディープオプティカル』は大きく揺さぶられた直後は回避と攪乱に徹して、数分間は主砲を使わなかった。でも自動スキャンが終われば即座に戦闘に戻るはずだ。こんな所で使われたら、輻射熱で焼き焦がされるぞ!!」

「具体的にはどうすんだ!?　主砲だって分厚い装甲で覆われているんだぜ。俺らのライフルや爆薬じゃ傷をつける事もできねえよ!!」

叫びながらも、ヘイヴィアはクウェンサーの後を追う。

クウェンサーが張り付いたのは、右手側上方にある、主砲の台座の部分だ。彼は背負っていたバックパックからプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出すと、小さく千切って台

座の側面へ貼り付けていく。その作業が終わると、今度は電気信管を突き刺していった。

ヘイヴィアは額に手を当てた。

「それでオブジェクトの装甲が抜ければ重も苦労はしねえよ!!」

「ヘイヴィアも手伝え!!」

無視してクウェンサーは叫び返し、ヘイヴィアへ爆薬のパッケージを放り投げる。

「時間がない!!　あと二〇個！　俺がやってるのと同じように設置するんだ!!」

「クソッたれ。これで何とかなる訳ねえだろうがよ!!」

悪態をつきながらも、ヘイヴィアはクウェンサーの隣に並ぶ。

クウェンサーは作業を続けながらこう言った。

「爆薬は小さくだ。大きくし過ぎるなよ　それじゃ意味がない」

「あん？　少しでもデカくした方が装甲にダメージは伝わるんじゃねえのか？」

「表面を破るのが目的じゃない」

ギチギチギチギチ、と金属の軋むような音が聞こえてきた。

『ディープオプティカル』の主砲が、再び照準の微調整を開始したのだ。

「時間だぜクウェンサー!!　もう逃げねえと輻射熱でやられちまう!!」

「あと七個!!」

「黒焦げになっちまうよ!!」

「三個……二個……よし終わった!!」

立ち上がると、クウェンサーは迷わず球体状本体の側面部分……つまり海へと繋がる急斜面へ走り出した。

泡を食ったのはヘイヴィアだ。

「おい、嘘だろ!?　もっと穏便に脱出する方法ってねえのかよ!?」

「急げ!!　主砲を発射されたら幼妻の手料理より悲惨な焼き加減になるぞ!!」

クウェンサーが先に飛ぶのを見て、ヘイヴィアは半ば泣き出しそうになりながらその後を追う。

球体状本体の斜面は徐々に急になっていき、最後には足をもつれさせた。バランスを崩しつつも、かろうじて自分の足で最後の一歩を踏み出し、海へと向かう。

三〇メートル以上の高度。

数秒の浮遊感が、胃袋に嫌な重圧を与えてくる。

直後に激突した海面は、全力疾走でベニヤ板へ突っ込むよりも強力な衝撃をヘイヴィアにお見舞いした。

危うく海中で気絶しそうになったが、目を潰すような真っ白な閃光で、強引に意識を呼び戻される。

『ディープオプティカル』の主砲だ。

「がばっ!!　げほげほ!!」

『ヘイヴィア、酸素ボンベを背負っているだろう!!　パニクッてないでそいつを使え!!』

クウェンサーに無線で指示を出され、しかしヘイヴィアは反応できない。すると、すぐ近くからクウェンサーの手が伸びてきて、ボンベのマウスピースを口元に運ばれた。

ようやく酸素と平静さを取り戻したヘイヴィアはクウェンサーの首に両手を回し、

『死ねっ!!　これだからテメェの悪ふざけには付き合いたくねえんだよ!!』

『やめろ男が絡み付くなまだパニクッてんのかヘイヴィア!!　こっちはやる事があるんだ！あのまま「ディープオプティカル」を放置してたらお姫様がやられる!!』

『……あんな小さな爆薬並べた程度で何とかなるのか？』

ヘイヴィアはようやくクウェンサーの首から両手を離し、そんな事を尋ねた。

クウェンサーは無線機を取り出しながら、

『ロワイヨーテ方面でオブジェクトの情報は集めたって言っただろ。レーザー技術の塊である「ディープオプティカル」は驚異的な火力を持つけど、同時に内部は精密機器の塊だ。外部からの衝撃はもちろん、高速移動時に生まれるGにすら気を配らなくちゃいけない状況にあるはずなんだ』

『それが？』

『ただ装甲を分厚くするだけじゃ、そういった精密機器を守りきれないはずなんだよ』

クウェンサーの親指の動きに合わせて、水中にまで何度も爆発音が響く

彼らの通信や起こしている爆発などは、『ベイビーマグナム』に乗り込んでいるお姫様も把握していた。

あるいは、仕掛けた張本人である馬鹿二人よりも正確な数値を。

あの程度の爆発では、オブジェクトの装甲に傷をつける事はできない。

というより、並の戦車を吹き飛ばす事もできないだろう。

（……どういうねらい？　あれでおわりだとしたらまずい。付き合った分だけこっちは不利になっている!!）

『だから電子的に衝撃を吸収する構造が取り付けられている。装甲は大きく中空になっていて、外側の層の衝撃をレーザー振動検知で感知する。そうしたら、装甲内を走る衝撃の波を相殺する形で、内側の装甲のクッションを振動させる。無数にある柱の部分からも衝撃は伝わるが、レーザーの方が速いしな。これで許容量以上の衝撃をカットする事で、精密機器を守っているのさ』

『それって、ようはただの分厚い壁より面倒な装甲って訳だろ。だったら、より一層強力な爆発力がなけりゃダメージは通らねえじゃねえか』

『そうでもない』

意味のない爆破を続けながら、クウェンサーは即答で否定した。

お姫様は『ベイビーマグナム』を小刻みに移動させながら眉をひそめる。

彼の狙いはまだ読めない。

『レーザー振動検知は外部からの振動を感知するためのものだが、その精度を高めるためには余計な動作はしない方が好ましい。つまり、微細な振動にいちいち反応していたら、本当に対処しなくちゃならない巨大な衝撃に対する反応が遅れるリスクが発生する。精密機器に悪影響を及ぼさないレベルの衝撃なら、精度を上げるために敢えて見逃されるって訳さ』

レーザー通過時の高温で溶液がかき乱されるトラブルを防ぐため、おそらく急速冷却や液化プリズム自体をカートリッジ化するなどの策も取られている。だがそうした『予想』の外から振動が伝わったら……？

『……爆薬でわざと小さな衝撃を通す。それを連続的に叩き込む事で、少しずつ、ミリの一〇〇分の一にも満たない範囲で精密機器をズラしていく』

『そんな職人技みてえなズレで何が変わるってんだ』

『変わるのさ。主砲の光学エネルギーをまとめているのは液化プリズム。……界面電気化学的に容器内の溶液濃度を意図的に片寄らせて光を曲げているんだ。そいつに振動を与え続ければ、わざと狂わせていた濃度のバランスが再び均一になってしまう。つまり』

通る。

小さな小さな衝撃が。

それがもたらす効果は以下の通りである

直後だった。

純白の閃光に包まれ、『ディープオプティカル』の主砲が消滅した。

その時。

『ディープオプティカル』の主砲内部では、八本の炭酸ガスレーザーのエネルギーが、大元となる巨大な主砲内部へと集束されようとしていた。

レーザーとは、励起状態にある電子へ外部から光を浴びせる事で発生する。その光が強ければ強いほど、発生するレーザーもより強力なものになっていく。

言ってみれば、『ディープオプティカル』は並の主砲八本分の光学エネルギーを注ぎ込んで、大量の誘導放出を実現するレーザービーム兵器だったのだ。

その八本分のエネルギーを集めるために使われていたのは、ただの鏡ではない。

特殊な溶液を界面電気化学的に制御する事で透明な容器内の濃度を意図的に歪め、光の向きを飴細工のように曲げる液化プリズムと呼ばれる装置だった。

濃度の変化によって光を自在に曲げる液化プリズムだが、当然、透明な容器内の濃度に『むら』がなければ正常には機能しない。

その濃度に偏りがある透明な容器に、一定の衝撃を常に与え続けるとどうなるか。

答えは簡単。

容器の中身が揺さぶられ、『むら』のあるはずの溶液が再び均一化されてしまう。

そして、その『むら』がなくなれば、光の屈折も失われる。

本来であれば曲げなければならないところを素通りしてしまう。

……『ディープオプティカル』の主砲の内壁を焼き貫く形で、だ。

その爆発の光は、閉じた瞼も無視してクウェンサー達の眼球へ襲いかかってきた。

『ぐァあああああああああああああああああああああああああ!?』

思わず叫び声を発するクウェンサーだったが、しかし同時に安堵もしていた。こちらの作戦は無事に完了した。『ディープオプティカル』の主砲は吹き飛ばされたし、そのエネルギーはオブジェクト全体に深刻なダメージを与えるだろう。仮にオブジェクトそのものが破壊されなかったとしても、主砲を失った『ディープオプティカル』はお姫様の敵ではない。

だが。

『なん、だ……?』

ヘイヴィアの疑問。

その時、『ディープオプティカル』は大きく傾いていた　主砲が爆発したエネルギーに押さ

れる形で横転しかかっていたのだ。主砲は内側から破裂するどころか完全に溶けてしまっていて、さらに主砲があった近辺の球体状装甲もめくれ上がっていた。

戦闘の続行は不可能に思える。

それどころか、このダメージではレーザーを使って起き上がる事すらできないかもしれない。

事実、『ディープオプティカル』はリカバリーのための行動を起こさなかった。

そのままぐるりと回転した。

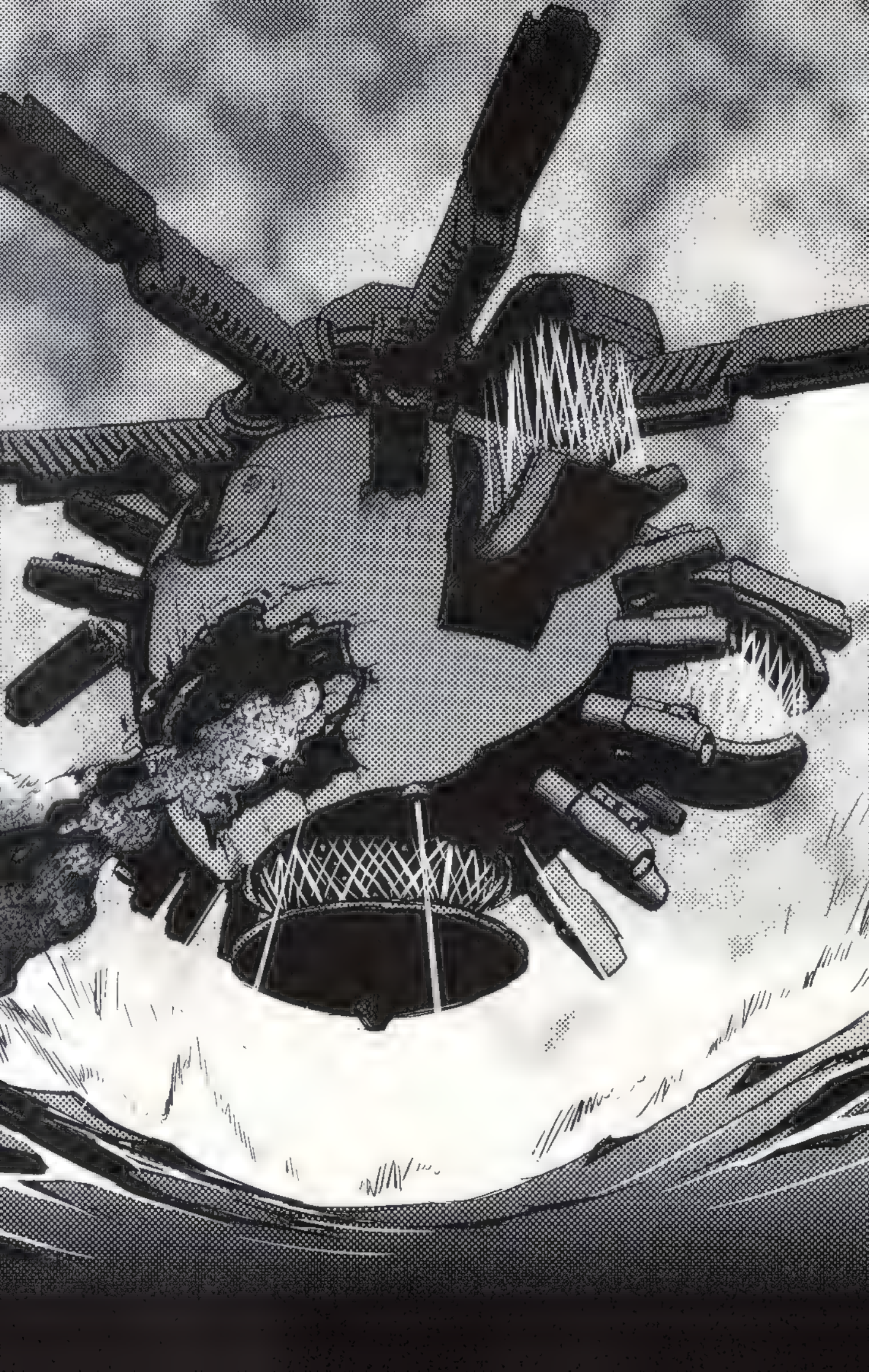
そう。

まるで、モードを切り替えるように。

『な、ん……!?』

そのシルエットが変わる。球体後部にあった二つの大きなパーツが開き、湾曲した翼のように大きく広がる。機体を水面で浮かばせているのはこれまでのエアクッションではなく、純粋なレーザーの力だった。海面と機体下部の間でレーザーを乱反射させ、空気を爆発的に膨張させているのだ。これまで『脚』として機能していた部分の先端が展開し、レーザー兵器用のレンズが顔を覗かせる。

ヘイヴィアが呆然とした調子で叫んだ。



『変形、だと……!!　馬鹿にしやがって、中の動力炉やコックピットは地球ゴマみてえになってやがるのか!?』

『くそ』

ようやく決着をつけたと思っていた。

これで整備基地ベースゾーンに帰って、バカンスの続きを楽しめると思っていた。

だが、

『……「ディープオプティカル」を本気にさせてしまったって言うのかよ、ちくしょう!!』

ようやくの折り返し地点。

『資本企業』の第二世代……『ディープオプティカル』の反撃が始まる。

14

クウェンサーやヘイヴィアが、超大型兵器オブジェクトと戦えるのは、敵側から戦力外として無視されている部分が大きい。

仮に相手が最初から二人を殺すためだけに動き、最優先の撃破目標として照準の中心に据えられたら、生身の歩兵などに勝機はない。

逃げようと思っても回避できるものではない。遮蔽物など何の効果も発揮しない。

そして。

変形で難を逃れたとはいえ、元々あった主砲を丸ごと破壊された『ディープオプティカル』側が、クウェンサー達を放置するとは思えない。

『くそっ、来やがる……。あの怪物が来やがるぜクウェンサー!!』

ヘイヴィアが叫んだが、それで何かが変化する訳ではない。

新たな主砲のレーザービーム砲がこちらを向く。何のためらいも容赦もなく、オレンジ色の閃光がクウェンサー達へ襲いかかる。

その直前で、お姫様の『ベイビーマグナム』が割り込んだ。

『クウェンサー!!』

『俺の心配もしやがれよクソッたれが!!』

ヘイヴィアが泣き言を漏らすが、事態はそれどころではない。

『ディープオプティカル』の印象は一変していた。

ボバッ!!!!!!　という爆音と共に、左右へ大きくスライドしながら立て続けにレーザービームを『ベイビーマグナム』へと叩きつけていく。速度のレベルが違っていた。これまでは時速二〇〇キロ前後しか出さなかった『ディープオプティカル』だが、今はその四・五倍以上の速度で『ベイビーマグナム』を翻弄していた。現役の第二世代とでも互角に渡り合う、あの『ベイビーマグナム』をだ。

【ディープオプティカル(変形後)】
DEEP OPTICAL (TRANSFORMED)

全長… 100メートル(主砲最大展開時)

最高速度… 時速730キロ

装甲… 2センチ×33層(溶接など不純物含む)+
レーザー振動検知式相殺装置

用途… 対オブジェクト用駆逐兵器

分類… 海上戦闘特化型(第二世代)

運用者… 資本企業「クライアントセキュリティ社」

仕様… 完全レーザービーム射出型推進システム

主砲… YAGレーザー×8

副砲… レーザービームなど

コードネーム… ディープオプティカル(様々な光学技術の塊である事から)

メインカラーリング… アッシュブルー

DEEP OPTICAL (TRANSFORMED)

『くそっ!!　何がどうなってやがるんだ!?』

『「ディープオプティカル」の後ろに広がっているC字の翼、あれでレーザーを乱反射させているんだ。作為的に空気を爆発させて瞬発力を得ている。ロケットブースターどころの加速度じゃないぞ!!』

『レーザーは精密機器だから急激な運動は避けているんじゃねえのかよ!?』

『メインのシステムを自分でぶっ壊してでもこの局面を切り抜けようとしてるんだろ！　おそらく今回のレーザーはＹＡＧを主体にした固体レーザーだ。世界で一番最初に開発された、つまり仕組みが単純化されている光学兵器だよ』

『固体レーザーって事は、威力は高いが照射時間は稼げねえって訳か？』

『その証拠に、お姫様の装甲で何度か耐えられる程度の熱しか出てない。さっきまで空気中の塵や水分が焼かれる時は真っ白な閃光が出ていたけど、それもオレンジ色に落ちているだろ』

クウェンサーは冷静に分析しながら、

『おそらく短い照射時間を有効に使うため、ほとんど機関砲みたいな感覚で連射しているんだろうな。同じ個所に連続で浴びればあっという間に装甲を削り取られるかもしれないけど、逆に当たる場所を小刻みに変えていけばしばらくは耐えられるぞ』

『っつっても、お姫様が確実に削られるのは間違いねえぞ!!　盾がなくなりゃ俺らがそのままぶち抜かれちまう!!』

『……』

クウェンサーは少し考え、それからプラスチック爆弾を取り出した。

『お姫様。今の「ディープオプティカル」相手にどれぐらい時間を稼げる？』

『かせげるなんてカッコいいこと言ってるよゆうがないていどには』

『一〇分で良い』

減らず口に若干の安堵をしながらクウェンサーは言う。

『それで何とかしてやる』

15

一番初めに異常に気づいたのは、『ベイビーマグナム』や戦場全域をモニターしていたフローレイティア＝カピストラーノだった。

「なん、だ？」

呟いたのも無理はない。

いきなり、プラントの『枠』が集中する一角で爆発があったのだ。それは平面的に広がるものではない。縦。いくつかの『枠』を粉々に吹き飛ばし、数十メートル単位の大きな水柱が垂直に上っていく。

「爆発するようなものはあるの？」

『いっ、いえ！　プラントの大半は海水からタングステンをこし取るためのフィルターです。帯状のフィルターの巻き取りにはガスタービンを使いますが、別口のマシンですから普段は外されているはずです。爆発するようなものは何も……』

電子シミュレート部門の報告を受けている間にも、さらに二回目、三回目の爆発が起こされる。

「海中からの爆発……」

『「正統王国」出資とはいえ、基本的には「空白地帯」の民間施設です。機雷のようなものを周辺海域で敷設しているという話も聞きません。こちらでは敵側のＵＵＶ、魚型ロボットなどの可能性を考慮し、衛星で走査を行っています！』

そうした意見を聞きながら、しかし嫌な予感がしたフローレイティアはノートパソコンを操作し、いくつかのウィンドウを表示させた。

（『正統王国』軍で正式採用した兵装の試射レポートリスト……）

彼女が呼び出したのは、各種爆薬のテスト表だった。

様々な環境下、形状、条件などで起爆し、爆風や破片、熱などの広がりを確かめたデータだった。

（プラスチック爆弾の『ハンドアックス』……海中で使用した場合の爆風の逃げ方は……）

細かく検索条件を設定すると、フローレイティアの前に小難しい数値と分かりやすい爆風の広がり方の図が表示された。爆薬の量や水深などを入力する事で、リアルタイムで変動させる事もできるらしい。

それを見たフローレイティアは、思わず立ちくらみがした。

今さっき見た水柱とほぼ同じだったからだ。

「あのガキども……どういうつもりで防衛対象のプラントを爆破していやがるのよ!!」

16

安全な距離まで離れてからプラスチック爆弾を起爆したクウェンサーは、傍らの海面でライフルを構えているヘイヴィアに話しかける。

「水柱の高さは!?」

「一回目は二七・一。三回目は三〇・五だ！　まぁギリギリって感じじゃねえか!?　そっちは!?」

「順当に流れているよ。後はお姫様だな」

「……なぁクウェンサー、さっきっから爆乳の金切り声で無線機が埋め尽くされてんだけどよ。これはなんて応答したら良いと思う?」

「まだチャンネル繋げてたの？　俺もう拒否っちゃったよ」

「テメェのその度胸には時々本気で畏怖を感じるぜ……」

そんな事を言い合いながら、クウェンサー達は次の行動に移る。

こうしている今も、『ディープオプティカル』はクウェンサー達の位置を摑んで砲撃を実行しようとし、『ベイビーマグナム』はその盾となるために攻撃にさらされ続けている。

お姫様はその天才的（になるよう人工的に磨かれた）なセンスを発揮し、短期照射されるレーザーを絶えず別の面で受けるように努力しているようだったが、すでに球体状本体の一面全体がオレンジ色に輝き始めてしまっている。

時間はない。

『ヘイヴィアは下に潜ってフィルターを垂直にするためのおもりを外して来い！　俺はナイフでフィルターを切断させる!!』

『チッ、潜水病とかにならねえだろうな!!』

そうして立て続けに切断されたフィルターの布は、海面近くを漂っていく。大型のナイフで何十枚と一気に切り裂いていくため、それはあっという間に周囲の海全体へと広がっていく。

クウェンサーはお姫様に無線で連絡を入れる。

『今、タングステンがびっしりこびりついたフィルターをばら撒いてる。そいつの真上は通るなよ!!』

『フィルターでどうやって「ディープオプティカル」をふきとばすの？』

『決まってる。……フィルターのギラギラした表面で、レーザーを乱反射させるのさ』

しかし、『ディープオプティカル』にも様々なセンサーが搭載されている。

海面近くを漂う大量のフィルターに気づいたのだろう。

ギャッギュ!!!!!!　と小刻みかつ高速な動きでフィルターを回避するように移動する。そう、レーザーを使って空気を爆発させる推進機関を利用して。

お姫様は呻くように言った。

『だめ、向こうにも気づかれてる!!　「ディープオプティカル」をうかばせているレーザーにはかんしょうできない!!』

『そっちじゃない』

クウェンサーは言いながら、無線機のスイッチへ手を伸ばした。

そう。

フィルターの布に取り付けたプラスチック爆弾『ハンドアックス』を起爆させるための電気信管へ信号を送るために。

『狙いは急旋回を行うための巨大な翼だ!!』

叫ぶと同時に、複数のプラスチック爆弾が同時に爆発した。水の爆発は全方向に広がるのではなく、真上へ大きく水柱を巻き上げさせる。

砕けてバラバラになったフィルターの布の残骸を伴いながら。

それらは『ディープオプティカル』の球体状本体の後部に広がっていたC字の翼の間にも入り込んだ。そこには強力なレーザーが絶えず反射を繰り返し、空気を爆発的に膨張させているはずだった。

割り込むように入り込んだタングステンは安定したレーザーの反射をかき乱し、その急旋回の角度を急激に狂わせる。しかも、フィルターを機雷と勘違いした『ディープオプティカル』は下手にフィルターを踏まないように、小刻みなカーブの連続でそれらを回避しようとしていた。

急旋回の途中でバランスが大きく崩れる。

その機体が大きく斜めに傾く。

今まではレーザーを放射する事で空気を爆発させて起き上がる機能もあったが、変形した後ではそれも使えない。

となれば、訪れる結末は一つである。

沈む。

起き上がる事も、一八〇度の変形も行えずに。

失敗した水上スキーのように派手な飛沫を撒き散らす『ディープオプティカル』は、それでも何とか体勢を復帰させようとした。

だがそこへ最後の一撃が向かう。

第一世代。

『正統王国』の『ベイビーマグナム』が放つ、下位安定式プラズマ砲が。

そして起爆した。

純白の閃光と共に、海上に衝撃が走り抜ける。

『ディープオプティカル』が派手に海上を滑ったせいか、その後に巨大な爆発を起こしたせいか。その周辺には凄まじい波が発生した。だが海の表面だけではない。海中に潜っていたクウエンサーやヘイヴィアも、まるでかき回されるグラスの中の氷のように翻弄される。

『げぼっ!!　がはごほっ!!』

酸素ボンベで呼吸は安定しているはずだが、上下の感覚が急速に失われた事で、呼吸の仕方そのものを忘れそうになるほどの混乱が生じた。

『終わった、か？』

『「資本企業」からは未だに「しろはた」のしんごうはかくにんできず。……どうやらまだあ

がきたいみたいね』

『救命艇でも沈めてやれよ。ここで手を差し伸べないと水圧と酸素不足の恐怖に陥るぞって事を、言葉じゃなくて目の前でチラつかせれば考えは変わるさ』

クウェンサーは適当に言いながら、光の溢れる海上を目指す。

暗い底に留まる理由など、何一つない。

終章

『正統王国』のモーターボートに拾われた、ずぶ濡れのクウェンサーとヘイヴィア。

今回の件について互いに情報交換を行うと、ヘイヴィアの方が眉をひそめた。

「……でもよ、『ディープオプティカル』を操っていた『資本企業』の部隊の連中の狙いってのは、オセアニアの食糧事情への介入だったんだろ？」

「緑と砂漠のバランスが不安定なオセアニアじゃ、放牧は禁止されているからな。食肉関係のほとんどを『資本企業』からの輸入に頼ってる。この金づるを、『情報同盟』製の人工牧場に引っかき回されたくなかったって訳だ」

だが実際には、サイクロンなどの自然災害で農場に大規模な被害が出て、空路や海路などが使い物にならなくなると、深刻な食糧難が起こるリスクが存在した。最大で五〇万人強が飢餓で死ぬとまでシミュレートされていたのだ。

「それって解決したのかよ？」

ヘイヴィアが疑問に思っているのはそこのようだった。

「確かに『ディープオプティカル』は俺らの手で粉々に吹き飛ばした。でも、それで『勢力』そのものがなくなる訳じゃねえんだぜ。あの部隊やそのバックボーンが残っている限り、食糧事情への介入は続くんじゃねえのか？」

「そこが難しい」

クウェンサーは率直に認めた。

「でも、『資本企業』全体のプロジェクトなのだとすれば、複数のオブジェクトが増援に来たはずだとは思わないか？　戦場となった海域のすぐ近くはオセアニアで、多国籍名義で大量のオブジェクトが駐留していた。もちろん『資本企業』の機体もな。でも、実際に出張ってきたのは『ディープオプティカル』だけだった」

「つまり？」

「『ディープオプティカル』とその所属部隊。これだけを叩けば、今回のオセアニア食糧事情介入の問題は全部終わる」

「どうやって？　まさか、今から俺らにこの足で『資本企業』の整備基地ベースゾーンを襲えってのか」

「……できると思うか」

「二つの意味で難しい」

ヘイヴィアは簡単に指摘する。

「まず、オブジェクトを失ったとはいえ、向こうは大隊だ。一〇〇〇人規模の兵士が詰めている。いくら俺らがスーパーヒーローでも、二人でケリをつけるのはあまりにも無謀」

さらに、と彼は付け足し、

「所属を考えろ。俺らはオブジェクトを持ってる勝ち組で、『資本企業』はオブジェクトを破壊された負け組だ。この状況でさらに攻撃を仕掛けりゃ、国際社会は『容赦のない追い討ち。慈悲のない虐殺』と判断する。クリーンな戦争を支持したい大多数を敵に回す構図になっちまう訳だな」

「でも、何事にも例外はある」

「？」

「たとえどれほどの面倒事があっても、絶対にターゲットを暗殺するために存在する特殊部隊がある。それは軍事系ではなく警察系だ。幸い、俺達はそいつらに出会っている。連絡方法も分かっている。『資本企業』はロイベルツ＝オールドニックと関わって、利権を貪ろうとしていた。それはヤツらにとって、十分なターゲットに入るんじゃないかな？」

「『信心組織』の……ヴァルキリエ？　ヤツらが協力するか？　むしろ規約違反で襲われそうだけどな」

「地元の漁師と取引したろ。運が良ければ魚の腹からオールドニックのＤＮＡが出てくるさ」

「……漁師スゲー嫌がってたけどな」

「繋がってくれよ」

クウェンサーは小型の無線機の周波数を合わせながら呟く。

例の海域では一度は通信を拒否されたが、向こうも向こうでこの周波数自体は知っているはずだ。

「なあクウェンサー。そんな簡単に『信心組織』が動くと思うかよ？」

「『資本企業』の食糧事情介入が行われれば、イレギュラーなサイクロン時に五〇万人以上が飢える想定になっていた。……その中にはオセアニア特有の宗教部族の人達も含まれているって言えば無下にはできないだろ」

と。

カッコ良く決めてしまったクウェンサーとヘイヴィアだったが、情報を改めて整理してみると、ちょっとした問題が浮上しているのが分かる。

ターゲットのロイベルツ＝オールドニックは死体を持ち帰る事はできず、『正統王国』出資の海洋貴金属採掘プラントには被害が生じ、『ディープオプティカル』を沈めるために『ベイビーマグナム』を盾に使って大損害を発生させた。

魚の腹からオールドニックの肉片が出てくる保証もない。

「……や、ヤベぇ。今回はプラマイゼロにできる要素が一個もねえ!!　爆乳の説教に一ミリのオアシスもありそうにねえぞ!!」

「いつもいつでも都合良くプライマイゼロにできる事なんてないって訳なのさ。……ただしそれはつまりプラスで終わる回があっても良いって事だ。俺は絶対諦めないからな」

フローレイティアの上官室……という名の処刑ルームへの道すがら、クウェンサーとヘイヴィアはそんな事を言い合う。

「それにしても、プラチナもタングステンも『電子数学の財宝』も肉牛も人工牧場も……片っ端から資源、資源、資源、資源だよ。まったく嫌になっちゃうよね」

「かくいう俺らも『人的資源』だがな」

ヘイヴィアは笑いながら言う。

「少子高齢化の進んでいる『島国』なんかじゃ、もはや子供は高度な成長資源なんだそうだ。ワインや美術品と同じで、良く寝かせると値が上がるって訳だ。早い内から会社直属の名門校で囲って、英才教育を施して『少しでも有用な人材』に育て上げてから親会社に貢献させる。ライバル企業の方は逆に『将来トップクラスになるであろう人材』を誘拐したり殺したりして『未来の会社』にダメージを与えるんだと」

「そんなに単位で区切って何が楽しいんだか」

「ニーズによるね」

ヘイヴィアは言う。

「木炭で鍋を煮る時代は終わった。だが浄水器に活性炭が使われ始めると、またもや『最先端技術』に逆戻りだぜ。資源なんて区切りに絶対性はない。石油がなくなるなくなるって言われながらも今日まで枯渇してねえのもそのためだ。……そもそも、『使われ方』が日々変動しちまってるから、絶対的な埋蔵量と相対的な価値は常に変わっていくもんなのさ」

「食糧も、それを食べる人間も？」

「使えると思えば何だって資源になる。それがこの貪欲な世界ってヤツだろ。……その内、兵士の命の値段も変動するかもしれねえぜ。『使われ方』の変化でな」

彼らはフローレイティアの士官室の前までやってきた。

慎重にノックし、ドアを開け、地獄のお説教タイムを覚悟するクウェンサーとヘイヴィア。

そんな二人に、我らが上官サマは開口一番こう告げた。

「……何でも良いが、自分という資源の価値を落とすなよ。これ以上暴落するようなら庇いきれない」

あとがき

順当に行っていれば四冊目でしょうか　複数の話を同時並行でやっているのでどれが先に来るかいまいち把握できていない状態ですが……。

鎌池和馬です。

水着回!!!!!　ではなく、今回はクリスマス辺りのお話です。

テーマは資源。一章の話も、見方によっては『クウェンサーやヘイヴィアという人的資源が強奪されたところから始まる話』とも受け取れるはずです。

食糧やレアアースなど、この作品世界ならではの獲得方法をいくつか用意してみました。

『電子数学の財宝』による人工プラチナ製造法は、似たような技術が実在しますので気になる方はチェックしてみてはいかがでしょう。

オブジェクトについては、今まで高速戦闘を基本とする機体ばかり出してきたので、高速移

動を行わないために必要な機能を片っ端から詰め込んだ第二世代を用意してみました。今回の『ディープオプティカル』は、一巻目に出てきた『トライコア』よりさらに鈍足です。……ただし最後にとんでもないどんでん返しが待つ事となりますが。

レーザー兵器は速度だけで言えば文句なしというか、あれに勝つには光速の壁を越えないといけないので、弱点をあれこれ追加しないと強力過ぎてフィクションの中で活躍させられないのがネックだなあと感じました。

レールガン同様、今後は『夢の技術』ではなく『普通に配備されそうな兵器の一つ』になりそうなので、お話を作る側としても対策のストックをいくつか用意する必要があるかもしれませんね。

イラストの凪良さんと担当の三木さんには感謝を。……相変わらず背景や小物が面倒臭い話だと思います。今回もお付き合いいただき、ありがとうございました。

そして読者の皆様にも感謝を。オブジェクトが出てこなかったり、一章丸々水着だったりと好き勝手できるのも皆様の応援があっての事だと思います。本当にありがとうございます。

それでは、今回はこの辺りでページを閉じていただいて。

この一冊が、何かしらの小さな糧（かて）となる事を願っています。

ヒロインも作品にとっては資源（しげん）の一つなのかも？

鎌池和馬（かまちかずま）

◉鎌池和馬著作リスト

「とある魔術の禁書目録（インデックス）」（電撃文庫）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）③」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）④」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑦」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑧」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑨」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑩」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）11」（同）

「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑫」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑬」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑭」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑮」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑯」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑰」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑱」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉑」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉒」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）ＳＳ」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）ＳＳ②」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）」（同）
「新約　とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）
「ヘヴィーオブジェクト」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　採用戦争」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒102 8584 東京都千代田区富士見1 8 19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「鎌池和馬先生」係
「凪良先生」係

■

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト　電子数学の財宝

鎌池和馬

発行　二〇一一年九月十日　初版発行

発行者　高野　潔
発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一〇二-八五八四 東京都千代田区富士見一-八-十九
電話〇三-五二一六-八二九九（編集）
http://asciimw.jp/

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七 東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）
印刷　株式会社暁印刷
製本　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書のコピー、スキャン、電子データ化等の無断複製は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。なお、代行業者等に依頼して本書のスキャン、電子データ化等を行うことは、私的使用の目的であっても認められておらず、著作権法違反です。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、株式会社アスキー・メディアワークス生産管理部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

© 2011 KAZUMA KAMACHI
Printed in Japan
ISBN978-4-04-870549-3 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-868069-1

超大型兵器オブジェクト。その操縦士、『エリート』。雪原の戦場に派遣留学したクウェンサーが出会ったのは、そんな素性を持つ奇妙な少女だった――。

か-12-21　1833

ヘヴィーオブジェクト　採用戦争

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-868594-8

宇宙開発技術採用を巡る戦争の最中。戦地派遣留学生のクウェンサーと、見習い軍人のヘイヴィアの次なる相手は、姿が見えない超巨大兵器、ステルス・オブジェクト!?

か-12-24　1954

ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-870051-1

巨大兵器オブジェクトが世界のバランスを支配する世界。不良兵士のクウェンサーとヘイヴィアは、今日もマイペースに戦場を駆ける。近未来アクション、懲りずに第三弾だ！

か-12-27　2032

ヘヴィーオブジェクト　電子数学の財宝

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-870549-3

ミニスカサンタ！　ツンプリなお姫様と爆乳フローレイティアさんのミニスカサンタっ……！　一体これが、今回のクウェンサーとヘイヴィアのどんな伏線に!?　近未来アクション！

か-12-29　2136

とある魔術の禁書目録（インデックス）

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2658-X

〝超能力〟をカリキュラムとする学園都市に〝魔術〟を司る一人の少女が空から降ってきた。『インデックス（禁書目録）』と名乗る彼女の正体とは……!?

か-12-1　0924

電撃文庫

とある魔術の禁書目録（インデックス）②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2701-2

学園都市「三沢塾」で一人の巫女が囚われの身となった。上条当麻は魔術師ステイルと嫌々手を組み、彼女を助けに行くことになるのだが……！　学園アクション第2弾！

か-12-2　0951

とある魔術の禁書目録（インデックス）③

鎌池和馬
イラスト　灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2785-3

補習帰りに、上条当麻は御坂美琴とその妹に出会う。御坂妹も姉同様とにかくヘンな奴で……。そんな普段通りの生活の中、学園都市の能力者が次々と殺されはじめる……。

か-12-3　0988

とある魔術の禁書目録（インデックス）④

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2858-2

海へバカンスに来た上条当麻が見たものは、インデックスが青髪ピアスで、神裂火織がステイルで、ステイルが海のオヤジで、御坂美琴が当麻の実妹で!?　全てはとある魔術から……！

か-12-4　1021

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3025-0

8月31日の学園都市。御坂美琴は、さわやか男子生徒に誘われた。一方通行（アクセラレータ）は、不思議な少女と出会った。上条当麻は、不幸な一日の始まりを感じた……。

か-12-5　1083

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2973-2

新学期初日。それは上条当麻が通う学校に転校生が来た日で、インデックスにはじめての「ともだち」ができた日で、学園都市に謎の魔術師が潜入した日だった……！

か-12-6　1113

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑦

鎌池和馬
イラスト　灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3205-9

伝説の魔術師クロウリーが記したとされる魔導書『法の書』と、その解読法を知るシスターが何者かにさらわれた。上条当麻は、〝不幸〟にもその救出戦に加わることに……。

か-12-7　1167

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑧

鎌池和馬
イラスト　灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3269-5

ここは学園都市屈指の名門女子校・常盤台中学。御坂美琴が体育の授業後、シャワーを浴びていると……。お姉様とあの殿方が交差するとき、白井黒子の物語が始まるのですの!?

か-12-8　1198

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑨

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3385-3

学園都市最大級行事「大覇星祭」。上条当麻や御坂美琴も参加するその大運動会の開催中に、謎の〝霊装〟を巡って、とある魔術師が学園都市に侵入した……!

か-12-9　1243

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑩

鎌池和馬
イラスト　灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3428-0

学園都市に、ひとつの波紋が広がった。『使徒十字(クローチェディピエトロ)』。そう呼ばれる存在が、上条当麻の大切な人たちの夢を、破壊していく！科学と魔術が交差するとき、物語は始まる！

か-12-10　1257

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑪

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3581-3

大覇星祭最終日。自分が〝不幸〟であることしか自慢できない男・上条当麻が、なんと大覇星祭「ナンバーズ」に見事当選した。景品は『海外旅行』のチケットで……!?

か-12-11　1327

電撃文庫

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑫

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3683-6

九月三〇日。学園都市の某所に、御坂美琴は立っていた。待ち合わせである。けれど、あの少年は一向に姿を見せず……。罰ゲームを巡る学園(ラブ)コメディ編スタート？

か-12-12　1372

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑬

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3801-4

九月三〇日の学園都市に侵入した魔術師『前方のヴェント』。彼女が操る謎の魔術により都市機能は完全麻痺、大部分の人間は倒れた。絶望的な状況下で上条当麻は……！

か-12-13　1411

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑭

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-4062-8

一〇月。ローマ正教徒によるデモが全世界で勃発した。混乱の最中、その元凶が霊装「C文書」にあることを聞かされた上条は、土御門と共にフランスへと飛び立つ！

か-12-15　1506

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑮

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-4145-8

治安部隊がアビニョン侵攻作戦で不在の学園都市。そこでは闇の組織らの暗躍が始まっていた。『グループ』の一方通行(アクセラレータ)は、謎の組織『スクール』の存在を知り……！

か-12-16　1537

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑯

鎌池和馬
イラスト　灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-86-086-9

宿敵・後方のアックアがついに動いた。標的とされた上条当麻だが、彼の元には五和がボディガードとしてやってきて……インデックスとの同棲バトル勃発!?

か-12-17　1601

電撃文庫

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑰

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-867591-8

『禁書目録召集令状』が布告された。何者かに爆破されたユーロトンネルを『王室』と共に調査せよ、という任務だった。上条当麻が被る今度の〝不幸〟は、英国にて開幕！

か-12-19　1730

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑱

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-867897-1

ロンドンはクーデターにより堕ちた。影響はイギリス全土に及び、市街では『清教派』と『騎士派』が対立する中、ついに上条当麻は「あの男」と出会う……!!

か-12-20　1787

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868137-7

一方通行ら『グループ』が『ドラゴン』について探る中、それを煩わしく思う統括理事会のメンバーが彼らに牙をむく。同じ時、浜面と絹旗が滝壺を見舞いに行くが……。

か-12-22　1847

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868393-7

上条当麻はインデックスを解き放つため、一方通行（アクセラレータ）は打ち止め（ラストオーダー）を救うため、浜面仕上は滝壺理后を治療するため。三者三様の想いが渦巻く、緊迫のロシア編開幕！

か-12-23　1908

とある魔術の禁書目録（インデックス）㉑

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868762-1

〝大切な少女〟を救いたいと望む少年たちの、絶対に退くことの出来ない戦いは続く……!!　果たして彼らの願いの行方は……緊迫のロシア編、クライマックス突入！

か-12-25　1984

電撃文庫

とある魔術の禁書目録（インデックス）㉒

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868972-4

右方のフィアンマが企てる『計画』が、ついに発動する。『ベツレヘムの星』。十字教信者だけでなく、全世界の人間を「救う」と言われるその計画とは……!?

か-12-26　2017

とある魔術の禁書目録（インデックス）SS

鎌池和馬
イラスト　灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3912-7

上条のクラスで行く鍋パーティのゆくえは？イギリス清教ロンドン女子寮の乱れた？一日とは？　一方通行が闇へと堕ちた、その先には……。本編補完のSSシリーズ！

か-12-14　1456

とある魔術の禁書目録（インデックス）SS②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-8673-42-6

ジーンズ切り裂き魔を追う神裂、半蔵に恋する郭（くるわ）ちゃん、謎の魔草売り少女と出会う上条。刀夜、微妙な強さの超能力者・ナンバーセブン（レベル5）。圧倒的な登場人物で送るSSシリーズ第2弾。

か-12-18　1676

新約　とある魔術の禁書目録

鎌池和馬
イラスト／はいむらきよたか

ISBN978-4-04-870319-2

上条当麻の消失後、全世界に安息の日々が訪れていた。学園都市では、一方通行が騒がしい日常を取り戻し、浜面仕上は新生『アイテム』としての活動を行い……。

か-12-28　2093

新約　とある魔術の禁書目録②

鎌池和馬
イラスト　はいむらきよたか

ISBN978-4-04-870-38-1

上条当麻と一方通行、そして浜面仕上が、ついに交わった。それは、三者三様の『アンタ等何やってた訳』的オンナノコたちへの落とし前イベント勃発を意味していた……！

か-12-30　2169

電撃文庫

なれる！SE 2週間でわかる？SE入門

夏海公司
イラスト／Ixy

ISBN978-4-04-868605-1

きつい！　厳しい！　帰れない！　そんな3Kと戦うシステムエンジニアの過酷な日々を描く問題作。でも、ヒロインは年齢不詳のかわいい女の子なのです。

な-12-6　1965

なれる！SE2 基礎から学ぶ？運用構築

夏海公司
イラスト　Ixy

ISBN978-4-04-868937-3

無事にOJTを乗り越えた工兵が出会った女の子はなぜか立華と犬猿の仲で!?　とある携帯RPGのインフラをめぐって構築と運用の不倶戴天の戦いがはじまる！

な-12-7　2025

なれる！SE3 失敗しない？提案活動

夏海公司
イラスト／Ixy

ISBN978-4-04-870181-5

とある企業から出入り禁止処分を喰らった社長に代わり、工兵が営業をすることに。しかも数千万規模の案件で競合は超大手企業ばかり。はたして勝算はあるのか!?

な-12-8　2069

なれる！SE4 誰でもできる？プロジェクト管理

夏海公司
イラスト／Ixy

ISBN978-4-04-870528-8

とある出版社の本社移転のプロジェクトマネージャーを無茶振りされた工兵。迫る期限、ごねるベンダー各社を前に、未経験のPM業務を完遂できるのか!?

な-12-9　2129

なれる！SE5 ステップ・バイ・ステップ？カスタマーエンジニア

夏海公司
イラスト／Ixy

ISBN978-4-04-870809-8

「あんた西日本と東日本どっちが好き？」立華のその一言が過酷な出張への一里塚。各地を転々とした後、立華とともに辿り着いたのは――なぜか工兵の実家で!?

な-12-10　2187

電撃文庫

俺の妹がこんなに可愛いわけがない

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-867180-4

「キレイな妹がいても、いいことなんて一つもない」妹・桐乃と冷戦状態にあった兄の京介は、ある日突然、桐乃からトンデモない〝人生相談〟をされ……。

ふ-8-5　1639

俺の妹がこんなに可愛いわけがない②

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-867426-3

「責任とりなさい！」とある理由で桐乃を怒らせた京介に下った指令（人生相談）とは、『夏の想い出』作り。どうも都内某所で、なんたらとかいう祭りがあるらしく……。

ふ-8-6　1696

俺の妹がこんなに可愛いわけがない③

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-867758-5

お互いの書いた小説で口論になった桐乃と黒猫。ところが何を間違ったのか、桐乃の書いた「ケータイ小説」が絶賛されて、近々作家デビューすることに……!?

ふ-8-7　1744

俺の妹がこんなに可愛いわけがない④

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-867934-3

沙織が開いた桐乃のケータイ小説発売記念パーティに招かれた京介。そこには何故かメイド姿の桐乃がいて……。そして、桐乃の〝最後の人生相談〟とは――？

ふ-8-8　1803

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑤

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-8682-1-8

「じゃあね、兄貴」――別れの言葉を告げ、俺のもとから旅立った桐乃。……別に寂しくなんかないけどな。〝先の読めない〟ドラマチックコメディ、第5弾！

ふ-8-10　1876

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑥

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-868538-2

あやせから新たな相談を受けたり、友人の赤城とアキバ巡りをしたりと、いつもの（？）騒々しい日常が戻ってきたかと思いきや……沙織の様子がおかしい!?

ふ-8-11　1938

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑦

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-870052-8

「――あんた、あたしの彼氏になってよ」桐乃の思わぬ〝告白〟に、京介は――？　シリーズ最大級の山場（？）を迎える、ドラマチックコメディ第7弾!!

ふ-8-12　2031

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑧

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-870486-1

「私と付き合ってください」新たな局面を迎えた恋愛模様。黒の予言書『運命の記述』に秘められた少女の〝願い〟とは!?　兄妹の関係にも、一大転機が訪れる――？

ふ-8-13　2122

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑨

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-870813-5

『あたしの姉が電波で乙女で聖なる天使』『カメレオンドーター』『突撃 乙女ロード！』『過ちのダークエンジェル』他。それぞれの視点で語られる特別編！

ふ-8-14　2185

はじめてのクソゲー

麻宮 楓
イラスト／ネムネム

ISBN978-4-04-870869-2

目当ての国民的ゲームが売り切れたその日、僕は運命的な出会いを果たす。それはあらゆるバグだらけのクソゲーだけど、そのおかげで仲良くなった女の子は実は――。

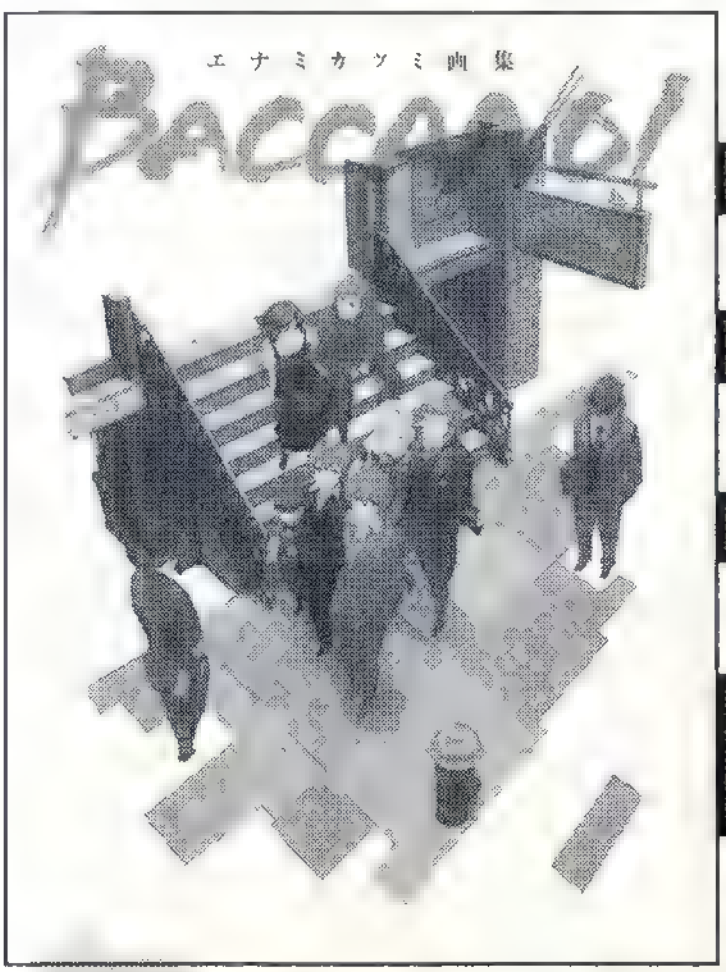
あ-25-6　2194

好評発売中! イラストで魅せるバカ騒ぎ!(バッカーノ)

エナミカツミ画集
『バッカーノ!』

体裁:A4変形・ハードカバー・112ページ　定価:2,940円(税込)

人気イラストレーター・エナミカツミの、待望の初画集がついに登場!
『バッカーノ!』のイラストはもちろんその他の文庫、ゲームのイラストまでを多数掲載!
そしてエナミカツミ&成田良悟ダブル描き下ろしも収録の永久保存版!



注目のコンテンツはこちら!

BACCANO!
『バッカーノ!』シリーズのイラストを大ボリューム特別掲載。

ETCETERA
『ヴぁんぷ!』をはじめ、電撃文庫の人気タイトルイラスト。

ANOTHER NOVELS
ゲームやその他文庫など、幅広い活躍の一部を収録。

名作劇場 ばっかーの!
「チェスワフぼうやと(ピルの)森の仲間達」
豪華描きおろしで贈る『バッカーノ!』のスペシャル絵本!

※定価は税込(5%)です。

BACCANO!

画集

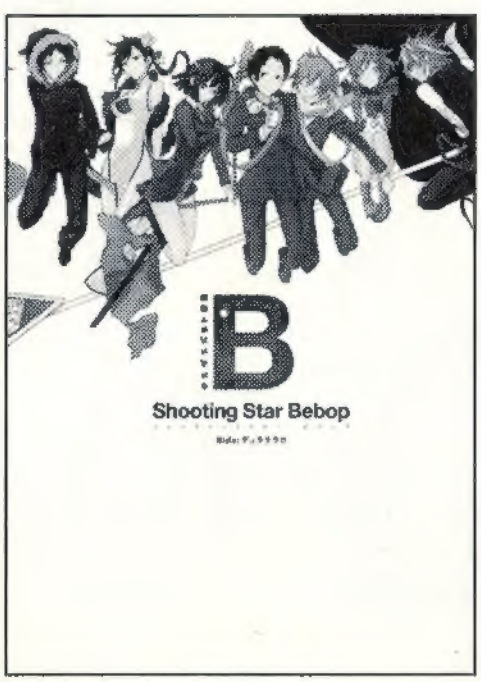
ヤスダスズヒト待望の初画集登場!!

イラストで綴る歪んだ愛の物語――。

デュラララ!!×画集!!

Shooting Star Bebop
Side:DRRR!!

ヤスダスズヒト画集
シューティングスター・ビバップ
Side:デュラララ!!



content

■『デュラララ!!』

大好評のシリーズを飾った美麗イラストを一挙掲載!!　歪んだ愛の物語を切り取った、至高のフォトグラフィー!!

■『越佐大橋シリーズ&世界の中心、針山さん』

同じく人気シリーズのイラストを紹介!!　戦う犬の物語&ちょっと不思議な世界のメモリアル。

■『Others』

『鬼神新選』などの電撃文庫イラストをはじめ、幻のコラムエッセイや海賊本、さらにアニメ・雑誌など各媒体にて掲載した、選りすぐりのイラストを掲載!!

著/ヤスダスズヒト　定価:2,415円(税込)　A4版/128ページ
※定価は税込(5%)です。

画集

いとうのいぢ画集

文庫でのイラストを中心に、美麗なイラストを完全再現。
多数の描き下ろしイラストも収録した、進化する『いとうのいぢ』に刮目せよ。

いとうのいぢ画集

紅蓮（ぐれん）

『いとうのいぢ』に刮目せよ。
『灼眼のシャナ』絵師・
いとうのいぢが贈る初画集！

いとうのいぢ画集Ⅱ

華焔（かえん）

初画集から二年――。
進化するイラストレーター
いとうのいぢの世界が
ここに！

いとうのいぢ画集Ⅲ

蒼炎（そうえん）

これは、『灼眼のシャナ』
挿絵師いとうのいぢが
描いてきた軌跡、
その詳録である。

好評
発売中!!

著／いとうのいぢ　発行／アスキー・メディアワークス
定価：2,940円　装丁／A4変型・128ページ・オールカラー

画集

原作&アニメ&ゲームなど春香の魅力が詰まった至高の一冊、絶賛発売中！

乃木坂春香ガ全テ

電撃文庫編集部 編

グラビアパート

原作&アニメ版権の美麗イラストをはじめ、N's（能登麻美子×後藤麻衣×清水香里×植田佳奈×佐藤利奈）のグラビアインタビューなど、大増量ページ数で贈るビジュアルコーナー。春香の魅力をたっぷりご堪能ください。

ストーリーパート

原作小説の全話を徹底解説！　ストーリーの中に秘められた設定や丸秘エピソードなどもコラムで大紹介！

キャラクターパート

原作版とアニメ版の両方のビジュアルをふんだんに使用し、『乃木坂春香』の世界を彩る賑やかなキャラクターたちを徹底紹介！　いまだ世に出たことのない設定画などもお目見えしちゃうかも！

メディアミックスパート

TVアニメ第2期のレビュー&第1期のストーリー紹介、ゲームやコミック、グッズ化などなど、春香のメディアミックスの全てを網羅！

スペシャルパート

①五十嵐雄策インタビュー

原作者の五十嵐雄策氏が、気になる20の質問に答えてくれました！　原作誕生&制作の秘話がここに――。

②美夏ちゃん編集長が行く、出張版！

ゴマちゃこと後藤麻衣さんが大活躍した「電フェス2009」を、ゴマちゃん視点で完全レポート！　メインステージや公開録音の裏側だけでなく、会場内を見学した模様を収録!!

③しゃあ描き下ろし、ちょっとえっちな絵本

しゃあ&五十嵐雄策の両氏が描き下ろした、ちょっとえっちな美夏の絵本を本邦初公開！　ちびっこメイドのアリスも参戦して、大人に憧れる美夏が取った行動は――!?

『乃木坂春香ガ全テ』
電撃文庫編集部 編
定価:1,680円（税込）　B5判／176ページ
絶賛発売中　　イラスト／しゃあ

電撃の単行本

※定価は税込(5%)です。

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、成田良悟(『バッカーノ！』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川　浩・徒花スクモ(『図書館戦争』)、川原　礫(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

●賞(共通)

大賞……正賞+副賞100万円
金賞……正賞+副賞 50万円
銀賞……正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ)

メディアワークス文庫賞
正賞+副賞 50万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞 20万円

編集部から選評をお送りします！
小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。
http://asciimw.jp/award/taisyo/

主催：株式会社アスキー・メディアワークス